

一般国道159号改築（鹿島バイパス）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

羽咋市

# 四柳白山下遺跡Ⅲ

2017

石 川 県 教 育 委 員 会  
（公財）石川県埋蔵文化財センター

よつやなぎはくさんした  
四柳白山下遺跡Ⅲ

2017

石川県教育委員会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は四柳白山下遺跡第2次調査E地区に係る発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は羽咋市四柳町地内である。
- 3 調査原因は一般国道159号改築(鹿島バイパス)であり、同工事を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省金沢工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は、平成7(1995)年度に石川県教育委員会からの委託を受けて社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が実施した。また、平成12・13(2000・01)年度に出土品整理を、平成16・27(2004・15)年度に報告書原稿作成を、平成28(2016)年度に報告書編集・刊行を、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成24年度まで財団法人石川県埋蔵文化財センター)が、石川県教育委員会から委託を受けて実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当課・担当者は次のとおりである。

期 間 平成7年4月18日～同年12月23日 面 積 3,450㎡  
担 当 調査課調査第2係 担当者 川畑 誠(主任)、澤辺利明(調査員)
- 7 出土品整理は、企画部整理課が担当した。
- 8 自然科学的分析として木製品の樹種同定を、平成16(2004)年度に株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
- 9 報告書の編集・刊行は、調査部関係調査グループが担当した。執筆分担は次のとおりで、遺物の写真撮影は池田拓が行った。

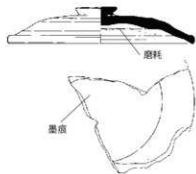
第1～3章、第5章 川畑 誠(調査部特定事業調査グループリーダー)  
第4章 布尾和史(調査部調査第1課主任主事、当時)、岩瀬由美(々)、川畑
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、羽咋市教育委員会、布尾和史(現福島県北塩原村教育委員会)
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記及び次頁のとおりである。
  - (1) 遺構実測図等の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅴ系(日本測地系)に準拠した。
  - (2) 水平水準は海拔高であり、T.P(東京湾平均海面標高)による。
  - (3) 遺構の名称は第3章第1節の略記号で表記し、遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。
  - (4) 写真図版の遺構、遺物は、任意の縮尺である。

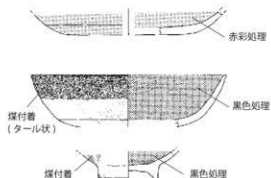
## 【挿図等凡例】

- 1 構図図版は縮尺1/60、1/80を基本とし、規模や図版の性格により縮尺1/30、1/40等を適宜用いた。
- 2 土器等遺物図版は縮尺1/3を基本とし、縮尺が異なるものは都度付した。断面の塗りわけ・トーン等による実測図の表現は、須恵器が断面黒塗り、その他は白抜きとし、トーン等の表現は下図のとおりである。

須恵器



土師器



- 3 木製品実測図の木取り等を示すために木目を描き込んでいるが、木目の間隔は目の詰まり具合を表現する程度で、実際の木目間隔を記したものではない。
- 4 遺物観察表のうち、須恵器、土師器の胎土については下表のとおり分類を行った。

須恵器

胎土分類	特徴	胎土産地
a	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片は認められない。 -白色焼砂粒と1~3mm大の角張った石灰・長石等の砂礫が多量に散らばる。 -彫れ口はざらつく。コンクリートの質感をもつ。	鳥屋渡群跡 [中庭窪形北部]
b	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片が認められる。 -赤褐色粒(シャモット)が多く散らばる。 -小さな気泡(吹き穴)をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽時渡群跡
c	-素地は粘着で顕著な印象を受ける。海綿骨片は認められない。 -白色焼砂粒の他、2mm程度の割れた石灰・長石・赤色粒が若干散らばる。	鹿登 [高松窪群跡外]
d	-素地は粘着で、海綿骨片が認められる。 -多量の微砂粒の他、1~2mm大の長石が認められる。 -彫れ口はばさつく。コンクリートの質感をもつ。	鳥屋渡群跡外
e	-素地は粘着で、しっかりとした質感をもつ。海綿骨片は認められない。 -微砂粒は少なく、1~3mm大の角張った石灰・長石等の砂礫が多量に散らばる。	鳥屋渡群跡 [中庭窪形北部]
f	-素地は粘着で、しっかりとした質感をもつ。 -微砂粒、1~4mm大の角張った石灰・長石等の砂礫が多量に散らばる。	鳥屋渡群跡 [中庭窪形北部]
g	-小と中間。素地は粘性に乏しく、海綿骨片が多く認められる。 -微砂粒、石灰粒はほとんど認められない。 -気泡をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽時渡群跡
h	-素地は粘着で、海綿骨片が認められない。 -多量の微砂粒の他、1~2mm大の長石が若干散らばる。 -彫れ口はざらつく。	鳥屋渡群跡 [中庭窪形西部]
i	-素地は粘性に乏しく、しっかりとした質感をもつ。海綿骨片は認められない。 -微砂粒の他、1~5mm程度の割れた長石を主体とした砂礫が認められる。	鹿登 [高松窪群跡外]
j	-素地は粘性に乏しく、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が認められる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石が多く散らばる。 -彫れ口はざらつく。土師器胎土分類と類似。	鳥屋渡群跡
k	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片が認められる。 -石灰質の微砂粒、2mm大の石灰粒が少し散らばる。 -気泡がほとんどなく、白抜き。	羽時渡群跡外
l	-素地は粘着で、キメが細かい。海綿骨片は認められない。 -白色焼砂粒、1mm大の石灰粒がごく少量散らばる。	鳥屋渡群跡外
x	-その他	不明

土師器

胎土分類	特徴	備考
ア	-素地は粒子が粗く、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が多く認められる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石・赤色粒等の砂礫が多量に散らばる。	主に 食器類
イ	-素地は粒子が中や粗い。海綿骨片が認められる。 -1~3mm以下の長石類砂礫を主体に、角張った1~3mm大の石灰・長石等の砂礫が認められる。	
ウ	-素地は粘着で、海綿骨片が多く認められる。 -比較的粒径が揃った3mm大の石灰・長石・赤色粒が認められる。	
エ	-素地は粘着で、海綿骨片が多く認められる。 -0.5mm大の赤色粒を含む微砂粒が認められる。	主に 煮炊具
オ	-素地は砂っぽく、海綿骨片が認められない。 -1~2mm大の石灰・長石が多く散らばる。 -気泡があり、彫れ口はざらつく。コンクリートの質感をもつ。	
カ	-素地は粒子が粗く、砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が認められる。 -石灰、赤色粒等の微砂粒が認められる。 -細かい気泡が立ち立つ。	
キ	-素地は粘着で、海綿骨片が若干散らばる。 -石灰、赤色粒等の微砂粒が認められる。 -細かい気泡が立ち立つ。	
ク	-素地は粘着で、海綿骨片が多く認められる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石・赤色粒等が認められる。	
ケ	-素地は粒子が粗く、海綿骨片が認められない。 -微砂粒に加え、金層目、1~3mm大の角張った石灰・長石等が認められる。	

## 目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と基本土層層序	12
第1節 調査の方法	12
第2節 基本土層層序	14
第4章 調査の成果	16
第1節 調査の概要	16
第2節 第Ⅱ面の遺構と遺物	19
第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物	25
第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物	26
第5節 第Ⅳ面の遺構と遺物	64
第5章 総 括	102
第1節 E地区古代調査面の変遷について	102
第2節 A～C・E地区の古代集落の変遷について	106

写真図版

## 挿図目次

第1図	調査地区区割り図(縮尺1/2,500)……………	3	第32図	第Ⅲ-2面SE1、SK2出土遺物実測図 (縮尺1/3-1/6)……………	41
第2図	遺跡の位置……………	5	第33図	第Ⅲ-2面SK土層断面図(縮尺1/60)……………	41
第3図	周辺の地勢……………	6	第34図	第Ⅲ-2面水田遺構平面図(縮尺1/100)……………	42
第4図	周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000)……………	8	第35図	第Ⅲ-2面SX土層断面図(縮尺1/40)……………	43
第5図	調査地区グリッド配置(縮尺1/500-2,000) ……………	13	第36図	第Ⅲ-2面水田遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………	45
第6図	第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ ……………	14	第37図	第Ⅲ-2面SD8堰平面図・断面図 (縮尺1/30)……………	46
第7図	基本土層層序模式図……………	15	第38図	第Ⅲ-2面水田遺構(SD8・10・11) 土層断面図(縮尺1/60)……………	47
第8図	第Ⅳ面基本土層位置図(縮尺1/550)……………	17	第39図	第Ⅲ-2面SD8出土遺物実測図1 (縮尺1/3-1/6)……………	49
第9図	南壁土層柱状図(縮尺1/60)……………	17	第40図	第Ⅲ-2面SD8出土遺物実測図2 (縮尺1/3)……………	50
第10図	第Ⅳ面下試掘調査土層柱状図(縮尺1/60) ……………	18	第41図	第Ⅲ-2面SD8出土遺物実測図3 (縮尺1/3-1/6)……………	51
第11図	第Ⅱ面平面図(縮尺1/250)……………	20	第42図	第Ⅲ-2面SD8・10出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………	52
第12図	第Ⅱ面(耕作土除去後)平面図 (縮尺1/250)……………	21	第43図	第Ⅲ-2面SD土層断面図(縮尺1/60)……………	54
第13図	第Ⅱ面土層断面図(縮尺1/60)……………	21	第44図	第Ⅲ-2面SD他出土遺物実測図 (縮尺1/3-1/6)……………	55
第14図	第Ⅱ面平坦面A・Cトレンチ土層断面図 (縮尺1/60)……………	22	第45図	第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)……………	57
第15図	第Ⅱ面平坦面D・E・Gトレンチ土層断面図 (縮尺1/60)……………	23	第46図	第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2 (縮尺1/2-1/3)……………	58
第16図	第Ⅱ面出土遺物実測図(縮尺1/3)……………	24	第47図	第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図3 (縮尺1/3-1/6)……………	59
第17図	第Ⅲ-1面土層断面図(縮尺1/60)……………	25	第48図	第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4 (縮尺1/3)……………	60
第18図	第Ⅲ-1面SD4出土遺物実測図(縮尺1/3) ……………	26	第49図	第Ⅳ面遺構配置図(縮尺1/250)……………	64
第19図	第Ⅲ-1・2面遺構配置図(縮尺1/250)……………	27	第50図	第Ⅳ面平面図1(縮尺1/80)……………	65
第20図	第Ⅲ-1・2面平面図1(縮尺1/80)……………	28	第51図	第Ⅳ面平面図2(縮尺1/80)……………	66
第21図	第Ⅲ-1・2面平面図2(縮尺1/80)……………	29	第52図	第Ⅳ面平面図3(縮尺1/80)……………	67
第22図	第Ⅲ-1・2面平面図3(縮尺1/80)……………	30	第53図	第Ⅳ面平面図4(縮尺1/80)……………	68
第23図	第Ⅲ-1・2面平面図4(縮尺1/80)……………	31	第54図	第Ⅳ面平面図5(縮尺1/80)……………	69
第24図	第Ⅲ-1・2面平面図5(縮尺1/80)……………	32	第55図	第Ⅳ面平面図6(縮尺1/80)……………	70
第25図	第Ⅲ-1・2面平面図6(縮尺1/80)……………	33	第56図	第Ⅳ面平面図7(縮尺1/80)……………	71
第26図	第Ⅲ-1・2面平面図7(縮尺1/80)……………	34	第57図	第Ⅳ面平面図8(縮尺1/80)……………	72
第27図	第Ⅲ-1・2面平面図8(縮尺1/80)……………	35	第58図	第Ⅳ面平面図9(縮尺1/80)……………	73
第28図	第Ⅲ-1・2面平面図9・10(縮尺1/80)……………	36	第59図	第Ⅳ面平面図10(縮尺1/80)……………	74
第29図	第Ⅲ-2面SE1平面図・土層断面図 (縮尺1/40)……………	38			
第30図	第Ⅲ-2面SE1出土遺物実測図1 (縮尺1/3-1/6)……………	39			
第31図	第Ⅲ-2面SE1出土遺物実測図2 (縮尺1/6)……………	40			

第60図	第IV面SB1平面図・土層断面図 (縮尺1/60) ……………	76	第72図	第IV面SD89・90、ピット平面図・土層断面図 (縮尺1/40) ……………	92
第61図	第IV面SB1出土遺物実測図(縮尺1/3) ……	76	第73図	第IV面包含層出土遺物実測図1(縮尺1/3) ……………	94
第62図	第IV面SD土層断面図1(縮尺1/60) ……	77	第74図	第IV面包含層出土遺物実測図2(縮尺1/3) ……………	95
第63図	第IV面SD出土遺物実測図1 (縮尺1/3・1/6) ……………	79	第75図	第IV面包含層出土遺物実測図3(縮尺1/3) ……………	96
第64図	第IV面SD出土遺物実測図2 (縮尺1/3・1/6) ……………	80	第76図	第IV面包含層出土遺物実測図4 (縮尺1/2・1/3) ……………	97
第65図	第IV面SD出土遺物実測図3 (縮尺1/2・1/3) ……………	82	第77図	第IV面包含層他出土遺物実測図(縮尺1/3) ……………	98
第66図	第IV面SD土層断面図2(縮尺1/60) ……	84	第78図	E地区遺構変遷図(縮尺1/500) ……	104
第67図	第IV面SD土層断面図3(縮尺1/60) ……	85	第79図	A～C・D地区変遷図1(縮尺1/1,000) ……………	112
第68図	第IV面SD土層断面図4(縮尺1/60) ……	87	第80図	A～C・D地区変遷図2(縮尺1/1,000) ……………	113
第69図	第IV面SD土層断面図5(縮尺1/60) ……	88			
第70図	第IV面SD出土遺物実測図4(縮尺1/3) ……	89			
第71図	第IV面SD、ピット出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/6) ……………	90			

## 目 次

第1表	各年度の調査概要一覧表 ……………	2	第15表	第IV面出土土器類観察表1 ……………	99
第2表	調査・整理体制 ……………	4	第16表	第IV面出土土器類観察表2 ……………	100
第3表	遺跡周辺の主な発掘調査 ……………	7	第17表	第IV面出土土石製品観察表 ……………	100
第4表	周辺の遺跡一覧表 ……………	9	第18表	第IV面出土木製品観察表 ……………	101
第5表	主な調査面の対応関係 ……………	12	第19表	古代集落の時間的位置付け ……………	102
第6表	第II面平坦面の規模・標高等一覧表 ……	19	第20表	E地区第IV面・第III-2面の変遷案 ……	103
第7表	第II面出土土器観察表 ……………	25	第21表	E地区出土墨書土器等時期別一覧表 ……	105
第8表	第II面出土金属製品観察表 ……………	25	第22表	A～C・E地区規模別掘立柱建物一覧表 ……………	107
第9表	第II面出土木製品観察表 ……………	25	第23表	A～C・E地区墨書土器・転用硯等一覧表 ……………	109
第10表	第III-1・2面出土土器観察表1 ……	61	第24表	A～C・E地区墨書土器・転用硯等時期別一 覧表 ……………	110
第11表	第III-1・2面出土土器観察表2 ……	62			
第12表	第III-2面出土土器観察表 ……………	62			
第13表	第III-2面出土木製品観察表1 ……	62			
第14表	第III-2面出土木製品観察表2 ……	63			

## 写真図版目次

図版1	遺跡遠景(平成7年度撮影、南から)		第Ⅱ面M・N-3・4区平坦面8完掘状況 (北から)
図版2	遺跡遠景(平成7年度撮影、西から)	図版10	第Ⅲ-1面O-5区掘り下げ作業風景(北から)
	第Ⅲ-2面完掘状況(北西から)		第Ⅲ-1面遺構検出状況 (第Ⅱ面耕作土除去状況、北から)
図版3	第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況 (北東から)		第Ⅲ-1面N-4・5区SD4検出状況(北から)
	第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況 (南西から)		第Ⅲ-1面N-4区SD4完掘状況(西から)
図版4	第Ⅳ面完掘状況(西から)		第Ⅲ-1面M・N-3・4区SD5周辺完掘状況 (北西から)
	南壁土層断面B(北から)		第Ⅲ-1面N・O-3・4区SD5・7完掘状況 (南東から)
	南壁土層断面D(北から)		第Ⅲ-1面M・N-3・4区周辺完掘状況(北から)
図版5	第Ⅱ面完掘状況(南から)		第Ⅲ-1面O-3区周辺完掘状況(北東から)
	第Ⅱ面完掘状況(北西から)	図版11	第Ⅲ-2面N-4・5区SE1、SD17完掘状況 (東から)
図版6	第Ⅱ面完掘状況(西から)		第Ⅲ-2面N-4・5区SE1土層断面(北東から)
	第Ⅱ面O・P-4・5区平坦面1・2、SD1完掘状況 (東から)		第Ⅲ-2面N-4・5区SE1、SD17完掘状況 (西から)
図版7	第Ⅱ面O・P-4・5区平坦面1・2完掘状況 (西から)		第Ⅲ-2面N-5区SE1完掘状況(東から)
	第Ⅱ面O・P-4・5区平坦面1～3完掘状況 (南西から)		第Ⅲ-2面N-5区SE1完掘状況(北から)
図版8	第Ⅱ面表土除去作業風景(南西から)	図版12	第Ⅲ-2面O・P-4・5区SX1検出状況(東から)
	第Ⅱ面遺構検出作業風景(北西から)		第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX2・3検出状況 (南西から)
	第Ⅱ面O・P-4～6区掘り下げ作業(南から)	図版13	第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況 (北東から)
	第Ⅱ面O-4区SD1土層(h-h')(東から)		第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況 (南西から)
	第Ⅱ面O・P-4・5区平坦面2、SD1完掘状況 (東から)		第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況 (北から)
	第Ⅱ面N・O-4区SD1完掘状況(西から)	図版14	第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1、SD8完掘状況 (南東から)
	第Ⅱ面O-4区SD2完掘状況(南東から)		図版15
	第Ⅱ面O・P-3・4区平坦面1～4、SD2 完掘状況(西から)		第Ⅲ-2面O・P-3・4区SX2完掘状況 (北東から)
図版9	第Ⅱ面O・P-4・5区平坦面1～3完掘状況 (南から)		第Ⅲ-2面O・P-4・5区SX1掘り下げ作業風景 (北東から)
	第Ⅱ面N-4区平坦面2・6間土層断面(北から)		第Ⅲ-2面O・P-4・5区SX1耕作痕跡検出状況 (北東から)
	第Ⅱ面M・N-4・5区平坦面2・5・6周辺 完掘状況(北西から)		第Ⅲ-2面O-3・4区SX3耕作痕跡検出状況 (南西から)
	第Ⅱ面O・P-4区平坦面3完掘状況(南から)		第Ⅲ-2面O-4区SX3水口完掘状況 (北西から)
	第Ⅱ面M・N-5・6区平坦面5・6周辺 完掘状況(北から)	図版16	第Ⅲ-2面O-3区SD8埋完掘状況(東から)
	第Ⅱ面M・N-4・5区平坦面7・8完掘状況 (北から)		
	第Ⅱ面M-3区平坦面8西端畦土層断面 (北から)		



- 図版 17 第Ⅲ-2面O-3区SD8横掘り発掘状況(南から)  
第Ⅲ-2面N-3区SD8発掘状況(西から)  
第Ⅲ-2面N・O-4・5区SD10周辺発掘状況(北東から)  
第Ⅲ-2面N・O-3・4区SD11発掘状況(南西から)  
第Ⅲ-2面N-5区SK1発掘状況(北西から)  
第Ⅲ-2面N-5区SK2発掘状況(北東から)  
第Ⅲ-2面L・M-2・3区SD12発掘状況(東から)  
第Ⅲ-2面M-3・4区SD13発掘状況(東から)  
第Ⅲ-2面L-2・3区SD14発掘状況(北から)
- 図版 18 第Ⅲ-2面L・M-3・4区SD13発掘状況(西から)  
第Ⅲ-2面L・M-3・4区SD14発掘状況(北から)
- 図版 19 第Ⅲ-2面L・M-2・3区SD12・13周辺発掘状況(東から)  
第Ⅲ-2面M・N-4区SD16周辺発掘状況(南東から)  
第Ⅲ-2面M・N-5区SD19発掘状況(西から)  
第Ⅲ-2面N-4区落ち込み1発掘状況(北東から)  
第Ⅳ面P-4区鳥形木製品出土状況(南西から)  
第Ⅳ面O・P-3～6区遺構検出状況(南西から)  
第Ⅳ面L・M-2・3区遺構検出状況(北から)  
第Ⅳ面N-3区周辺遺構検出状況(南から)
- 図版 20 第Ⅳ面遺構検出状況(北から)  
第Ⅳ面発掘状況(北から)
- 図版 21 第Ⅳ面O・P-3・4区SB1、SD87・88周辺発掘状況(南西から)  
第Ⅳ面O-3区SD89・90発掘状況(南から)
- 図版 22 第Ⅳ面O-5区SD10(古)周辺発掘状況(北東から)  
第Ⅳ面N-3区SD11(古)・53～61発掘状況(南西から)  
第Ⅳ面L・M-2・3区SD14(古)・38周辺発掘状況(南から)  
第Ⅳ面M-4区SD80土層断面5～5'(南西から)  
第Ⅳ面N-4区SD80土層断面7～7'遺物出土状況(東から)  
第Ⅳ面M-4区SD80土層断面6～6'(南西から)  
第Ⅳ面N-5区SD80周辺発掘状況(北東から)
- 図版 23 第Ⅳ面M-4区SD80周辺発掘状況(西から)  
第Ⅳ面L・M-2・3区発掘状況(西から)  
第Ⅳ面L・M-2・3区SD22～34周辺発掘状況(北から)  
第Ⅳ面L・M-2・3区SD48～56周辺発掘状況(南から)  
第Ⅳ面M・N-3・4区SD65～68発掘状況(北から)  
第Ⅳ面M・N-4区SD65～72周辺発掘状況(西から)  
第Ⅳ面M・N-3・4区SD67～72周辺発掘状況(北から)  
第Ⅳ面M・N-5・6区SD74～79周辺発掘状況(北東から)  
第Ⅳ面O-3～5区SD70・80周辺掘削作業風景(北東から)
- 図版 24 第Ⅳ面O・P-3・4区SD87・88周辺発掘状況(北東から)  
第Ⅳ面O-3区SD11・89・90発掘状況(南西から)
- 図版 25 第Ⅳ面M・N-5・6区落ち込み6周辺発掘状況(北から)  
第Ⅳ面O-5区P21～24発掘状況(北東から)  
第Ⅳ面M-5・6区ビット群発掘状況(北から)  
第Ⅳ面M-5区ビット群発掘状況(北から)  
第Ⅳ面下試掘調査風景(試掘坑ア：北から)  
第Ⅳ面下土層試掘坑ア-②(西から)  
第Ⅳ面下土層試掘坑イ-④(東から)  
調査区埋め戻し作業風景(北西から)
- 図版 26 第Ⅱ～Ⅲ-2面出土遺物
- 図版 27 第Ⅲ-2面出土遺物1
- 図版 28 第Ⅲ-2面出土遺物2
- 図版 29 第Ⅲ-2面出土遺物3
- 図版 30 第Ⅲ-2面出土遺物4
- 図版 31 第Ⅲ-2面出土遺物5
- 図版 32 第Ⅳ面出土遺物1
- 図版 33 第Ⅳ面出土遺物2
- 図版 34 第Ⅳ面出土遺物3
- 図版 35 第Ⅳ面出土遺物4
- 図版 36 第Ⅳ面出土遺物5
- 図版 37 E地区出土墨書土器

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査の経過

一般国道159号改築(鹿島バイパス)は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省金沢工事事務所)が所管する事業である。一般国道159号線は、七尾市を起点とし羽咋市、津幡町などを経て金沢市に至る延長約70kmの主要幹線道路で、金沢市と中能登地域を結ぶ大動脈の役割を担っている。そのうち鹿島バイパスは、昭和48(1973)年度に七尾市八幡町から羽咋市四柳町(延長約13.3km)の慢性的な交通渋滞の解消を目指して事業化されたものであり、昭和48年度の国土交通省(当時、建設省)から石川県教育委員会(以下、県教委)に埋蔵文化財の所在についての照会に始まり、中能登町(当時、鹿島町)地内の10ヶ所の遺跡で、順次発掘調査が実施されてきた。

このような開発事業に際して周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する場合、事業者は文化財保護法第94条の規定にもとづき、その保護措置を執ることが求められる。県教委では、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るため、各年度に国・県等の関係機関・部局の協力を得て、次年度以降の開発事業計画の早期把握と、必要に応じて分布調査等により埋蔵文化財の有無を確認することで、工事前段階での埋蔵文化財の正確な把握と、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認された場合の保護措置に関する事業者と調整を行っている。これは、工事中の埋蔵文化財の不時発見は十分な保護措置が実施できない恐れがあるばかりでなく、それに協力する側も予算措置等の準備を含めた対応に時間を要すること、さらに工事自体の中断に伴う事業進行への影響を避けるための措置である。

本遺跡は、昭和23(1948)年の耕地整理の際に地元住民の手により古代の須恵器等が採集されていたものの、遺跡としては周知されていなかった。遺跡としての認定は、平成元(1989)年度に羽咋市教育委員会が同市四柳地内で鹿島バイパスに伴う個人住宅等の移転計画に対して埋蔵文化財の確認調査を実施、奈良時代を中心とする遺跡の広がりを確認したことに始まる。鹿島バイパス事業地内については、昭和62年10月26日付け建北金二調第864号で建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長(当時)より石川県立埋蔵文化財センター(当時)に分布調査の依頼があった。それを受けて、平成元(1989)年3月8日～11日に石川県立埋蔵文化財センターが、事業区域内延長約800mに対して重機による試掘調査を実施し、大町A遺跡等4遺跡の存在を確認した。うち四柳白山下遺跡については、延長約350mを測る区間で中世および奈良・平安時代の遺物包含層を2層確認し、仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」として約12,000㎡が保護対象となる旨、平成元年3月24日付け埋文第205号で回答をおこなっている。なお、この仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」は、隣接する既存の集落遺跡名を仮名称として回答したものである。正式の遺跡名称は、羽咋市教育委員会と協議のうえ、周知の埋蔵文化財「四柳やちだ遺跡(現、県遺跡番号0711200)」「四柳宮の越古銭遺跡(同0711800)」とは異なる、調査区周辺の小字名「白山下」を付した新規の集落遺跡「四柳白山下遺跡(同0711700)」とされている。

その後、県教委は、建設省金沢工事事務所と協議を行い、埋蔵文化財への影響を軽減する道路線形の変更が困難であることから、これらの事業地内の埋蔵文化財について記録保存措置(発掘調査)を実施することとなった。

現地での発掘調査は、当初、平成6(1994)年度以降の2ヶ年で終了する計画が策定され、平成6年度から県教委の依頼を受けて社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査に着手している。しかしながら、平成7(1995)年度以降の発掘調査により、石動山系から流出する小河川の度重なる氾濫に伴う

土砂で埋没した縄文時代～近世に至る集落・耕作地が良好に遺存することが次第に明らかとなり、結果として平成12(2000)年までの足かけ7ヶ年、発掘調査延面積45,900㎡におよぶ長期の調査となった。各調査年度の調査箇所・面積等は、第1表、第1図を参照されたい。

本書に報告する調査地区の出土品については、遺失物法第4条第1項の規定にもとづき、平成7年度に石川県埋蔵文化財センターが羽咋警察署に埋蔵物の発見届を提出し、羽咋警察署から発掘届の通知を受けた県教委により文化財認定が行われている。現在、出土品は石川県埋蔵文化財センターに収蔵・保管のうえ公開・活用を行っている。

なお、平成6・7年度に実施したA～C地区及びD地区第Ⅱ～Ⅳ面の発掘調査の成果については、平成16・17年度に県教委(財)石川県埋蔵文化財センターが2冊の発掘調査報告書を刊行している。

第1表 各年度の調査概要一覧表

調査回数	調査年度	調査地区・面	調査面積(㎡)	調査主体	主な時代
第1次	平成6(1994)	A～D地区0面	5,800	(社)石川県埋蔵文化財保存協会	奈良～平安前期、中世
第2次	平成7(1995)	C地区、D地区Ⅱ～Ⅳ面	4,950		弥生～古墳、奈良～平安、中世
		E地区	3,450	奈良～平安	
第3次	平成8(1996)	D地区Ⅴ～Ⅷ面、 F地区0-I～Ⅴ面	6,200	(社)石川県埋蔵文化財保存協会	縄文、弥生～古墳、飛鳥～平安前期、平安中期、 中世
第4次	平成9(1997)	F地区Ⅵ～Ⅷ面	2,400		縄文、弥生～古墳
第5次	平成10(1998)	G地区0-I面、Ⅲ面	2,800	(財)石川県埋蔵文化財センター	平安、中世～近世
		G地区Ⅲ-2～Ⅷ-2面、 H地区	7,900		縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、 中世～近世
第6次	平成11(1999)	I地区、J地区Ⅵ-1面	7,400	(財)石川県埋蔵文化財センター	弥生～古墳、飛鳥～平安、中世～近世
第7次	平成12(2000)	J地区Ⅶ-2～4面、 K地区	5,000		弥生～古墳、飛鳥～平安、中世～近世

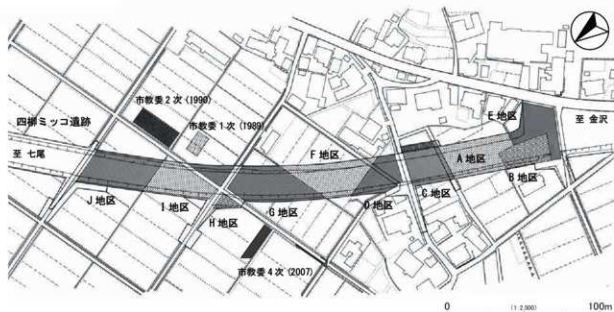
※網掛け、ゴチック文字は、本報告書掲載。

## 第2節 発掘作業の経過

本書に報告する四柳白山下遺跡E地区の発掘調査は、平成7年度に県教委の委託事業として、(社)石川県埋蔵文化財保存協会が担当した。各年度の調査体制は第2表のとおりである。

現地調査は、平成7年4月18日～同年12月23日に、C・D地区とあわせて実施した。E地区(調査対象平面積1,150㎡、調査面積3,450㎡)では、奈良時代以降の3面の生活層を調査対象とし、調査課調査第2係の川畑 誠、同調査第1係の澤辺利明が担当した。以下、E地区に係る調査日誌抄を記す。

- 4月18日～5月11日 プレハブ設置等の準備作業、5月8日から重機による表土掘削作業を実施。
- 5月17日～5月25日 作業員による作業を開始。第Ⅱ面の遺構検出、掘り下げ作業を実施。完掘写真撮影作業。
- 5月26日～5月31日 第Ⅱ面東半部の平面図等作成作業を実施。以降、6月19日までC・D地区の調査のみを継続。
- 6月19日～6月29日 第Ⅱ面遺構面の清掃、図面作成作業を行う。21日に建設省北陸地方建設局金沢工事事務所担当者が現地視察。29日にヘリコプターによる航空写真測量を実施。
- 6月30日～7月9日 第Ⅲ-1面について人力による包含層掘り下げ作業、土層断面図作成作業を実施。9日に第1回現地説明会を開催し、76名が参加。



第1図 調査地区区割り図(縮尺1/2,500)

- 7月11日～7月18日 第Ⅲ-1面の人力による遺構掘り下げ、図面作成作業を実施。18日に完掘写真撮影を行う。
- 7月19日～8月4日 土層確認用セクションを設定し、第Ⅲ-1面下の状況を把握する。新たな生活面である第Ⅲ-2面を確認し、人力による包含層掘り下げ作業、遺構検出・掘り下げ作業、土層断面図作成作業等を順次実施する。第Ⅲ-2面水田域の様相把握に努める。
- 8月7日～9月6日 C・D地区の調査を優先する。9月5日に第Ⅲ-2面の遺構面清掃を行い、6日にC・D地区と併せて第2回航空写真測量を実施。
- 9月7日～9月29日 8日から第Ⅲ-2面SE1・SD8等の図面作成作業を開始。木製出土遺物の取上げ作業を経て、22日から第Ⅳ面の人力による包含層掘り下げ作業を行う。
- 10月2日～10月13日 3日にラジオコントロールヘリコプターによる第Ⅳ面の遺構検出状況の写真撮影後、遺構掘削、図面作成作業を行う。13日にM・N区周辺の遺構完掘写真の撮影を行う。
- 10月16日～10月18日 O・P区の遺構掘り下げ作業と並行し、図面作成作業を行う。以降、C・D地区の調査を優先し、E地区の作業を一時中断する。
- 11月6日～11月7日 遺構面を清掃し、7日にC・D区と併せてヘリコプターによる第3回航空写真測量を実施する。
- 11月12日 第2回現地説明会を開催し、29名が参加。
- 11月14日 第Ⅳ面のベース土以下の土層堆積状況について、重機による確認調査を実施し、生活面がないことを確認。
- 11月17日～11月27日 調査区壁面土層断面図を作成後、重機による調査区埋め戻し作業を行う。27日にE地区の現地調査を完了する。
- 11月29日～12月23日 C・D地区の調査を継続する。12月12日にC・D地区を対象としてラジオコントロールヘリコプターによる第4回航空写真測量を経て、重機による埋め戻し、プレハブ等の発掘機材撤収作業を実施する。23日に調査区を引き渡し、現地での作業を終了した。

## 第3節 整理等作業の経過

出土品の整理作業は、平成12・13年度に(公財)石川県埋蔵文化財センター(平成24年度以前は(財)石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会の委託として実施した。各年度の整理体制は第2表のとおりである。

平成12・13年度は、第1・2次調査の出土品整理作業の一部として出土遺物の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図のトレースを実施した。また、平成16年度に出土木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。平成16・27年度に報告書作成作業を行い、平成28年度に報告書を編集、本書を刊行した。

第2表 調査・整理体制

平成7年度(1995)

整理期間	平成7年4月18日～同年12月23日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財保存協会 (理事長：酒岡賢太郎)
総括	大西邦雄(事務局長)
事務	田中健一(総務課長)
調査	田嶋明人(調査課長)
	岡本嘉一(調査第2係長)
担当	川畑 誠(調査第2係主任) 澤辺利明(調査第1係調査員)

平成12年度(2000)

整理期間	平成12年11月10日～13年2月30日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	武田寿夫(専務理事)
事務	酒岡好樹(事務局長)
	相原邦夫(総務課長)
	江口明広(経理課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	福尻静平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	澤田まさ子(整理課長)
	中島俊一(調査第1課長)
担当	川畑 誠(企画課主査)
作業	黒田和子(主任技術員、博多友子(職記)、 今井尊忠(職記)、海野美香子(職記)、 表 寿子(日×雇員)、 横田真佐子(日×雇員)

平成13年度(2001)

整理期間	平成13年5月8日～同年11月26日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	武田寿夫(専務理事)
事務	松野 拓(事務局長)
	相原邦夫(総務課長)
	黒田吉彦(経理課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	福尻静平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	澤田まさ子(整理課長)
	中島俊一(調査第1課長)
担当	川畑 誠(企画課主査) 白田義彦(調査第4課主任主事)
作業	黒田和子(主任技術員)、 池田みこ(職記)、 大西邦忠(職記)、今井尊忠(職記)、 岩井郁恵(日×雇員)、吉田美枝(日×雇員)

平成16年度(2004)

整理期間	平成16年4月1日～17年1月7日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	林 正信(専務理事)
事務	山下淳敏(事務局長)
	井田勉久(総務課長)
	黒田吉彦(経理課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	藤田邦雄(整理課長)
	三浦純夫(調査第3課長)
担当	澤辺利明(調査第3課調査専門員) 希尾和史(調査第1課主任主事) 岩瀬由美( )

平成27年度(2015)

整理期間	平成27年4月1日～28年3月31日
調査主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：木下公司)
総括	柴田政秋(専務理事)
事務	笠籠利雄(事務局長)
	長嶋 誠(総務GL)
整理	福島正実(所長)
	藤田邦雄(調査部長)
	伊藤善文(国民係調査GL)
担当	川畑 誠(特定事業調査GL) 白田義彦(国民係調査GL主幹)

平成28年度(2016)

整理期間	平成28年4月1日～29年3月31日
調査主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長：田中新一郎)
総括	柴田政秋(専務理事)
事務	笠籠利雄(事務局長)
	長嶋 誠(総務GL)
整理	福島正実(所長)
	藤田邦雄(調査部長)
	伊藤善文(国民係調査GL)
担当	川畑 誠(特定事業調査GL)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

四柳白山下遺跡は、石川県羽咋市四柳町地内に所在する。石川県は、東は富山県、南東は岐阜県、南西は福井県にそれぞれ接し、北および北西は日本海に面する。県土は、平安時代前期までに成立した加賀国・能登国の領域をほぼ踏襲した加賀・能登の2地域に分かれ、うち能登地域は日本海に大きく突出した能登半島が大部分を占め、古くから日本海交流の重要な結節点の一つとなる。羽咋市は、この能登半島の基部西側に位置し、東西約10km、南北約12km、面積約82km<sup>2</sup>を測る。人口は約22万人を数え、産業として農業、繊維産業の他、観光業、鉄鋼・金属業、電子部品産業等が盛んである。遺跡の所在する四柳町は市域北東端に位置し、北側で同市大町および鹿島郡中能登町小金森に接する。

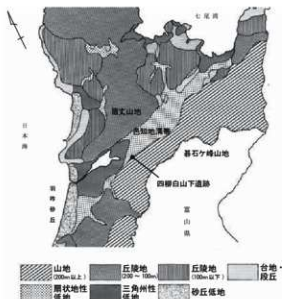
遺跡周辺の地形は、第3図のとおり、東側から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯、眉丈山地(標高50～120m)、羽咋砂丘(幅約1km)が北東—南西方向に連なり、西側で日本海に接する。本遺跡周辺の地形断面をみれば、東側の碁石ヶ峰山地から西側の旧邑知潟に向けて次第に標高を減じ、土地利用は山林、雑木林・畑地、旧内浦街道に沿って発達した街村をなす集落域・畑地、そして水田へと移行する。東側で富山県に接する碁石ヶ峰山地は、石動山地の一角をなし、市域内では標高400m前後(最高点の標高461m)を測る丘陵性低山に分類される。その山腹は急傾斜で、山地を形づくる土質が花崗岩・片麻岩等の粗い粒子の礫岩層(高畠礫岩層)であることから、県内でも有数の地滑り多発地帯となっており、本遺跡をはじめとして山地前縁に形成された集落・耕作地の盛衰に大きな影響を及ぼしている。邑知地溝帯は、並走する2条の断層帯により切断された土地が沈降してきたとされる低地帯であり、羽咋市—七尾市間を幅約2～4km、延長約30kmにわたり直線的にのびる。能登地域で最大の帯状平野であり、現在では豊かな穀倉地帯を形成している。本遺跡が属する地溝帯北東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流下する二ノ宮川、長曾川、久江川、酒井川、水光寺川等の中小河川が運んだ土砂が堆積した小規模で急峻な複合扇状地が碁石ヶ峰山地の山裾に連なり、本遺跡も四柳大谷川水系が形成した扇径約600mを測る小扇状地上のほぼ全域に、北東—南西方向約380mの規模で立地する。一方、地溝帯西部には吉崎川、子浦川等の複合扇状地と、邑知潟に起因する三角州性低地が発達している。邑知潟は、縄文時代前期のいわゆる縄文海進で入り江状に入り込んだ海が、海岸砂丘(羽咋砂丘)の発達により外海から隔離してきた海跡湖である。かつては周囲約14.5km、水面面積約4.65km<sup>2</sup>、最深部約1.4mを測ったが、近世末以降の新田開発に加え、昭和23(1948)年～43(1968)年に実施された国営干拓事業により、放水路部分を除いて水田として利用されている。

このような地理的環境にある邑知地溝帯に立地する集落遺跡には、いくつかの共通する特徴がみいだせる。まず、集落遺跡は、碁石ヶ峰山地・眉丈山両山地の前縁に張り出した微高地と、それより続く複合小扇状地という極めて狭い集落適地に、等高線に沿って帯状に点在する。すなわち、山沿いの各小扇状地上に立地する現在の集落域とほぼ重複する位置に、複数の時代の集落遺跡が継ぎつなぎに営ま



第2図 遺跡の位置

れる。この特徴は、本遺跡や発掘調査が行われた四柳ミッコ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡等で確認でき、おそらく地溝帯の各小扇状地・微高地を一つの単位集団とした継続的な集落形成のあり方が復元可能である。例えば、邑知湯東縁でみれば、現在の中能登町高島、羽咋市四柳町、同市酒井町、同市本江町の旧集落が立地する各扇状地上で地点を変えながら、各時代の集落域が営まれたと考えられる。これら各時代の集落を支える基盤として、邑知湯が内水面漁業の場を、邑知湯より続く三角州性低地や扇状地が良好な耕作地を、さらに集落域背後の山地が林業資源を提供したと考えられる。二つ目の特徴に、崩壊しやすい山地と山裾に分布する集落域が近接するため、山地からの土砂の流入・堆積、特に断続的に発生した大小さまざまな土石流災害が、集落



第3図 周辺の地勢(「土地分画17(石川県)」より作成)

の営み及び耕作地の盛衰に大きく影響していることがある。本遺跡の7次にわたる発掘調査では、第3表のとおり、各時代の生活面の間に短期間で流入・堆積した無遺物土層や河川・溝跡を検出している。第5次調査G地区では、縄文時代中期の生活面から現在の生活面まで厚さは約4mに達する。さらに、集落を支える基盤として、古来より能登地域の中核地域である羽咋と七尾(鹿島)を最短距離で結ぶ陸上交通路や、邑知湯と中小河川を利用した水上交通路も重要な位置を占めている。本遺跡の場合、邑知湯を眼前に控えた水陸交通の結節点として物資・情報の集積も、その主要因と考えられる。

## 第2節 歴史的環境

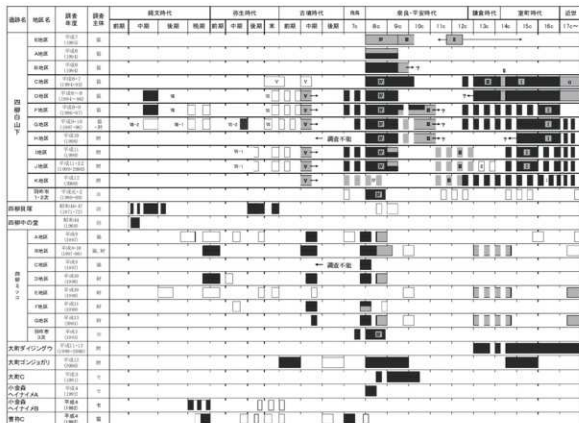
本遺跡の所在する邑知湯溝帯は、県内でも有数の遺跡稠密地帯である(第4図、第3-4表)。ただし、第1節で述べたとおり、各時代の集落域は現集落域と重複し、かつ地中深く埋まっている場合が多く、採集された資料は断片的であり、実態の解明は必ずしも進んでいない。その中で、本遺跡(第4図・第5表No1(以下、同じ))は小扇状地のほぼ全域に北東-南西方向約380mという規模をもち、かつ北側に隣接する四柳ミッコ遺跡(2)と併せて縄文時代中期～近世までの集落域・耕作域が良好に残ることから、地溝帯における人々の営みの一典型を復元しうる重要な資料を提供している。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は、碓氷ヶ峰・眉丈山両山地から続く微高地緩斜面上に点在する。前期では杉谷チャノバタケ遺跡(13、前期初頭)、中能登町高島カンジダ遺跡(前期前葉)や眉丈山南縁の台地周辺等で断片的に資料が確認されている。中期に入ると、碓氷ヶ峰山地側で四柳貝塚(56)、四柳中の堂遺跡(58)、本遺跡D・F地区、中能登町藤井A遺跡、小田中寺屋敷遺跡が、また邑知湯を挟んだ眉丈山山地側で同町徳丸遺跡、中大門川遺跡等が確認できる。このうち四柳貝塚、四柳中の堂遺跡、本遺跡D・F地区は、微妙な時期差を示しながら同一微高地上に近接しており、比較的小規模な集落が居住域を変えながら営まれたものと考えられる。四柳貝塚は、本遺跡の北東側約100mにある舌状台地(標高30～40m)に鎮座する四柳神社境内に立地し、県立羽咋高等学校地歴部の調査により東西約100m、南北約50mの範囲に最大厚約20cmを測るシジミ層をもつ淡水貝塚であることが判明している。隣接する四柳中の堂遺跡では土器片、磨製石斧、石鏃等が表面採集されており、本遺跡D・F地区では石組

炉をもつ竪穴建物2棟等を検出している。後期は酒井バンドウマエ遺跡(66)が、晩期では洪水土砂で一度に埋没した河川跡を検出した本遺跡F・G地区、円形・方形建物12棟以上を確認した四柳ミッコ遺跡(2)、円形建物や多量の輝石安山岩の製作剥片が出土した曽根C遺跡(47)、土器棺墓が出土した小金森ヘイナイメB遺跡(52)等が分布する。

**弥生時代** 弥生文化は、県内でも早い段階に、邑沼潟に面した平野部で伝播・定着をみる。邑沼南岸の微高地に立地する国指定史跡吉崎・次場遺跡では、前期新段階に集落が成立し、古墳時代初頭まで広域流通の一翼を担う中核的集落として存続する。中期後半には、断片的だが本遺跡G地区、曽根C遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡(17)等の検出事例が増加傾向を示す。県内の弥生時代後期後半～末は、湖沼や中小河川流域を中心として短期存続型の集落が急増する時期であり、その基盤となる水田経営でも大きな画期をもつ時期と指摘されている。本遺跡の一連の発掘調査では集落形成は低調であるが、調査区外東側から流れ込んだ土器片の出土状況から、山沿いの微高地に一定規模の集落が存在する可能性が高い。また周辺地域では四柳貝塚、小金森ヘイナイメB遺跡、中能登町藤井サンジョガリ遺跡、高島カンジダ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡等が分布する他、杉谷チャノバタケ遺跡では後期後半に大規模な空壕をもつ高地性集落が営まれる。

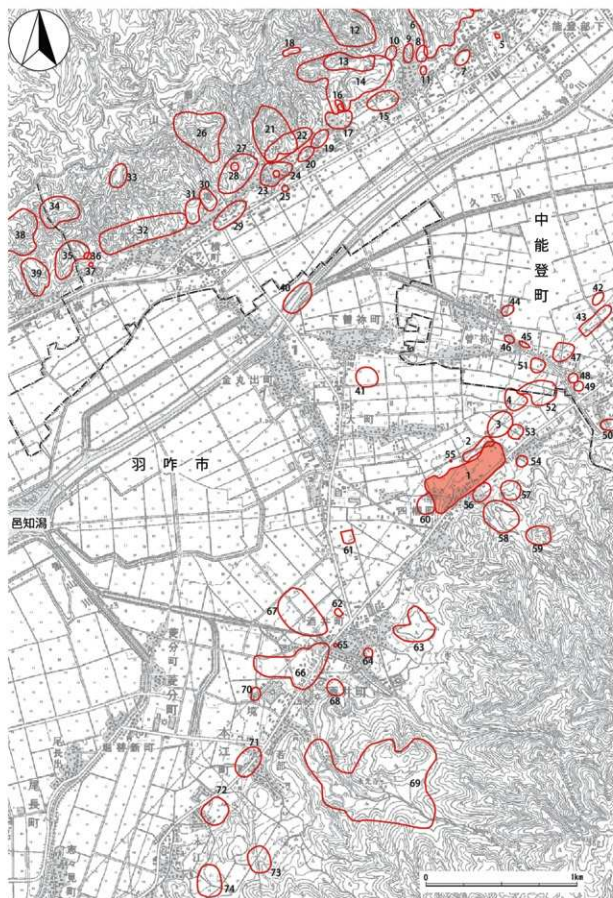
**古墳時代** 碓石ヶ峰山地、眉丈山地で継続的に相当数の古墳が築かれる。中でも4世紀後半～5世紀前半には雨の宮1・2号墳(前方後方墳70m/前方後円墳75m、国史跡)、小田中親王塚古墳・亀塚古墳(円墳か? 67m/前方後方墳61m)、杉谷ガメ塚古墳(14、前方後円墳60m)、水白鍋山古墳(前方後円墳64m)等の大型古墳を盟主墳とする古墳群が相次いで築造され、これらは能登地域全域に影響をもつ広域支配者層の奥津城と位置付けられている。この政治的中心城の動向を反映する主要古墳群の築造は、



第3表 遺跡周辺の主な発掘調査  
 記：(株)石川林務文化財団発掘センター (株)石川林務文化財団発掘センター  
 ○：長野県教育委員会  
 △：石川林務文化財団発掘センター

第3表 遺跡周辺の主な発掘調査





第4図 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

第4表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名称	所在地	種 別	時 代	備 考
1	711700	西條山山下遺跡	沼津市西條町	集落・生産遺跡	縄文～古代	1989-90-93・2007年度発掘調査、1994～97年度発掘(埋没)、1998～2002年度発掘(貯蔵)調査
2	711900	西條ミヅノ遺跡	沼津市西條町	集落・生産遺跡	縄文～古代	1997年度発掘(埋没)、98-99-2001年度発掘(貯蔵)調査
3	712100	大町ダイシングウ遺跡	沼津市大町	集落	中～近代	1999-2000年度発掘(貯蔵・瓦葺、瓦葺(遺跡)をもつ中世前期)
4	712400	大町シシノカサ遺跡	沼津市大町	散布地遺跡	古墳・古代	2000年度発掘(貯蔵・発掘調査)
5	7129400	能登野下町遺跡	中能登町能登野下	生産遺跡	弥生～古代	1997年度発掘(埋没・発掘調査)
6	7125200	能登野塚1～3号墳	中能登町能登野下	古墳	古墳	円墳3基(径16～27m)
7	725100	杉谷ササガ遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
8	7125000	杉谷古墳群	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
9	724800	杉谷古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	円墳2基
10	724500	金丸杉谷田遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	弥生	杉谷川より土器群
11	724900	杉谷ヒシ遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	不詳	
12	724700	杉谷古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	前方後方墳1基、円墳0基
13	724400	杉谷チャハタケ遺跡	中能登町金丸杉谷	集落	縄文～近世	1966～68年度発掘(埋没)調査、弥生時代の環壕集落を遺す。タマキ炭化米出土
14	724600	杉谷古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	古墳	1966～68年度発掘(埋没)調査、前方後円墳1基(杉谷古塚)遺す。全長60m、直径13.5m、方墳0基
15	724300	金丸杉谷遺跡	中能登町金丸杉谷	散布地	弥生～中世	1969年度発掘(埋没)調査
16	1731800	金丸テラダチ遺跡	中能登町金丸	散布地・集落・その他遺跡	縄文～中世	2001年度調査、平安時代、中世の墓場を遺す
17	1724200	宮内ブンガヤナ遺跡	中能登町金丸宮内	散布地・集落	縄文～近世	1965～69年度発掘(埋没)調査
18	1731900	金丸ゴロジヤナ遺跡	中能登町金丸	散布地・その他遺跡	弥生	2000年度調査、弥生土器、溝刀出土
19	1724100	宮内コショウジ遺跡	中能登町金丸宮内	散布地	古代	
20	1724000	沢遺跡	中能登町金丸沢	散布地	古代	
21	1723400	金丸城跡	中能登町金丸沢	城跡	中世	鎌倉時代
22	1723900	宮内古墳群	中能登町金丸宮内	古墳	古墳	円墳3基
23	1723800	金丸城跡群	中能登町金丸沢	城跡	中世	
24	1723700	藤原寺跡	中能登町金丸沢	社寺	中世	
25	1731900	沢ノケツダ遺跡	中能登町金丸	集落	古代	1968年度調査
26	1723500	沢古墳群	中能登町金丸沢	古墳	古墳	
27	1723300	仏徳山天守跡	中能登町金丸沢	社寺	中世	鎌倉時代
28	1723600	沢古墳群	中能登町金丸沢	古墳	古墳	円墳3基、方墳1基
29	1723200	金丸宮内遺跡	中能登町金丸宮内	散布地・集落	弥生～中世	1960年度石考証、1963年度発掘調査、98-99年度発掘、2000年度発掘(貯蔵)発掘調査
30	1723101-3	金丸宮内1～3号墳	中能登町金丸宮内	古墳	古墳	円墳3基・横穴式石室、1号墳は町内最大
31	1723000	藤原寺跡・石室遺跡	中能登町金丸宮内	散布地	中世	土器群出土
32	1722900	正部谷古墳群	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳9基
33	1722800	正部谷A古墳群	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳1基
34	710600	藤原1-2号墳	沼津市藤原町・中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	円墳
35	710501-4	藤原1-4号墳	沼津市藤原町・中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	1号墳は前方後円墳(全長26m)、他は円墳
36	1722700	金丸正部谷遺跡	中能登町金丸正部谷	散布地	古代	しじみの遺跡
37	1722600	金丸正部谷横穴	中能登町金丸正部谷	古墳	古墳	横穴式横穴
38	710701-6	藤原1-6号墳	沼津市藤原町	古墳	古墳	円墳
39	710501-9	藤原1-9号墳	沼津市藤原町	古墳	古墳	円墳7基・方墳2基
40	715400	下野村テマチ遺跡	沼津市下野村	散布地	弥生・古墳	鳥居塚跡で発見
41	713500	大町C遺跡	沼津市大町	集落	古代	1991年度発掘(埋没)調査、「大町」遺跡土器出土
42	7129500	高島C遺跡	中能登町高島	散布地・集落	弥生～古代	1991年度発掘(埋没)調査
43	711400	高島カタシモキモ遺跡	中能登町高島・賀野	散布地・集落	弥生～中世	1990-91年度発掘(埋没)、96年度発掘(埋没)調査
44	7129600	賀野D遺跡	中能登町賀野	集落	弥生・古墳	1996年度発掘(埋没)調査
45	710400	賀野田遺跡	中能登町賀野	散布地	弥生	賀野弥生遺跡を改称
46	710300	賀野大坪遺跡	中能登町賀野	散布地	弥生	賀野遺跡(A)を改称
47	710500	賀野C遺跡	中能登町賀野	散布地・集落・その他遺跡	縄文～中世	1992年度発掘(埋没・96年度発掘(埋没)調査、中世の横石墓1基あり
48	710600	小金森弘教遺跡	中能登町小金森	散布地	中世	跡地整理で出土
49	710700	小金森宮田遺跡	中能登町小金森	散布地	古墳	賀野遺跡(B)を改称
50	1710801-3	賀野1～3号墳	中能登町小金森	古墳	古墳	円墳、双輪文環状大刀、耳環、鉄斧、須賀器出土
51	710100	小金森ヘイテイメイ遺跡	中能登町小金森	散布地・その他遺跡	縄文・弥生	1992年度発掘(埋没)調査
52	710200	小金森ヘイテイメイ遺跡	中能登町小金森	散布地・その他遺跡	縄文、弥生	1992年度発掘(埋没)調査、縄文時代の櫛形土1基確認
53	712200	大町テツ遺跡	沼津市大町	散布地	不詳	1970年、跡地整理時発掘品発見(詳細不明)
54	712000	大町穴遺跡	沼津市大町上野	横穴墓	古墳	2基以上
55	711800	西條宮の腰古銭遺跡	沼津市西條町	散布地	中世	鎌倉時代の土器に土36貫の産土銭出土
56	711300	西條貝塚	沼津市西條町	貝塚	縄文～古代	1971～72年度沼内町古墳調査
57	711600	西條横穴	沼津市西條町	横穴墓	古墳	7基
58	711400	西條中の堂遺跡	沼津市西條町	散布地	縄文	1958年発見
59	711500	西條中世遺跡	沼津市西條町	その他遺跡	中世	板碑、瓦輪等、四耳尊
60	711200	西條ちのた遺跡	沼津市西條町	散布地	古墳	1958年跡地整理時に高坪等を発見
61	714600	酒井メノウ遺跡	沼津市酒井町	集落	古代・中世	2013年度市発掘調査
62	714800	酒井トダ遺跡	沼津市酒井町	散布地	弥生	
63	711100	酒井赤土遺跡	沼津市酒井町	古墳	古墳	2基以上
64	711000	酒井中世遺跡	沼津市酒井町	集落	中世	心他の墓
65	710900	酒井井田	沼津市酒井町	古墳	古墳	円墳、横穴式石室
66	714700	酒井バンドウメ遺跡	沼津市酒井町	集落	縄文・古墳～中世	2013年度市、15年度市(公財)調査、酒井国遺跡群(旧本703700)を統合
67	715700	酒井シシノカワ遺跡	沼津市酒井町	散布地・集落	古代・中世	
68	703600	酒井共和工場内遺跡	沼津市酒井町	散布地	古墳	工場造成時に埋没品等を発見
69	703500	本江古墳群	沼津市本江町	社寺	中世	1967-94-98年度市、90～96年度発掘(埋没)調査、寺域は発掘史跡
70	714500	本江中世遺跡	沼津市本江町	集落	中世	
71	703400	若原遺跡	沼津市若原町	散布地	古代・中世	1957年の跡地整理で埋没品等を発見
72	703300	本江アブラテン遺跡	沼津市本江町	散布地	縄文、弥生・古墳	本江古墳群を改称
73	714400	本江中世遺	沼津市本江町	その他遺跡	中世	瓦輪等、板碑
74	703200	本江カラヤナ遺跡	沼津市本江町	散布地	縄文、古墳	本江遺跡を改称

5世紀後半以降に邑知地溝帯両端の羽沓・七尾(鹿島)の臨海地域に分離・移行し、6世紀以降は羽沓の勢力が優位性を保持したと考えられている。この2大勢力は、国造本紀にある「能等国造」能登臣、「羽沓国造」羽沓公に繋がり、さらには律令期の郡司層に引き継がれる。

さて、本遺跡周辺での古墳の築造は、古墳が立地しうる山麓裾部の土砂崩落に伴う確認しづらさを考慮しても、総じて低調である。現在、曾祓1～3号墳(50)、高島経塚古墳(円墳、径10m)、酒井古墳(65)、酒井東古墳群(63)、大町横穴群(54)、四柳横穴群(57)等の後期に属する古墳が点在する程度である。このうち、7世紀前葉の円墳である曾祓1号墳からは金銅製双竜式環頭太刀、耳環等が、7世紀前後に築造された高島経塚古墳からは金銅製主頭太刀、銅鏡等が出土している。

集落遺跡については、本遺跡が中心域を変えながら継起的に営まれる他、前期では高島カタタスギモト遺跡(43)、大町ゴンジョガリ遺跡(4)、中期では前述2遺跡や四柳ミッコ遺跡、金丸宮地遺跡(29)、後期では大町ゴンジョガリ遺跡、7世紀前半期の曾祓C遺跡、高島遺跡等が知られている。発掘調査が実施された高島カタタスギモト遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡では竪穴建物群を、四柳ミッコ遺跡では初期須恵器を伴い小鍛冶や祭祀行為を行った10棟の竪穴建物群をそれぞれ検出、注目される。また、曾祓C遺跡では、計画的に配された掘立柱建物群を検出し、曾祓古墳群と深い関連をもつ比較的上位階層の居住域と位置付けられている。さらに、鹿島バイパス改築工事に伴う一連の発掘調査では、本遺跡F・G地区等で洪水土砂に被覆された水田、大町ゴンジョガリ遺跡(後期)で堅果類の水さらし場や祭祀痕跡を検出する等、集落域縁辺での生活の一端も次第に明らかになりつつある。

**奈良・平安時代** 本遺跡が属する能登国は、養老2(718)年に越前国から羽沓・能登・鳳至・珠洲の4郡を割いて立国するが、国司の任命がないまま天平13(741)年に越中国に併合、さらに天平勝宝9(757)年に前述の4郡8郷を能登国として再立国させる経緯をたどる。また、古代北陸道から分岐して能登国府(現在の七尾市古府町・国分町周辺)に向かう支道ルートは、10世紀初頭に成立した「和名抄」等に加賀郡横山駅、能登国撰才駅、同越蘇駅(現在の七尾市江曾町周辺)の記述から、邑知地溝帯東側を走ると考えられている。

与木郷・撰才駅については、延喜式内社「余喜比古神社」の同名社が大町に鎮座すること等から、本遺跡～大町周辺に比定する説がある。一方、余喜比古神社が他地から転移していること、古代能登郡与木(与支、与岐)郷を継承したと考えられる与木院(承久3年「能登国四郡公田田目録案」等記載)が七尾市田鶴浜北部に比定しうること、また撰才駅を駅家間距離の検討から羽沓市飯山町周辺とする説も有力であり、本遺跡の位置付けを検討するうえで「与木郷」「撰才駅」という事象は慎重に扱うことが妥当であろう。いずれにしても、本遺跡に代表される邑知湯東縁に連なる各小扇状地における集落活動の活発化は、県内他地域と同様に古代交通網の整備に象徴される律令制の浸透・定着と軌を一にしたものといえる。

本遺跡は、奈良時代初頭～平安時代前期にかけて、その活動域をもっとも広げる。四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等の邑知湯東縁(標高20～25m)の各微高地に立地する遺跡も同じ様相を示す。本遺跡は、第3表のとおり調査地区ごとに若干の様相差をみせつつ、四柳ミッコ遺跡よりやや遅れて成立し、奈良時代後半に集落域としてピークを迎える。その規模は北東～南西方向で約380mという広範な範囲であり、その規模や出土遺物の内容等から、四柳ミッコ遺跡と一体となり周辺地域の中核的地位を占めた集落域と考えられる。また、本遺跡では「寺」墨書・銅鏡片、多種の施設名墨書や木沓・帯金具、木製食膳具の出土や、護岸をもつ河川跡(G地区)、水田遺構の検出(E地区等)等、中核的な集落や耕作地に関する注目すべき新しい知見も多く得ている。これらの集落域は、県内他地域と同様に9世紀中頃以降は再編・縮小方向に向かい、10世紀中頃には本遺跡F地区及び羽沓市教委第4次調査区周辺に集約されたと考えられる。F地区では、一定量の施釉陶器が出土している。また、邑知湯縁の低地に立地する大町C遺跡(41)からは「大町」「前宅」墨書土器が出土している。「大町」

墨書は本遺跡からも数点が出土しており、その関係が注目される。集落域の再編・集約後は、主に耕作地として利用されたようだ。この律令制に基盤を置いた集落形態の変容は、平安時代前期に顕在化する郡部の解体および国衙による院、保といった単位への再編成過程と考えられる。

**鎌倉・室町時代** 鎌倉時代初期の能登国守護には北条一門の名越氏が任じられる。また鎌倉時代後期の正和元(1312)年に登山紹瑾により曹洞宗永光寺が本遺跡南方約2.5kmの山中に創建される。平安時代後期の国衙領を継承したとされる承久3(1221)年の能登国田数注文には「四柳保」の名がみえる。四柳保は、承久元年の立券であり、もとは5町5段であったが同3年には2町1段に減少する。また文明5(1473)年の北野社領諸国所々目録に「四柳庄」の記載や、文明8(1476)年に能登国石動山(天平寺)に來遊した京都聖護院門跡道興が「柳のあまた侍りければ立よりて、里人の鞠の庭にはしめねともいともなつかしよつ柳かな」と詠じている。

鎌倉時代後期～室町時代前期は、邑知地溝帯緑辺の本江・四柳・吉崎等の村々に鎮座する産土神勧請伝承が集中する時期であることから、開発の一つのピークと考えられており、本遺跡C地区や四柳ミッコ遺跡、大町ダイジングウ遺跡(3)、大町ゴンジョウ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等でも新たな集落・耕作地の形成が始まる。このうち、大町ダイジングウ遺跡では、16世紀代に築かれた「ひょうたん」形の池跡や計画的に配された2つの掘立柱建物群の検出、多数の金属製品と鋳造道具の出土等から、一般的な農村的集落と異なり、調査区に隣接する余喜比古神社関連施設と考えられている。また、本遺跡、四柳ミッコ遺跡で14・15世紀頃の整然と区画された良好な水田遺構を検出した他、板碑・五輪塔よりなる四柳中世墓群(59)や、宋・明銭36貫を入れた珠洲焼甕の単独出土である四柳宮の腰古銭遺跡(55)等も注目される。

**近世** 集落域は、街村形態を示す現在の四柳集落とはほぼ重複すると考えられるが、その一部が本遺跡や大町ダイジングウ遺跡で確認された他、四柳ミッコ遺跡で耕作域を検出している。以下では、主に文献に記載された交通路と産業について記し、周辺地域の様相を考える一助としたい。陸路としては、能登街道がある。能登街道は、河北郡津幡宿で北陸道から分岐し、さらに羽咋郡今濱宿で子浦村・飯山村・酒井村・高島村等の邑知地溝帯東側の村々を経て所口(七尾)に向かう内浦街道と、海岸沿いに能登半島西側を北上する外浦街道に分かれる。また内浦街道は、酒井村で田鶴浜往來に分岐しており、四柳村は内浦街道に、大町村は田鶴浜往來に面する村であった。また、水路については、周辺の年貢米を大町村、金丸村に集め、邑知湯・羽咋川を経て鹿濱に舟で輸送、さらに金沢市犀川河口の宮腰に海運される。周辺の産業として稲作の他、山地での山菜・タケノコ採取、四柳村・大町村等15村の入会であった邑知湯での鯉・鮒・小エビ・ナマズ、肥料に用いる湯藻採取が記録に残る。

#### (引用・参考文献)

- 羽咋市史編さん委員会 1973『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所  
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1995～98『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報』6～9  
 (財)石川県埋蔵文化財センター 1999～2002『石川県埋蔵文化財センター情報』第2～7号  
 中島俊一・川畑誠 1994『大町C遺跡・小金森ヘイナイメA・B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター  
 岡本恭一・久田正弘 1995『曾祿C遺跡発掘調査報告書』(社)石川県埋蔵文化財保存協会  
 布尾和史・澤辺利明他 2005『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
 澤辺利明他 2006『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター  
 林 大智他 2015『羽咋市 四柳ミッコ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター  
 今井淳一 1990『四柳白山下遺跡Ⅰ』羽咋市教育委員会  
 今井淳一他 1991『四柳白山下遺跡Ⅱ』羽咋市教育委員会  
 今井淳一・牧山直樹 1994『四柳白山下遺跡Ⅲ』羽咋市教育委員会  
 牧山直樹・宮下栄仁 2008『四柳白山下遺跡Ⅳ』羽咋市教育委員会  
 中野知幸・牧山直樹 2015『酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡』羽咋市教育委員会

## 第3章 調査の方法と基本土層層序

### 第1節 調査の方法

**調査区区割り** 発掘調査対象地は、工事により遺跡が損壊を受ける幅約25m、延長約380mにわたる区間に設定され、北側で四柳ミッコ遺跡に接する。複数年次にわたる調査が計画されたことや、調査区が道路や農道、農業用水路で分断されること等から、調査グリッドと調査地区を併用した区割りとし、この区割りは第1～7次調査まで統一している。

まず、調査グリッドは、平成6年度(第1次調査)着手段階に、バイパス路線が直線を保つ部分における道路中心線の延長線を基準ラインに設定した(第5図)。その延長線上にある事業者が設定した地点(第5図IR12)で、道路中心延長線と直交するラインを配し、調査予定地全体に対して平面直角座標第Ⅶ系(日本測地系)を用いながら10m方眼を単位とする正方形のグリッドを設定した。そしてグリッドを画する基準杭(交点)に、北西方向から南東方向に向けてA～Qまでのアルファベット番号を、また南西方向から北東方向に向けてアラビア数字1～41を付し、その交点は例えば「M-3」基準杭のように両者を組み合わせた呼称とした。結果として、基準ライン(調査区長軸方向)はN41°Eを示し、IR12地点はE-25基準杭に、その南西方向の延長線上にE-1基準杭を、E-1基準杭の北西方向の延長線上にA-1基準杭をそれぞれ設定したことになる。また、調査区を分割する10mグリッド区の呼称については、その南西方向にある基準杭(交点)名と定めた。さらに、第1次調査開始後、遺物出土量が多いことが判明したため、各グリッド区を5×5mの小区画で四等分し、南西よりアラビア数字1～4の番号を加えた。例えば、M-3基準杭、M-3区およびM-3区-1～4の位置関係は、第5図のとおりとなる。

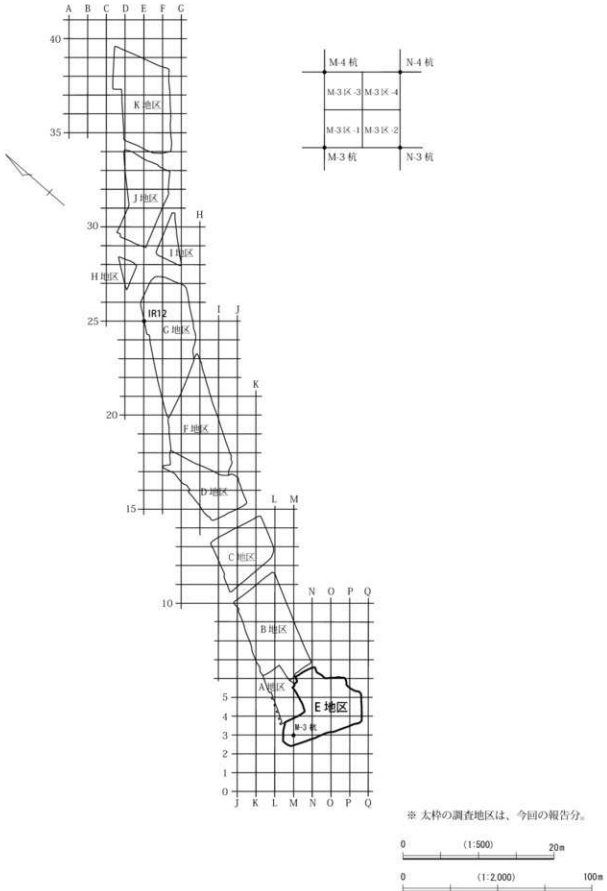
次に調査地区は、調査時も機能を維持する必要があった既存の道路や農道、農業用排水路により区切られる範囲を単位に設定した。第1次調査着手時に南側より順にA～D地区と呼称し、第2次調査以降も北側に向けてF～K地区を順次設定している。また、第1次調査の成果から、A地区南側にも本遺跡が延びることが判明し、A・B地区南側に隣接したE地区を設定している。なお、現地調査時点で供用が続く道路や農道、農業用排水路は、迂回が可能であった一部の農業用排水路を除いて、県教委文化財課・県立埋蔵文化財センターと協議のうえ、発掘調査の対象地から除外している。

また、第2次調査着手以降、本遺跡の特徴の一つでもある土石流を想起させる大量の土砂に度々埋没しながら、縄文時代中期～近世初頭にいたる集落・耕作地等の生活面が垂直方向に累積する様相が、次第に明らかとなった。そのため、新しい時代から順次、ローマ数字で第0、Ⅰ、Ⅱ～Ⅶ面といった調査面(生活面)を新たに設定している。さらに各調査面(生活面)で複数の生活面が検出できた場合は、第Ⅲ-1面、第Ⅲ-2面のように枝番を付して調査を実施した。各調査面(生活面)の主な存続時期と、第1次調査A・B地区で呼称した上・中・下層との対応関係は第5表のとおりである。

結果として、各調査面における遺構の記録及び出土遺物の取上げについては、例えば「E地区第Ⅲ面N-4区-4 SD83(83溝)」のとおり、調査地区名・調査面(生活面名)・調査グリッド区名・遺構番号名を組み合わせた呼称を基本としている。なお、調査面(生活面)のうち、第0面と第1面は同一生活面で連続して営まれ、峻別が難しく第0・Ⅰ面として調査する場合

第5表 主な調査面の対応関係

調査面	推定する主な存続時期	第1次調査
第0面	近世以降	
第Ⅰ面	中世後半	
第Ⅱ面	14世紀中頃	上層
第Ⅲ面	平安中期～中世前半	
第Ⅳ面	飛鳥～平安前期	中・下層
第Ⅴ面	弥生後期～古墳前期	
第Ⅵ面	弥生中期	
第Ⅶ面	縄文中期～晩期	



第5図 調査地区グリッド配置図(縮尺1/500-2000)

が多かった。

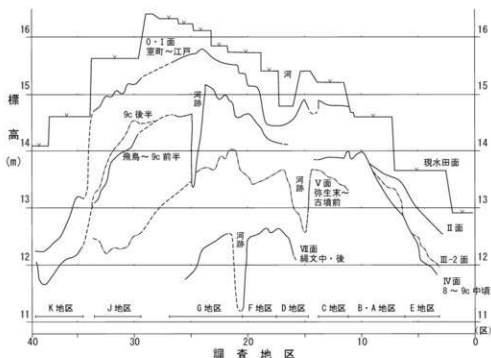
**調査の方法** 表土除去作業及び各調査面に堆積した無遺物層は、作業の効率化を測るため重機で実施した。その後、人力により遺物包含層の掘削作業と、遺構検出面の精査および遺構面の精査・遺構検出作業を行った。遺構番号は、各調査地区で現地調査時に推定した遺構の性格を反映した略記号SE(井戸)、SK(土坑)、SD(溝)、P(ピット)などを、主に遺物が出土した遺構について検出順に連続する通し番号を付している。この遺構番号は、各遺構の固有番号として、出土遺物の取り上げ、土層等の記録、遺物整理作業、出土遺物の管理に使用している。また、G地区以北(第5次調査以降)においては、遺構密度が高いことが予想されたため、4桁の遺構番号とした。

検出した各遺構は、調査地区・調査面ごとに遺構概略図(縮尺1/100)を作成し、位置や遺構番号、遺構覆土などに関する所見を記録しながら、その主軸を基準に半裁または土層観察用の畔を残して調査作業員による人力での掘り下げ作業を行った。その後、各遺構について土層を観察のうえ、必要に応じて土層断面図・立面図の作成と写真撮影(主に35mmカラーネガ、カラーリバーサル、白黒の各フィルム)で記録作業を実施した。遺構図面は縮尺1/20を基本とし、遺物の出土状況等の微細な表現が必要な場合は縮尺1/10の図化作業を行った。また、各調査面の遺構完掘後、遺構平面図(縮尺1/20)を効率的に作成するため、ヘリコプターまたはラジオコントロールヘリコプターによる空中写真図化作業を委託にて実施している。

報告書作成に際して、調査時及び整理時の所見を踏まえ、掘立柱建物(SB)、柵列(SA)については、新たに通し番号を付している(各柱穴番号は現地調査時の遺構番号のまま記載)。本書では、建物跡(SB)、井戸(SE)、土坑(SK)については、基本的に平面図および断面図を組み合わせて説明するものとし、単独の小穴(P)、溝(SD)の平面図は遺構全体の分割図(縮尺1/80)および必要に応じて断面図を用いて説明を加えるものとする。また、遺物が多出した遺構については遺物出土状況を示している。

## 第2節 基本土層層序

本遺跡は、扇径約600m、高低差約20mを測る小扇状地上に立地する。第6図は、第1～7次調査

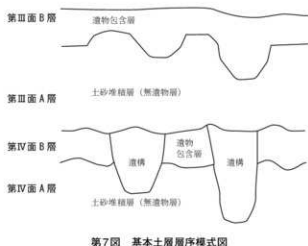


第6図 第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ

のバイパス路線センター付近における主な遺構検出面の標高の概略を図示したものである。本遺跡においては、標高12m台を測る小扇状地中央付近(D・F・G地区)で形成された縄文時代中・後期の集落形成を皮切りに、度重なる小河川の大規模な氾濫により最大厚1.5mもの土砂で埋没しながらも、調査区外を含めた小扇状地内で生活中心域を少しずつ変えながら、継起的に集落・耕作地が営まれ続けた状況がわかる。小河川の本流が流下したと考えられる扇状地中央ライン(D・F・G地区)を中心に土砂堆積が進んでおり、第5次調査G地区で確認した縄文時代後期の遺構検出面と、調査着手前の水田の標高差は4m以上に達する(下の写真)。これは、東側に位置する碓石ヶ峰山地(石動山地)が急峻で崩壊しやすい花崗岩質の土質をもつことに加え、集落域を形成しうる土地が碓石ヶ峰山地前縁に張り出した微高地、小扇状地にほぼ限定されることに起因する。この邑知地溝帯における集落形成のあり方は、四柳ミッコ遺跡や、地溝帯対岸の眉丈山系前縁の微高地で営まれた中能登町金丸杉谷遺跡、徳丸遺跡でも確認されている。

各調査面(生活面)における基本土層層序は、第7図の模式図で示したとおり、A層：無遺物層で、短期間のうちに河川氾濫等で堆積した淡灰～淡灰黄色を基調とする礫・砂利・粗砂・砂質土・シルトと、その上層に形成されるB層：遺物包含層(または耕作土層)の垂直方向での累積で構成される。B層は、A層が生活(または耕作)に伴い土壌化したものであり、黒灰・暗灰～暗灰褐色を呈する粗砂・砂質土・シルトを基調とする。各調査面は、B層上面が集落域・耕作域の生活面及び耕作域の遺構検出面、A層上面(B層下面)が集落域における遺構検出面となり、後世の耕作地造成等で削平された箇所も認められた。

また、扇状地中央付近(D・F・G地区)で礫・砂利等の粒径の大きい堆積土砂が主体となるのに対して、扇状地裾付近(E・J・K地区)では砂質土・シルト等の粒径の小さい堆積土砂主体となる傾向を示すものの、A層の形成状況(土石流の発生位置、規模や影響範囲)により、やや複雑な様相を呈する。さらに、地形の傾斜が強い扇状地裾付近(E・J・K地区)は、古墳時代中期以降、主に耕作域としての土地利用が確認され、一部では水田耕作に伴う整地作業も認められる。



第7図 基本土層層序模式図



第5次調査G地区東壁A-A'土層堆積状況(西から)



## 第4章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

**調査の概要** 第2次調査E地区は、第1次調査A・B地区南側に隣接し、本遺跡の最も南寄りに設定した調査区である。調査グリッドでいえば、L～P2～5区にあたり、調査対象地の平面積は1,150m<sup>2</sup>を測る。発掘調査の結果、A・B地区より連続する第Ⅱ面、第Ⅲ面(第Ⅲ-1面、第Ⅲ-2面)、第Ⅳ面の計4面の生活面(主に耕作地)を確認した。第Ⅳ面を除き、調査区外東側(山地側)から短期間のうちに流入した大量の土砂により被覆される。

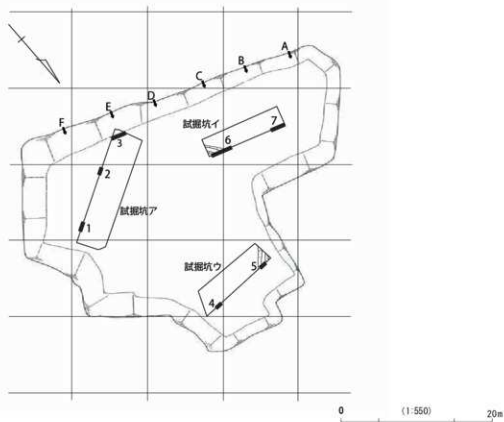
第Ⅱ面は、厚さ50cm以上を測る淡灰色粗砂(洪水等堆積土)により一度に被覆された生活面である。第1次調査A・B地区上層遺構群に対応し、北東側から南西側に向けて緩やかに傾斜する自然地形を利用して、8面の平坦面の造成を確認した。各平坦面には、明瞭な畝・溝等の耕作に伴う起伏や排水施設が伴わないことから、淡灰色粗砂で被覆される時期(15世紀後半代を下限)には、耕作が放棄または休止していた畝地と考えられる。被覆土・耕作土から奈良時代～平安時代前期の土師器・須恵器、中世陶器の他、弥生時代後期の土器、古墳時代の土師器、鉄製品、木製品が少量出土している。

第Ⅲ面は、上層の第Ⅲ-1面と下層の第Ⅲ-2面を調査対象とした。第Ⅲ-1面は、第Ⅱ面の耕作土・床土を人力で掘り下げた段階で検出した遺構群で、直線的に延びる溝4条を検出したにとどまる。淡黄灰色粗砂を基本覆土とし、面的な広がりも不明確であるが、古代末～中世前半代を中心に短期間営まれた生活面を想定している。第Ⅲ-1面と第Ⅲ-2面の間には、第Ⅲ-2面全体を被覆する、短期間のうちに流入・堆積した淡灰緑～褐灰色を基調とする粗砂～砂質土(最大厚30cm前後)が存在し、一定の空白期間が想定できる。第Ⅲ-2面は、調査地区東半部で3枚の水田と付帯する用排水施設、井戸を含む方形土坑1基、西半部で自然流路等を検出した。10世紀初頭を下限とする古代の土師器、須恵器、木製品の他、少量の縄文土器、弥生時代後期～古墳時代の土器、石器剥片等が出土し、A・B地区中層遺構群に対応すると考えられる。

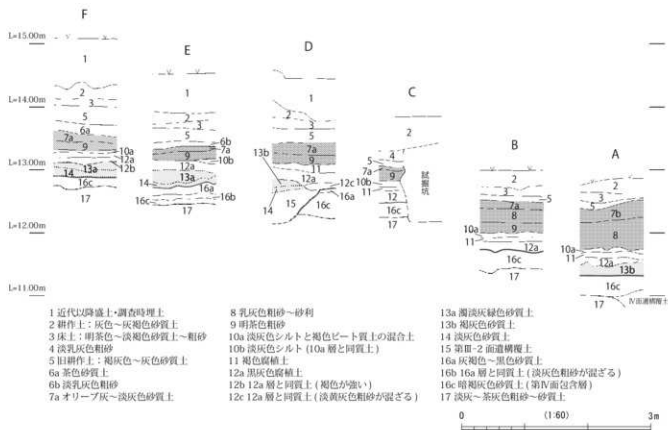
第Ⅳ面は、A・B地区下層遺構群に対応し、遺構の切り合い関係から4小期に細別可能である。調査地区東半部は自然流路が主体を占め、1×1間の小規模な掘立柱建物を復元したにとどまる。調査区西半部では、B地区から続く耕作に伴う素掘り溝群等を検出した。これらの遺構群は、A・B地区以北において8世紀初頭～9世紀後半に営まれた集落域の南側縁辺部分にあたると考えられる。当該期の土師器、墨書を含む須恵器、木製品の他、縄文土器、弥生時代後期～古墳時代の土器等が少量出土した。

**基本土層層序** E地区は、本遺跡が立地する扇状地南西裾部に位置し、東側には大きな谷部が開け、また北東側で現白山下集落域に接する。地勢は、東側から西側および北側から南側に向けて標高が大きく下がり、調査で確認した各調査面(生活面)も、ほぼ同様の地形の傾斜を示す。調査着手前の地表面の標高は、調査区東側水田で約14.9m、西側水田で約12.1m、北側水田で約13.2m、南側水田で12.1mをそれぞれ測る。

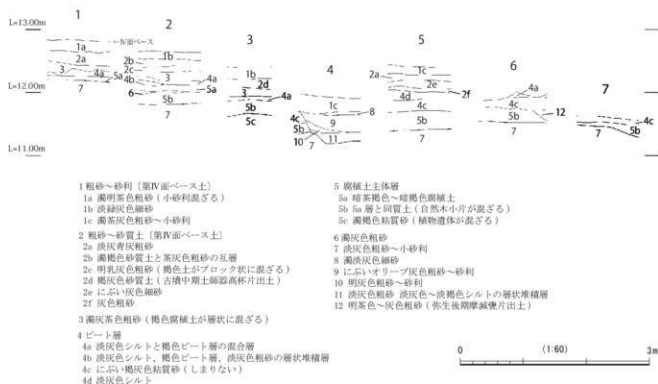
基本土層層序は、概ね整合的に堆積し、現在までに短期間の大量の土砂流入・堆積(洪水・土石流等を想定)と、その土壌化の過程を3回程度繰り返したと推定される。調査区南壁(第8-9図)でいえば、2-4層:調査着手前までの耕作土・床土層で、近・現代に施行された耕地整理後の水田覆土。5-6層:7-9層の土壌化層。耕地整理以前の旧水田耕作土で、5層は厚さ10～30cmを測る。



第8図 第IV面基本土層位置図(縮尺1/550)



第9図 南壁土層柱状図(縮尺1/60)



第10図 第IV面下試掘調査土層柱状図(縮尺1/60)

7～9層：短期間に流入・堆積した砂質土・粗砂・砂利層で、厚さ15～80cm弱を測る。無遺物層で、西側に向かうにつれ砂利が主体となり、鉄分の沈着が目立つ。

10～12層：13・14層の土壌化層。耕作に伴う腐植土を主体とした、しまりのない土層。

13・14層：調査区東側(柱状図D～F)を中心に確認できた砂質土層で、厚さ約20cmを測る。洪水等で短期間に流入・堆積した無遺物層。

16層：17層の土壌化層。8世紀初頭～9世紀後葉の遺物を包含する土層。

17層：淡灰～茶灰色系の粗砂～砂利層。基本的に無遺物層。

となる。基本土層層序と第Ⅱ～Ⅳ面の関係は、7～9層が第Ⅱ面被覆土、10(・11)層上面が第Ⅱ面生活面(遺構検出面)、12層下面(13層上面)が第Ⅲ-1面遺構検出面、14層下面(16層上面)が第Ⅲ-2面検出面(第Ⅳ面生活面)、17層上面(16層下面)が第Ⅳ層検出面となる。また、第1次調査A・B地区との関係は、第Ⅱ面が上層、第Ⅲ-2面が中層、第Ⅳ面が下層に対応する。

第Ⅳ面の調査終了後に、並行して調査を進めていたC・D地区の調査成果を鑑み、県教委と協議のうえ、第Ⅳ面ベース土(17層以下)における遺物包含層の有無を確認する試掘調査を実施した(第8・10図)。E地区は、一部で水流により形成された流路を確認したものの、第Ⅳ面より下部に集落・耕作地を形成しうる安定した生活面や遺構の落ち込みは確認できなかった。試掘調査は、E地区内3ヶ所で重機と人力により約1～1.5mの深さまで掘削し、土層観察および記録作業を7箇所で行った。いずれの試掘坑でも、一時期に堆積した粗砂層(第10図1・2、6～12層)と、土地が比較的安定した際に繁茂した植物が腐植・堆積したビート層(第10図3～5層)がほぼ水平に堆積している。また、試掘坑イの断面6第12層から弥生時代後期の甍片、試掘坑アの断面3第2d層から古墳時代中期の土師器高杯片各1点(第77図244・245)が出土したものの、いずれも粗砂層における摩滅した小片であることから、調査区外東側から流れ込んだものと判断した。

## 第2節 第Ⅱ面の遺構と遺物（第11～16図、第6～9表）

第Ⅱ面は、厚さ50cm以上を測る淡灰色系の粗砂～砂利層(第9図7～9層)により一度に被覆・埋没した生活面で、第1次調査B地区南端で検出した上面遺構群に対応する。出土遺物から15世紀後半代を下限とする。東側から西側に向けて緩やかに傾斜する扇状地形を造成した8面の平坦面、それを被覆する土砂の流路痕跡1条(SD1)等を確認した(第11・12図)。遺物は、8世紀後半～11世紀代の土師器、須恵器や中世陶器片の他、摩滅した弥生時代後期の甕片、鉄釘、木製品が少数出土した。

**SD1** N・O4区で検出した。調査区外東側から水流に伴って一気に流入し、第Ⅱ面を覆った土砂の流路痕跡であり、平坦面の上面を等高線にほぼ直交して東方向から西方向に流下する。幅80～280cm、深さ30～90cmと一定ではなく、第13図土層断面h-h'のとおり肩部が内湾する箇所もあり、水流の激しさがわかる。覆土は茶橙～灰色を呈する粗砂～砂利を基本に、20cm大の石が混ざる土層も存在する。覆土から須恵器、田嶋明人氏による土器編年Ⅷ期<sup>1)</sup>の内黒クロコ土師器有台塊を含む土師器が出土した。

**SD2** O4区平坦面4北東隅で検出した浅い溝で、延長約5m、幅26～66cm、深さ4～18cmを測る。覆土は淡灰白色砂利で、SD1形成時期に一度に埋没する。溝主軸方向が平坦面4の主軸方位と揃うこと等から、平坦面4の土手際に掘り込まれた浅い溝痕跡で、排水機能をもたないと考えられる。平坦面隅に掘られた同様の性格をもつ浅い溝は、平坦面2・5・6・8でも確認できる。覆土から摩滅した古代の土師器小片が出土した。

**SD3** M・N6区で検出した溝で屈曲しながら北西方向に延びる。幅12～18cm、深さ約12cm、覆土は淡灰色砂質土を基本とする。覆土から弥生時代後期の甕小片、古代の土師器、須恵器小片が出土した。

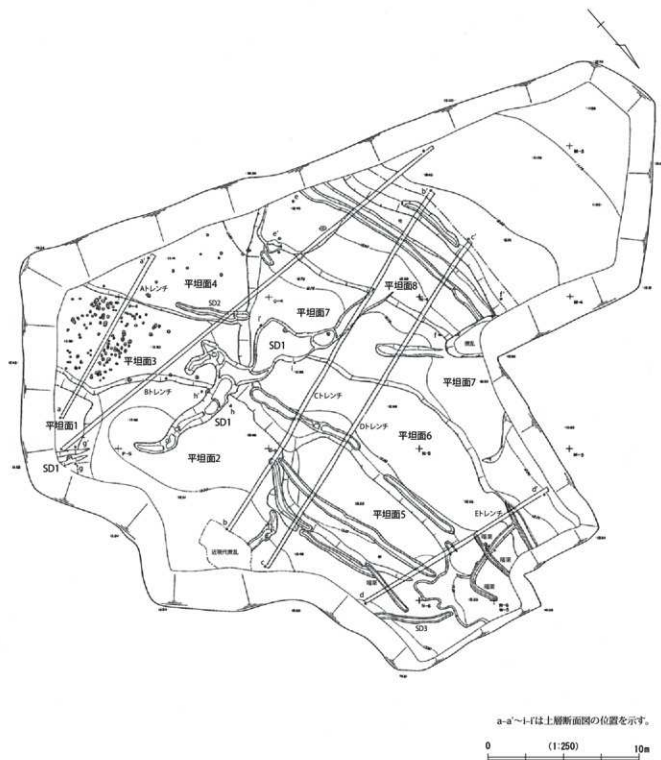
**平坦面1～8** 東側から西側に向けて緩やかに傾斜する自然地形を造成した平坦面で、ほとんどが調査区外に延びる。各平坦面は、等高線に沿った細長の長方形を意識した不整形な平面形態を呈し、平坦面間の高差は10～35cm程度である。最大の平坦面2が長軸24.1m以上、短軸11m以上、面積141.9㎡以上を、最小の平坦面5が長軸11.6m以上、短軸5.0m、面積47.4㎡以上を測り、規模・形状ともかなり不均一である。各平坦面単位でも第7表のとおり高低差5～42cmを測る地形の傾斜を有し、西側に向かうほど、高低差は顕著となる。

耕作土は、しまりのない暗灰褐～褐色系の腐植土と褐灰色粗砂を基本とし、部分的に藁や草由来の腐植土が多く混ざる土層(第14図Cトレンチ4・5層、第15図Dトレンチ5～8・9層、同図Eトレンチ3・5層等)が存在する。また、緩斜面を平坦面に造成する際の小規模な整地層(淡黄灰色粗砂と灰褐色砂質土の混合土、第14図Cトレンチ7・9層、第15図Dトレンチ10・12層等)を確認している。

各平坦面の付帯施設としては、前述の平坦面2・4・5・6・8に腐植土を覆土とする平坦面長軸方向に沿った浅い溝と、最下段の平坦面8西端に上幅30～50cm、下幅50～180cm、高さ2～15cmの畦畔が確認できる。平坦面2・4・5・6・8で確認した浅い溝は、排水機能をほとんどもたないものの、現在の耕作地でも傾斜面上方からの雨水の流入を避け、畝の水はけを目的に掘られる溝と類似している。また、平坦面3・5等では写真図版7のとおり、長軸10cm前後、深

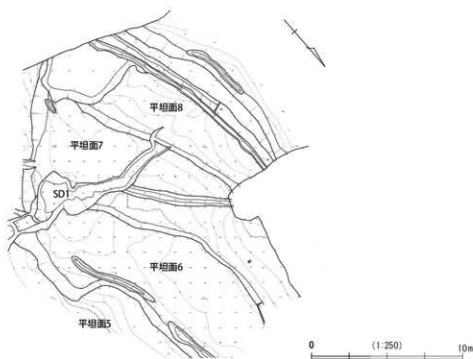
第6表 平坦面の規模・標高等一覧表

遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	標高 (m)	
				最高	最低
平坦面1	4.6～	2.8～	8.8～	13.81	13.76
平坦面2	24.1～	11.0～	141.9～	13.60	13.42
平坦面3	12.2～	6.2	58.2～	13.53	13.13
平坦面4	10.6～	7.4～	78.4～	13.23	12.81
平坦面5	11.6～	5.0	47.4～	13.31	13.15
平坦面6	21.0～	6.4	90.9～	13.06	12.90
平坦面7	27.5～	7.4	115.1～	12.90	12.63
平坦面8	16.4～	5.0	58.6～	12.62	12.28



第11図 第Ⅱ面平面図(縮尺1/250)

さ10cm以下の不整形な窪みを多数検出しており、耕作跡の可能性が高い。これらの平坦面の性格については、平坦面8を除き畦畔がないことや、各平坦面の高低差が大きく水田として水を張りにくいこと、耕作に伴う畝状の高まりが確認できないこと等の特徴や、また本遺跡C地区や四柳ミッコ遺跡E地区で検出した中世水田との平面形態の比較から、第Ⅱ面埋没時に放棄または休耕していた畝地と考える。



第12図 第Ⅱ面(耕作土除去後)平面図(縮尺1/250)

## 【g-g'土層:SD1】



- 1 淡灰色砂利層  
【ベース】灰色褐色砂質土(やや粘性あり)

## 【h-h'土層:SD1】



- 1 茶褐色砂利(鉄分が沈着、10 cm大の石が混ざる)
- 2 濃茶灰色粗砂(暗灰色粘砂が不規則な層状に混ざる)
- 3 淡茶褐色砂利(20 cm大の石が混ざる)
- 3' 3層と同質土(石が混ざらず、粗砂に近い)
- 4 濃灰色粗砂~小砂利(暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 【ベース】a 暗灰色粘質砂

## 【i-i'土層:SD1】



- 1 明灰黄色砂利(30 cm大の石が混ざる)
- 2 淡緑灰色シルト
- 3 褐色ビート質土(やや汚れる)
- 4 暗褐色~黒灰色ビート質土
- 5 淡灰色小砂利と粗砂の混合土
- 【ベース】a 暗灰褐色砂質土

## 【g-g'土層】

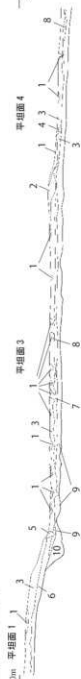


- 1 淡緑灰色シルトと褐色ビートの交互堆積層
- 2 1層と3層の混合土
- 3 淡明灰色粗砂(1層とベース土が混ざる)
- 4 暗褐色ビート(しまりなし)
- 5 淡緑灰色シルトと淡褐色ビート質土の交互堆積層
- 【ベース】a 黒灰色砂質土(腐植物が混ざる)



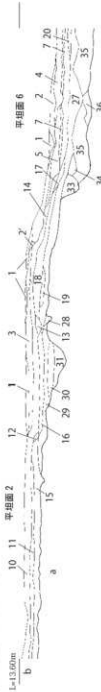
第13図 第Ⅱ面土層断面図(縮尺1/60)

【a-a'土層：Aトレンチ】



- 1 赤褐色～赤褐色細砂（短期間の流入土）
- 2 暗赤褐色細砂の混合土
- 3 暗赤褐色砂質土（しまりがなく、ビートが混ざる）
- 4 3層と5層の混合土
- 5 1-3層の混合土
- 6 暗赤褐色砂質土（3層が混ざる、やや粘性で、床石あり）
- 7 暗赤褐色粘質土（しまりがない）
- 8 暗赤褐色粘質土（0層にペービスが混ざる、しまりがない）

【b-b'土層：Cトレンチ】



- 9 赤褐色粘質土と暗褐色細砂質土の混合土（7層と同質土、礫地層）
- 10 8層と同質土
- 11 11層に暗褐色粘質土（ビート質でしまりがない）
- 12 8・15層の混合土
- 13 18層と同質土（粗砂が混ざる）
- 14 8層と同質土（下層土がブロック状に混ざる）
- 15 暗褐色粗砂（植物遺体が混ざる）
- 16 3層と同質土（しまりあり）
- 17 11層と下層土の薄砂層
- 18 暗褐色粘質土（8-14層がブロック状に混ざる）
- 19 暗褐色粘質土
- 20 8層と同質土（やや茶色を帯びる）
- 21 9層と同質土（暗褐色粘質土主体）
- 22 23層と同質土（より強い）
- 23 暗褐色粘質土（しまりなし）
- 24 15層と同質土（植物遺体、茶色土が混ざる）
- 25 15層と同質土（やや粘質）
- 26 15層と同質土（暗褐色粘質土、植物遺体が混ざる）
- 27 茶褐色粗砂（植物遺体が混ざる）
- 28 18層と同質土
- 29 暗褐色粘質土と暗褐色細砂と15層粘土が混ざる）
- 30 暗褐色粘質土（やや粘く、ビート多量混ざる）
- 31 赤褐色粘質土（ビートが多量混ざる）
- 32 赤褐色粘質土（暗褐色粘質土と砂質土の混合土）
- 33 34層と同質土（暗褐色粘質土）
- 34 茶褐色粗砂
- 35 赤褐色粘質土（黒色土がブロック状に混ざる）
- 36 赤褐色粘質土
- 37 暗褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土
- 38 37層と同質土（やや粘質）
- 39 37層と同質土（07層より粘強い）
- 40 11層と同質土（粘強い）
- 41 24層と同質土（暗褐色粘質土）

【c-c'土層：Dトレンチ】

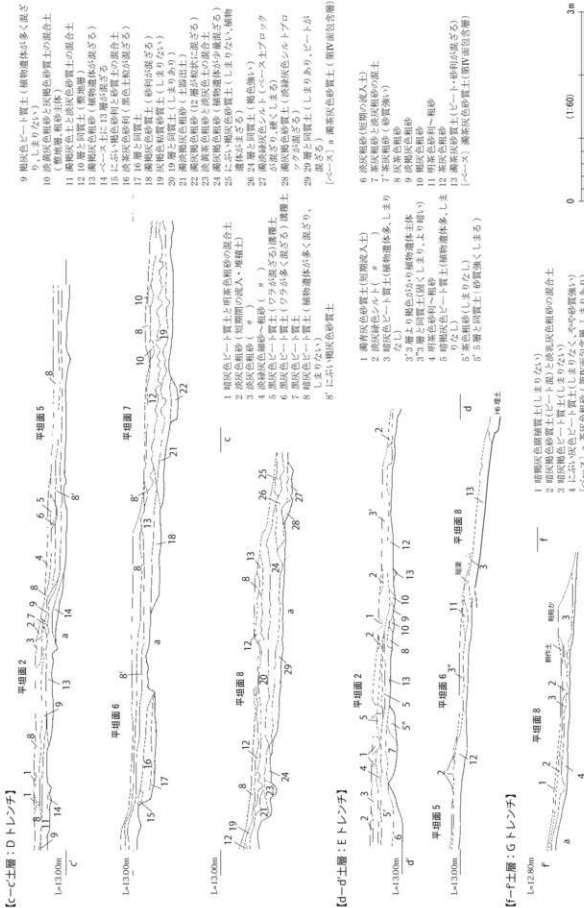


- 1 明茶色粗砂～砂利
- 2 赤褐色粘質土（短期間の流入、堆積土）
- 2' 2-3層の混合土
- 3 暗褐色粘質土（8層と同質土）
- 4 暗褐色粘質土（5層と同質土、ウラが混ざる）
- 5 暗褐色粘質土（しまりなく、植物遺体が主体）
- 6 7層と同質土（暗褐色粘質土が多量混ざる）
- 7 5層と暗褐色粘質土の混合土（礫混入）
- 8 暗褐色粘質土（しまりなく、植物遺体が多量混ざる）

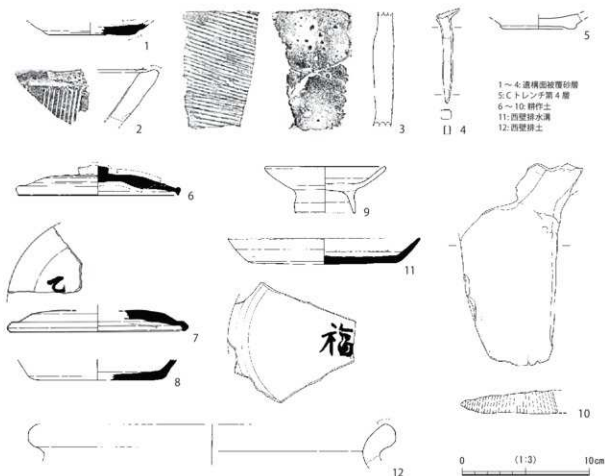
【d-d'土層：Eトレンチ】



新14図 新I面平断面A-Cトレンチ土層断面図（縮尺1/60）







第16図 第Ⅱ面出土遺物実測図(縮尺1/3)

遺物は、古墳時代後期の土師器細片、古代の土師器、須恵器、中世陶器片、鉄釘、木製品が出土し、遺構面を被覆した粗砂～砂利層出土の第16図1～4と、平坦面の耕作土と判断した土層出土の同図5～10を図化した。1は、須恵器無台帯で、底部は台状を呈する。Ⅵ<sub>2</sub>期に位置付けられる。2は、15世紀後半代の越前焼すり鉢口縁部小片で使用に伴う磨耗が著しい。珠洲焼堿3の内面には自然軸が認められる。2とともに調査(生活)面の埋没時期を示す。断面方形を呈する鉄釘4は長さ7.5cm、重さ30.3gを測り、打ち込みに伴い頭部はつぶれ、軸はやや曲がる。5は、Cトレンチ土層35から出土した古墳時代の土師器壺底部で、摩滅が著しい。底径5.3cmを測り、胎土に1mm以下の砂粒が多く混ざる。6・7は須恵器坏蓋である。6は口径12.6cm、器高2.4cmを測り、肩部は回転ヘラ切りの際の工具痕により段状を呈する。天井部内面中央部が磨耗し、転用碗の可能性をもつ。7は口径13.7cmを測り、口縁端部は内屈気味となる。天井部外面に「乙」と墨書される。須恵器無台盤8は灰黄褐色を呈し、体部と底部の境で明瞭に屈曲する。6はⅣ<sub>2</sub>(前)期、7・8はⅥ<sub>1</sub>期に位置付けられる。ロクロ土師器有台小皿9は口径9.5cm、器高3.7cmを測る。先細りながら長くのびる台部は、雑に貼り付けられ、焼成前に端部の一部が変形する。Ⅶ期に位置付けられる。10はクスギ節の柁目材を用いた鋤刃部の可能性をもつ。中央から左側刃部に向けて厚みを減じ、右側側面は再加工されたと考えられる。

**排土等出土遺物** 須恵器無台盤の第16図11、珠洲焼堿の12を図示した。11は口径15.0cm、器高2.1cmを測り、体部は直線的に外傾する。外底部中央に「福」と薄く墨書され、Ⅵ<sub>1</sub>期に位置付けられる。12は排土から採取した珠洲焼堿口縁部小片で、15世紀代の製品と考えられる。

第7表 第Ⅱ面出土土器観察表

※( )は残存量。

図号	№	実測番号	グランド名	出土遺構名・層位等	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	遺存率 (%)	胎土色調 (内面)	胎土色調 (外面)	胎土	模様	成形・装飾 (内面)	成形・装飾 (外面)	備考
16	1	H12-D17	O-4	遺構残存砂層	須恵器	舞台形	-	6.8	10.0	底-4	灰	灰	d	黒	ロコナナ	ロコナナ	遺構外周面にへり窪み 未確認
16	2	H12-D22	M-4	遺構残存砂層	須恵器	すり鉢	-	-	14.2	小片	灰黄	灰黄	細砂・細砂・赤 色粘	黒	ロコナナ	ロコナナ	9本1層位のたしり具。口 縁部無縁部
16	3	H12-D23	M-4	遺構残存砂層	須恵器	壺	-	-	-	-	灰	灰	細砂・灰濁 目土	中黄	あて履	平打タテ	
16	3	H12-D42	N-4	①土層4	土師器	壺	-	5.3	11.2	底-18	に広い黄 泥	に広い黄 泥	細砂・細砂・赤 土色粘	中黄	ナデ	ナデか	
16	6	H12-D23	N-4-2	耕作土	須恵器	片蓋	12.6	12.4	2.4	4	灰	灰	e	黒	ロコナナ	ロコナナ	底にへり窪 み確認ナシ
16	7	H12-D23	M-5	耕作土	須恵器	片蓋	13.7	-	11.3	2	灰黄	灰	a	中黄	ロコナナ白 縁部ナシ	ロコナナ	実測材料番号不明。文字 番号ナシ。8層目録1層 か
16	8	H13-D342	O-5-12	耕作土	須恵器	舞台形	-	8.0	11.5	底-2	灰黄粘	灰黄粘	d	中黄	ロコナナ	ロコナナ	
16	9	H12-D36	O-4	耕作土(へり 褐色土)	ロコナナ類 器	有台小皿	8.5	4.8	3.7	6	に広い黄 泥	に広い黄 泥	黒縁部付・縁少	黒	ロコナナ	ロコナナ	
16	11	H13-D11	-	西宮緑水溝	須恵器	舞台形	15.0	12.0	2.1	1	灰	灰	e	黒	ロコナナ	ロコナナ	外周面に磨面/縁。文字 ナシ確認ナシ
16	12	H12-D43	-	西宮緑水	須恵器	壺	10.0	-	13.0	小片	灰	灰	細砂・赤色粘 土	黒	ロコナナ	ロコナナ	

第8表 第Ⅱ面出土金属製品観察表

図号	№	実測番号	グランド名	出土遺構名・層位等	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
16	4	H12-D32	O-4	遺構残存砂層	金箔類	鉄釘	7.5	0.9	0.7	30.2	角釘。遺構に付る

第9表 第Ⅱ面出土木製品観察表

※( )は残存量。

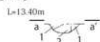
図号	№	実測番号	グランド名	出土遺構名・層位等	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	木取り	材質	備考
16	10	H13-D136	N-2-2	②土層耕作土(褐色土)	織の刃か		(15.0)	7.7	1.1	柱目	クス木類	同定№198

### 第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物 (第17～27図、第10表)

第Ⅲ-1面は、第Ⅱ面の耕作土・床土(最大厚20cm強)を取り外した状況で確認した遺構群である(第19図)。第1節で述べたとおり、第Ⅲ-2面を短期間で埋没させた淡灰緑色～褐灰色系の粗砂・砂質土(第9図13a・b、14層)をベース面、水の流れて堆積したと考えられる濁淡灰黄色粗砂を基本遺構覆土とする。第Ⅱ面・Ⅲ-2面遺構群とは主軸方位が異なる溝4条を検出したにとどまったため、記録作業は遺構部分に限定のうえ、第Ⅲ-2面調査と並行して実施した。ベース面の標高は、調査地区南壁断面東端で約13.1m、同西端で約11.5m、SD4東端で約13.4m、SD6北端で約12.5mと、他の生活面と同様に南側および西側に向けて緩やかに傾斜する。形成時期を明確に示す遺物の出土はなく、第Ⅱ面、第Ⅲ-2面との関係から中世前半代を中心に短期間営まれた生活面(耕作地)と推定する。

SD4 N-4・5、O-5区で検出した溝で、等高線にはほぼ直交して屈曲しながら南南西方向に流下する。延長約13.8m、幅35～60cm、深さ11～23cmを測り、覆土は淡灰黄色粗砂と暗灰褐色砂質土の交互堆積層を基本とする。古墳時代の土師器高坏、古代の土師器、須恵器が少数出土し、流れ込みと考えられる第18図13の古墳時代中期の土師器高坏脚部を図化した。

【SD4】



- 1 濁淡灰褐色粗砂土(2層が不規則に混ざる)
- 2 淡灰黄色粗砂と暗灰褐色砂質土の交互堆積層(各1～2cmの厚さ、水流で形成)
- 3 ①へり褐色土

【SD5】

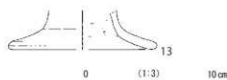


- 1 濁淡灰黄色粗砂(ベース土が不規則に混ざる)
- 2 ①へり褐色土



第17図 第Ⅲ-1面土層断面図(縮尺1/60)

SD5 M-O4区に位置し、屈曲しながら、北西方向に流下する溝である。中途の約5.5mの間は浅くなり明瞭に検出できなかった。幅30～40cm、深さ6～15cmを測り、覆土は濁淡黄灰色粗砂を基本とする。遺物は出土していない。



第18図 第三-1面SD4出土遺物実測図(縮尺1/3)

SD6 M4区で検出した溝で、西側に湾曲しながら北方向に流下する。調査時は幅30cm前後、深さ5～13cmを測る溝として図化した。第三-2面SD16と一部重複する幅約60cm、深さ約35cmを測る溝の一部を誤認したものである(第24・27・43図SD16土層断面トド)。覆土は、黄灰～茶灰色を基調とする粗砂～シルトで、出土遺物はない。

SD7 N3・4区で検出した溝で、主軸方位は東西方向を示す。幅25～35cm、深さ7～17cmを測り、覆土は濁淡黄灰色粗砂を基本とする。遺物は出土していない。

#### 第4節 第三-2面の遺構と遺物 (第19～48図、第11～15表)

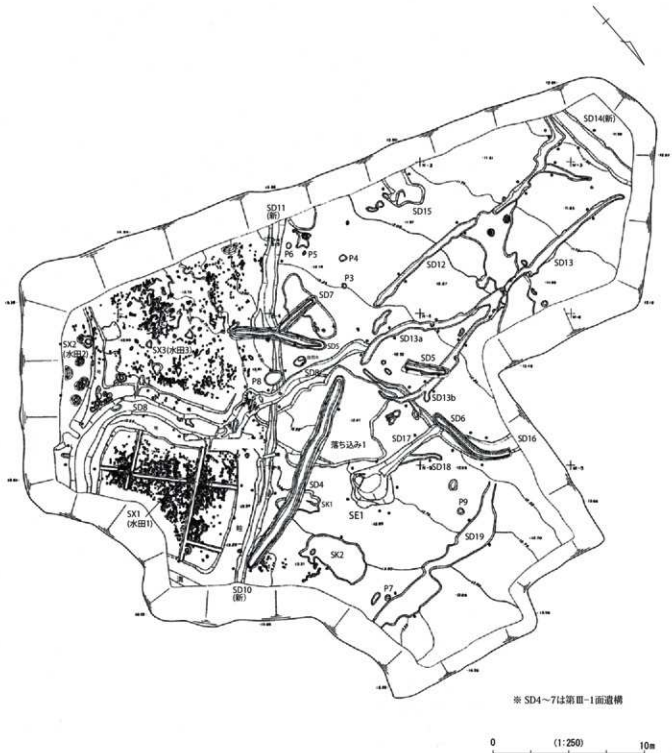
第三-1面ベース土である淡灰緑色～褐灰色砂質土(第9図土層13a・b、14、最大厚30cm)により短期間に埋没した調査(生活)面で、第四面包含層である灰褐色～黒灰色砂質土(同図土層16c)をベース土、短期間に流入・堆積した淡灰緑色～褐灰色砂質土を基本的な遺構覆土とする。遺構検出面の標高は、調査地区南東端(P4杭東側畦畔付近)で13.10m、N-3杭脇で11.70m、調査地区南西端(SD14南西脇)で11.36m、同北西端で12.47m、N-6杭脇で13.2mと、Nラインでの南北方向の高低差約1.50m、南壁での東西方向の高低差約1.7mを測り、他の調査(生活)面と同様に南側および西側に向けて緩やかに傾斜する地形である。

調査の結果、調査地区東半部で簡素な縦板組み井戸を掘えた方形土坑1基と流路(SE1・SD17・18)、水田3枚(SX1～3)と付帯する排水施設(SD8・10(新)・11(新))を検出し、耕作域として利用される。一方、西半部は等高線に直交する自然流路を含む未利用域と考えられる。遺物は、10世紀初頭を下限とする土師器、須恵器、木製品の他、縄文土器、弥生時代後期～古墳時代前期の土器細片、石器剥片等が出土しており、第1次調査A・B地区中層に対応する調査(生活)面となる。なお、後述する第四面の最終段階と考えられる西半部に分布する耕作に伴う小溝群については、起伏が残存せず、第三-2面形成時期と第四面最終機能時期の間には一定の空白期間を想定できる。

##### 1 井戸跡(第29～32図)

SE1・SD17・18 M-N4・5区で検出した遺構群で、調査区外西側の耕作地に湧水を供給する水利施設と考える。不整形な隅丸方形の平面形態の大型土坑と、その南東端隅に作られた簡易的な縦板組み井戸、湧水の流路SD17(・18)から構成される。調査時は、大型土坑と井戸を併せてSE1としたが、以下では井戸側材で囲まれる範囲を井戸、その外側の掘削部分を大型土坑として記述する。

井戸は、井戸側材上端で径68～78cm、深さ37cmを測り、側材は土圧のため内傾する。井戸側材の設置は、まず大型土坑底面を10cm程度掘り込み、その壁面に沿わせながら、土砂の崩落を防止する目的で、不揃いな転用板材11枚を略半円形に乱雑に打ち込み簡素なつくりで、側材設置に伴う掘り方は認められない。その後、井戸側北辺の開口部に幅90cm、高さ約32cmの長方形板材(第31図28)を横長方向で内外から杭や小石を用いて固定する。長方形板材の上辺中央部が、幅11cm、深さ9cmのV字状に切り込まれることから、湧水を井戸内部に一旦溜め、その余水分が大型土坑を経て、SD17に自然流下する施設と考えられる。標高は、長方形板材の切り込み底が12.62m、大型土坑底面が12.38m、

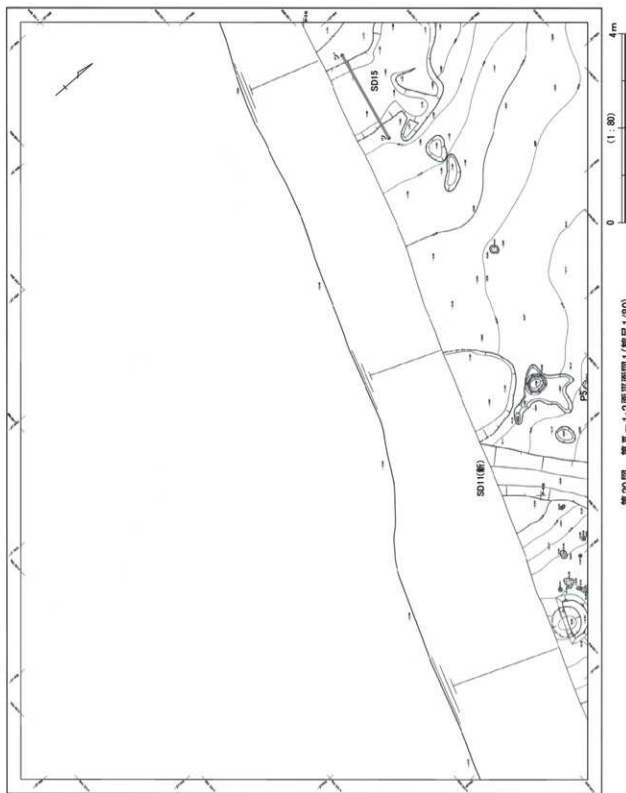


第19図 第三-1・2面遺構配置図(縮尺1/250)

SD17底面が12.41mを測る。大型土坑は、井戸に先行して掘られる。長辺267cm、短辺252cm、深さ30cmを測り、肩部は緩やかに傾斜する。覆土は、井戸内に青灰色粗砂(第29図12層)、大型土坑に淡灰色～茶黄色系を基調とする粗砂～細砂(同図5～9層)が一定程度自然堆積した後に、SX1～3と同時に暗灰褐色砂質土(同図3層)で一度に埋没する。使用した側材のうち7点について樹種同定を行い、内訳はスダジイ5点、スギ2点の結果を得ている。

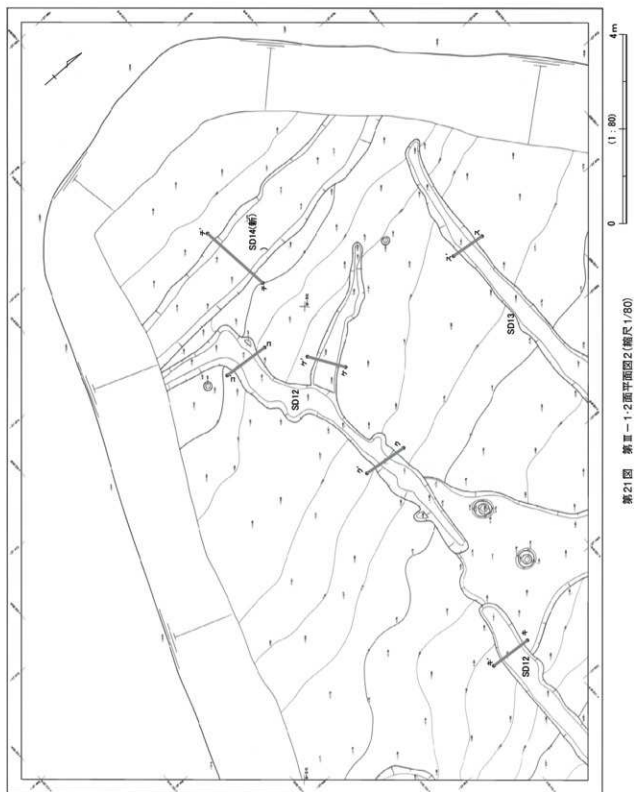
SD17は延長約4.6mを検出し、等高線に直交して西方向に流下する。幅50～90cm、深さ20cm前後

2	5
3	4
6	7
9	10



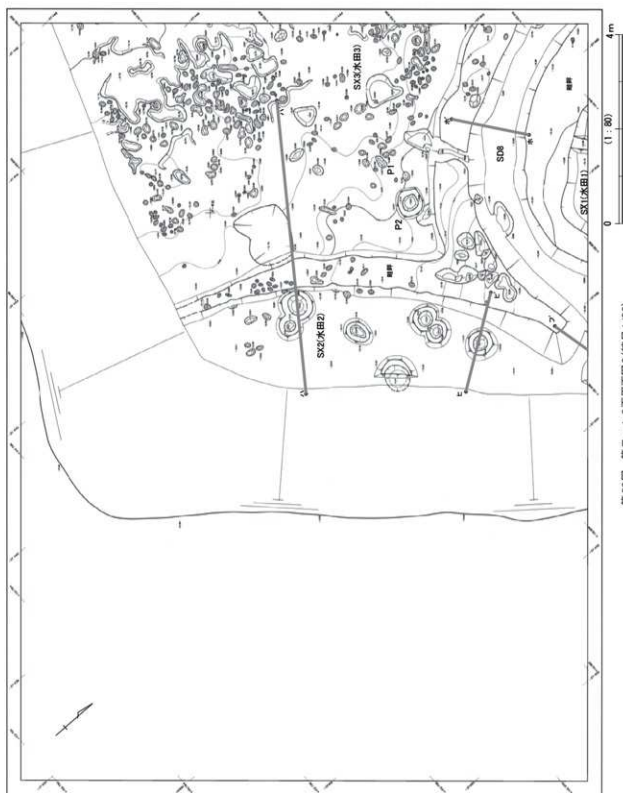
第20図 第三-1・2面平面図1 (縮尺1/80)

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10		



第21図 第三-1-2面平面図2 (縮尺1/80)

1	2
6	8
9	10



第22図 第三-1-2面平面図3(縮尺1/80)

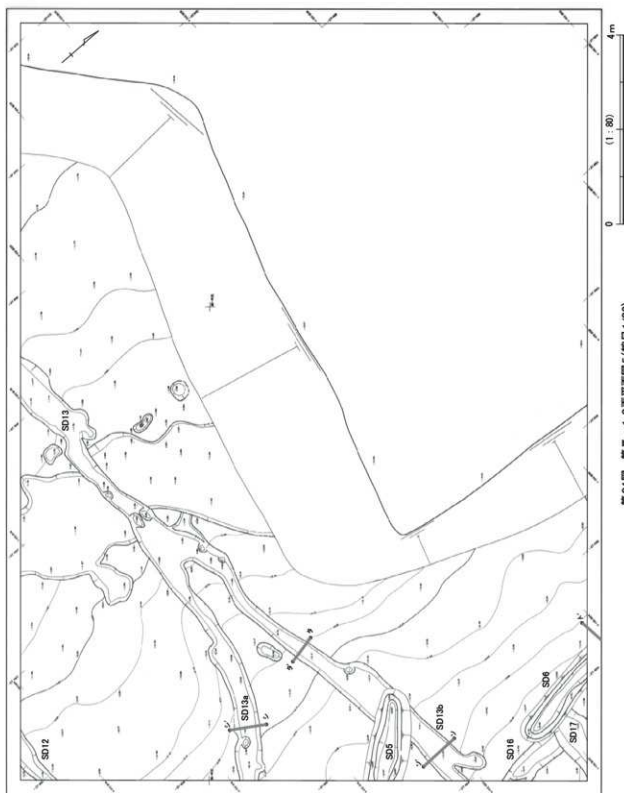
3	1	2
4	5	6
7	8	9
10		10



第23図 第一-1-2面平面図4(縮尺1/80)



1	2
3	4
6	7
8	9
10	



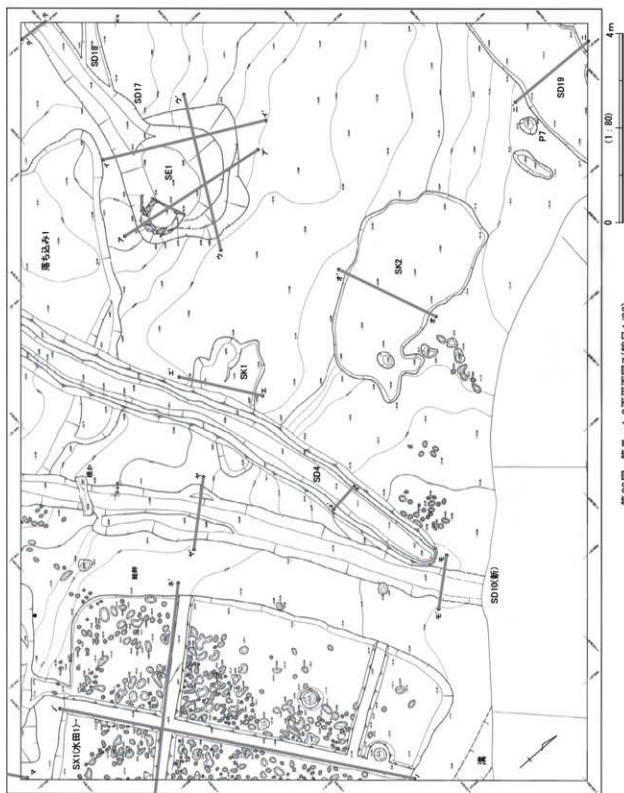
第24図 第Ⅲ-1-2面平面図5(縮尺1/80)

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10



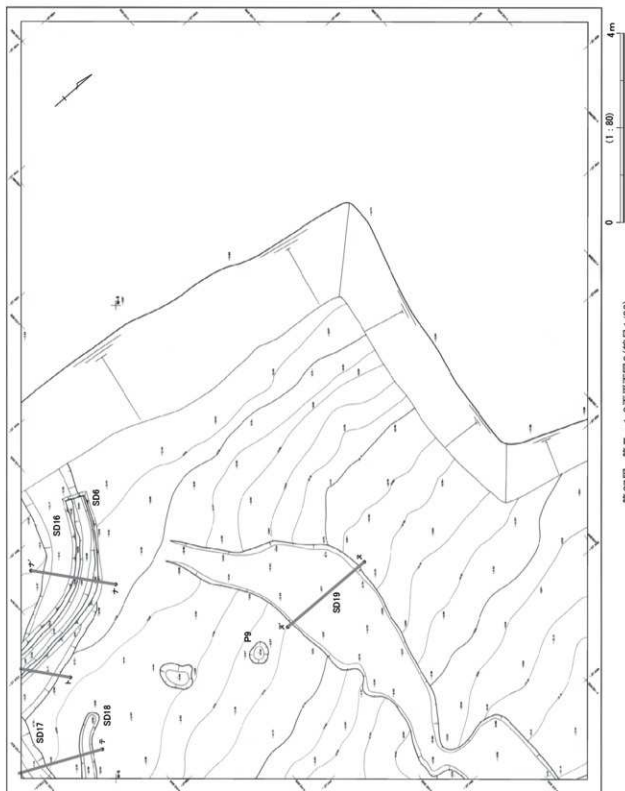
新25図 新Ⅲ-1-2面平面図6(縮尺1/80)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

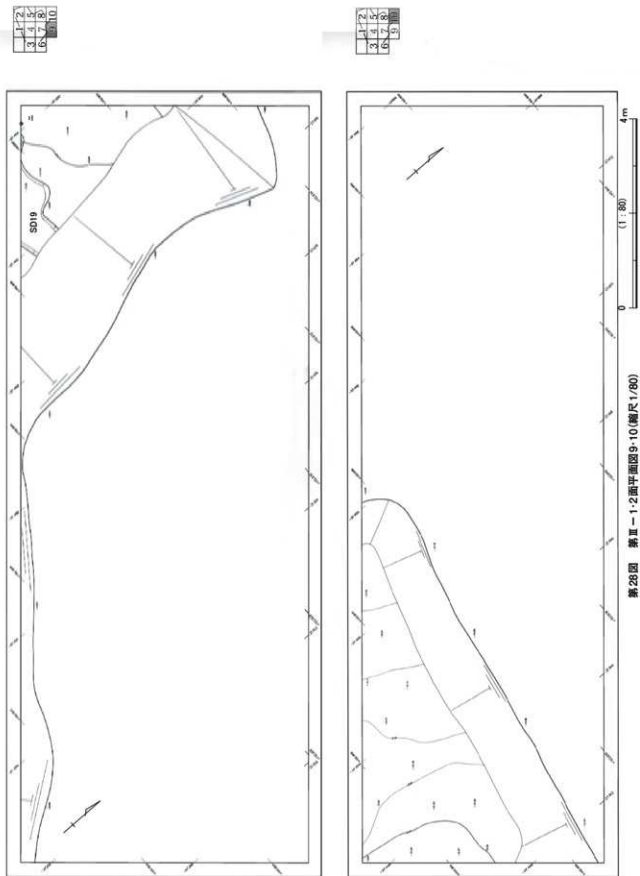


第26図 第三-1-2面平面図7(縮尺1/80)

1	2
3	4
6	7
8	10



第27図 第Ⅲ-1-2面平面図8(縮尺1/80)



第28図 第三-1-2面平面図9-10(縮尺1/80)

を測り、覆土は淡青～淡灰黄色細砂である。遺構の切り合い関係から第Ⅲ-1面SD6より古く、第Ⅲ-2面SD16より新しい。SD18は、SD17から派生する浅い溝で、幅28～50cm、深さ5cm前後を測り、覆土は淡青灰色細砂である。ともにSE1と同時期に埋没したと考えられる。

SE1から古代の土師器、須恵器、木製品が出土し、第30図14～第32図30を图示した。須恵器14～16は井戸側板外の大型土坑覆土、須恵器瓶17は井戸内覆土(第29図土層12)から出土した。16はSD8堰部分、SD18等からも破片が出土している。無台坏14は口径11.7cm、器高3.0cmを測り、底部内面は使用に伴う磨耗が著しい。有台坏15は体部下半にふくらみを有する。14はIV<sub>2(前)</sub>～V<sub>1</sub>期、15はIV<sub>2(后)</sub>期に位置付けられる。横瓶16は口径15.9cmを測り、口縁部は外傾しながらのびる。瓶頸17の頸部内面に粘土紐の接合痕をそのまま残す。

木製品は、井戸側材第30図18～第32図29と、井戸枠外の大型土坑覆土から出土した隅丸長方形を呈する曲物底板第32図30を图示した。18～24、26～29は板状木製品、25は杭状木製品である。18は厚さ5.6cmを測り、スダジイ材を用いる。19は板目取りのスギ材を用い、長さ約65cm、幅15.8cm、厚さ2.4cmを測り、腐食が著しい。20は厚さ約5cmを測り、先端を斜方向に加工する。21は両端を粗く切断した転用材である。22はスダジイ材を用い、先端部を雑に切断する。23は長さ約97cm、幅18.3cm、厚さ4.9cmを測る長い材で、より長い板材を切断した転用材と考えられる。24は板目取りしたスダジイ材の転用材である。表面には一辺約1.6cm、深さ約0.9cmを測る窪み2カ所と、それをつなぐ浅い窪みが認められる。25は、樹皮付きの枝を用いた杭状木製品で、側面に加工痕が残る。材はスギと考えられる。26は長さ約89cm、幅20cm、厚さ6.5cmを測るスギ材で、先端部は打ち込みに伴い砂粒がくい込む。27はスダジイ材の転用材で、打ち込みのため先端を斜方向に切断する。板材28は、幅90cm、高さ32.4cm、厚さ1.8cmを測り、湧水を流すため上辺中央部に幅11cm、深さ9cmのV字状の粗い加工の切れ込みを入れる。第32図29はスダジイ材を用いる。先端部を斜方向に切断し、打ち込みに伴い砂粒がくい込む。30は隅丸長方形を呈する曲物底板で、長軸39.8cm、短軸13.8cm以上、厚さ0.8cmを測る。周縁部4ヶ所に側板と結合するための榫皮結合痕が遺存し、内外面とも刀子痕が多く認められる。スギ材と考えられる。SD17からは、弥生時代後期の高坏細片、古代の土師器・須恵器片、SD18からは、古墳時代中期の高坏脚部片、古代の土師器・須恵器片が出土した。

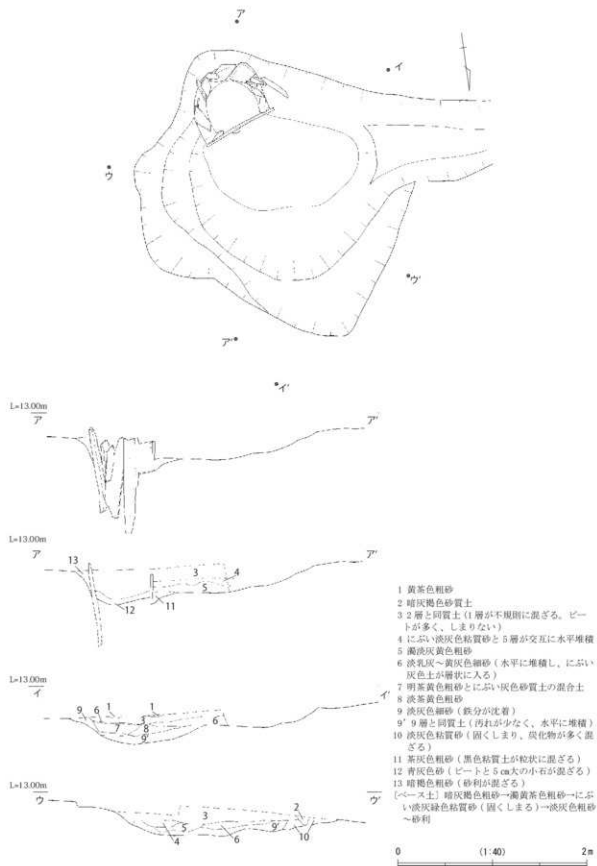
## 2 土坑(第26・32・33図)

**SK1** N-5区で検出した不定形な浅い落ち込みである。長軸295cm、短軸135cm、深さ15cmを測り、覆土は濁茶灰色粗砂～砂利である。当時の生活面に存在した浅い窪みにSE1と同時期に粗砂・砂利が流入し、堆積したものと考えられる。古代の土師器破片が出土したにとどまる。

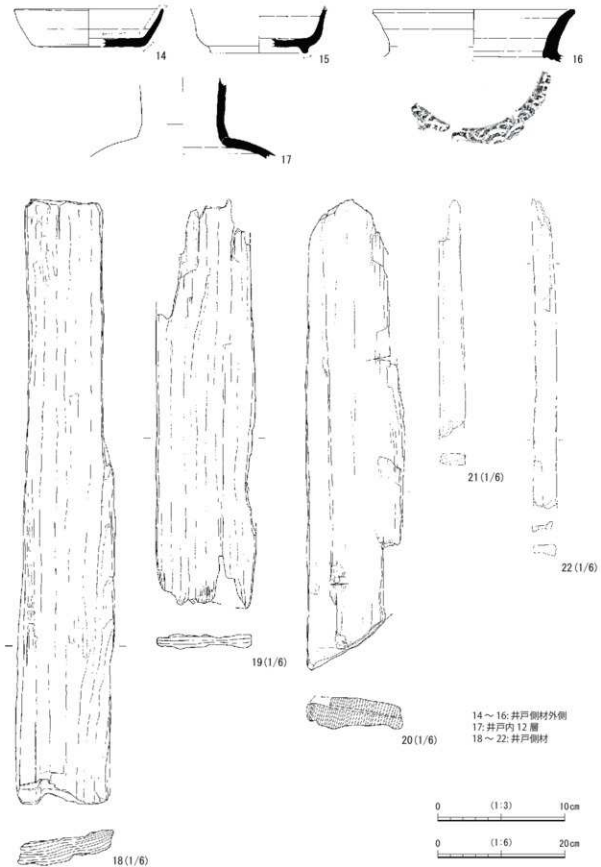
**SK2** N-5区で検出した不定形な浅い落ち込みである。長軸440cm、短軸258cm、深さ1～13cmを測り、覆土は濁灰緑色砂質土である。第IV面SD80と一部重複しており、SD80の埋没過程で生じた窪みにSK1と同じ理由で流入土が堆積したものと考えられる。遺物は、摩滅した縄文土器細片、弥生時代後期～古墳時代の破片、古代の土師器・須恵器片が出土し、第32図31の須恵器有台坏片を图示した。31は、底部外面に墨書を記すが、文字は判読できない。

## 3 水田跡(第34～42図)

**SX1(水田1)** O-P4-5区で検出した水田で、地形の傾斜に沿いながらSX2・3、SD8(・10(新)・11(新))と一体として造成される。平面形態は崩れた略長方形を呈し、北西～南東方向で約94m、北東～南西方向で約74m、推定面積約70㎡を測る。畦畔は上部を失うが、南東・南東・北東辺で幅50～80cm、

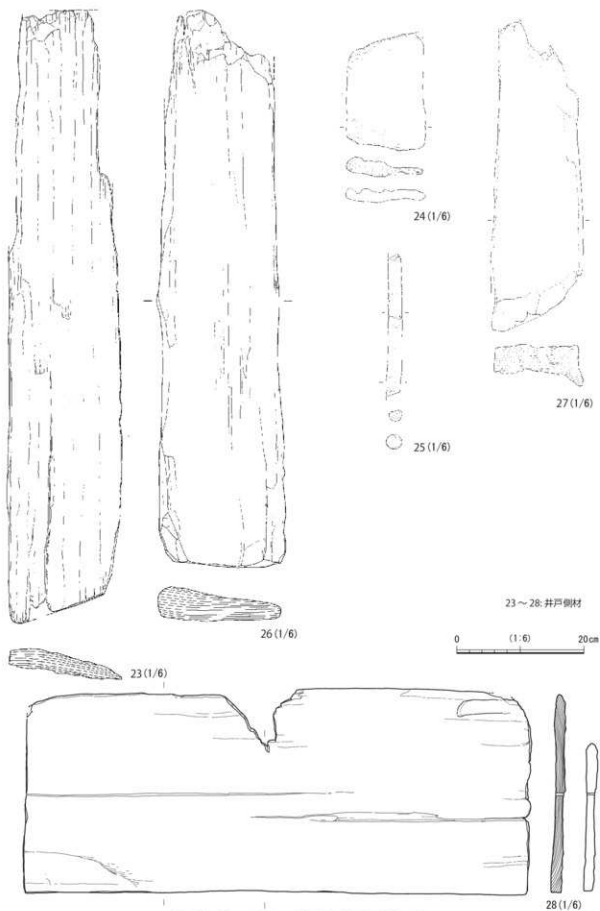


第29図 第三-2面SE1平面図・土層断面図(縮尺1/40)

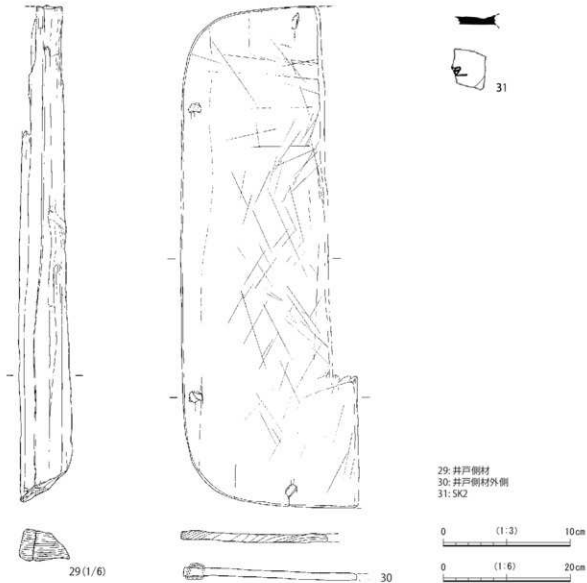


第30図 第三-2面SE1出土遺物実測図1(縮尺1/3・1/6)

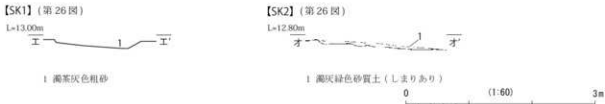




第31図 第Ⅲ-2面SE1出土遺物実測図2(縮尺1/6)



第32図 第Ⅱ-2面SE1、SK2出土遺物実測図(縮尺1/3・1/6)



第33図 第Ⅱ-2面SK土層断面図(縮尺1/60)

北西辺で幅110～135cmと、標高の低い北西側をしっかりと幅広に造る。畦畔の肩部は比較的緩やかであり、復元高は10cm以上と考えられる。SD8につながる水口(排水口)は、畦畔南西辺において開放した状態で検出でき、幅30～60cm、深さ5cm前後、SD8底面との高低差約30cmを測る。また、取水口は調査区外西側に存在し、用水路として第34図畦畔北東辺にある幅50～60cmを測る溝を想定するが、湧水と調査壁の崩落等のため上幅を検出したにとどまる。



第34図 第三-2面水田遺構平面図(縮尺1/100)

【SX1(水田1)】

L=13.50m



L=13.50m



- 1 褐色粘質土(固くしまる)
- 1' 土と同質土(やや軟い)
- 2 明黄～赤灰色砂(ベース土状、腐植が盛る、短期間)
- 2' 2層と同質土(ベース土状が多く盛る)
- 3 褐色緑色シルト～弱粘質砂(固くしまる、短期間に侵入)

- 3' 3層と同質土(ベース土状が不規則に盛る)
- 4 褐色粘質土とベース土の混合土(固くしまり、炭化物)
- 4' 褐色粘質土
- 4'' 土と同質土(ベース土主体、硬土)
- 5 ベース土に2層アロクが盛る
- 5' (ベース土) 暗灰褐色粘質土、褐色粘質砂

【SX2(水田2-3)】

L=13.20m



畦畔

【SX2(水田2)】

L=13.60m



畦畔

【SX2(水田2)】

L=13.60m



- 1 褐色粘質土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 土に近い赤褐色粘質土～粘砂
- 4 赤褐色粘質土、しまりあり
- 5 赤褐色粘質土(炭化物が盛る)

- 6 3層に褐色土状が盛る
- 7 土に近い赤褐色粘質土(自然堆積土)
- 8 土に近い赤褐色粘質土(自然堆積土)
- 9 土に近い赤褐色粘質土(自然堆積土)
- 9' (ベース土) 暗灰褐色粘質土(暗黄褐色粘質土)

【SX2(水田2)水口】

L=13.60m



- 1 褐色粘質土
- 2 赤褐色粘質土(しまりあり)
- 3 赤褐色粘質土(赤褐色粘質土がアロク状に盛る)
- 4 赤褐色粘質土
- 5 赤褐色粘質土
- 6 土に近い赤褐色粘質土(炭化物が盛る)
- 7 土に近い赤褐色粘質土

- 1 褐色粘質土(しまりあり)
- 2 赤褐色粘質土(しまりあり)
- 3 赤褐色粘質土(木製品出土)
- 4 褐色粘質土と3層の混合土(しまりない)
- 5 3層に5cm程度の砂利が盛る(薄いビート層が入る)
- 6 赤褐色粘質土(黒色土状が盛る)
- 7 4層と同質土
- 7' (ベース土) 暗灰褐色粘質土(暗黄褐色粘質土)

第35図 第一～二面SX土層断面図(縮尺1/40)

耕作面の標高は、南西角で13.13m、南東端で13.18m、北西角で13.16m、北西角で13.15mと、高低差はほとんどない。耕作面の状況は土層断面等の検討から、短期間で土砂流入(水田の埋没)→復旧作業→耕作放棄(再度の土砂流入)の3過程を復元している<sup>27)</sup>。まず、明黄～淡灰色砂や淡灰緑色シルト～弱粘質砂の流入により水田は埋没したと考えられる。その後、耕作面に堆積した流入土を耕作土中に働き込む作業を行ったようだ。流入土が耕作面に不規則にくい込む状況(第35図2-3層等、写真図版14)は、その痕跡と理解する。再び、硬く締まった濁褐色系の砂質土(同図層1-1層)が大量に流入・堆積して、水田耕作は放棄される。

流入土及び耕作土からⅥ<sub>1</sub>期を下限とする古代の土師器・須恵器が出土し、第36図32～37の須恵器を図化した。32・33・35・37は被覆土(流入土)、34・36は耕作土出土である。無台坏32は赤褐色を呈し、体部は大きく外傾する。無台坏33は口径13.3cm、器高2.4cmを測る。底部外面の墨書の文字は「福」に復元できる。無台坏34も底部外面に墨書されるが、文字は判読できない。坏蓋35は口径13.8cmを測り、口縁端部の折り返しはあまり目立たない。36・37は有台坏である。36は口径10.7cm、器高4.2cmを測り、体部は直線的に外傾する。底部外面に記された墨書の文字は判読できない。37は断面方形の台部をしっかりと貼り付ける。36がⅥ<sub>1</sub>期、32・37がⅥ<sub>2</sub>期、35がⅥ<sub>3</sub>期に位置付けられる。

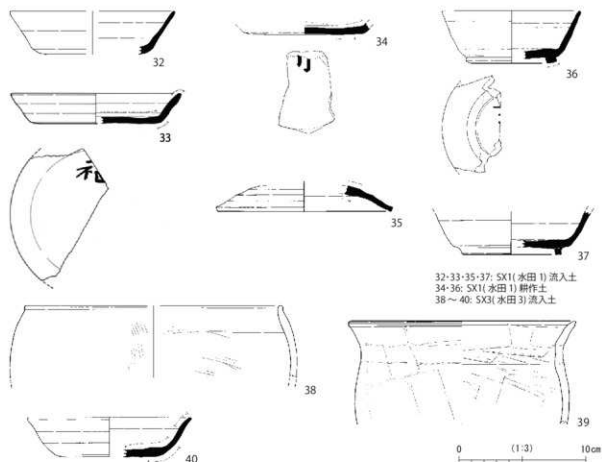
**SX2(水田2)** P-3-4区(SX3南東側に隣接した水田で、現地調査当初はSD9とした。水田の北西部分を検出し、大部分は調査区外北東側に延びる。弧状を呈する北西側畦畔は延長9.7m以上、幅20～70cmを測り、北端で畦畔北東辺に接続する。畦畔と耕作面との高低差は南西端が約10cm、水口北東側が47cmと、北側に向かうにつれ畦畔は高くなる。畦畔の肩部はSX1と同様に比較的緩やかである。SD8につながる水口(排水溝)は、畦畔北側において開放した状態で確認でき、幅約90cm、深さ42cm、SD8底との高低差20cmを測る。水口は、耕作面と同時代に淡灰色系の粗砂・細砂で埋没する。

耕作面の標高は13.01～13.03mと、ほぼ水平を示す。耕作面の覆土は、流入土と考えられる淡灰～灰色系の粗砂・細砂の堆積厚はSX1・3に比して薄く、またSX1のような流入土の除去作業痕跡は確認できないものの、固く締まった濁灰褐～灰緑色砂質土が再流入・堆積する状況は同様である。なお、遺構面の検出時点で、不規則な配置で長軸20～40cm、深さ10～15cm、濁緑灰色粘質土を基本覆土とする不整形な小穴7基を検出した。出土した遺物はない。

**SX3(水田3)** O-P-3-4区で検出した最も大きな水田で、SD8を挟んでSX1の南西側に位置し、調査区外南側に延びる。平面形態は、北東角が突出した崩れた台形を呈し、北西～南東方向約8.8m、北東～南西方向10.6m、面積93m<sup>2</sup>以上を測る。畦畔は、SX2と共有する南東辺が高さ10～17cmを、北東辺が幅50～90cm、高さ8～12cmを測り、北西辺は確認できなかった。畦畔北西辺は、SD11(新)東側に直線的に存在したと推定する。畦畔の肩部はSX1・2と同様に比較的緩やかな傾斜である。SD8につながる水口(排水口)は、畦畔北東辺の東寄りにおいて、ほぼ開放した状態で検出でき、幅22～48cm、深さ15cm前後、SD8底との高低差約15cmを測る。水田の灌水機能等を加味すれば、失われた北西辺北寄りにSD8の堰につながる本来の水口が存在したと考える。検出した水口は補助的なものであった可能性が高い。なお、取水口は調査区外である。

耕作面の標高は、南東端で12.93m、北東角で13.02m、北西角で12.90m、南東隅で12.80mを測り、北東から南西方向にゆるやかに約20cm下がる。耕作面の覆土は、SX2と同様に淡灰～淡灰緑色の細砂～シルト、粗砂が流入・堆積した後に、固く締まった濁灰褐～灰緑色砂質土が流入・堆積する。耕作面で多数検出した不規則な小さな窪みは、SX1の様相とは異なり、淡灰～淡灰緑色土砂が流入する前に形成されたものであり、足跡を含めた耕作に伴う痕跡と推定する。

流入土中から弥生土器、Ⅵ<sub>1</sub>期を下限とする古代の土師器・須恵器が出土し、第36図38～40を図



32-33-35-37: SX1(水田1)流入土  
 34-36: SX1(水田1)耕作土  
 38~40: SX3(水田3)流入土

第36図 第三-2面水田遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

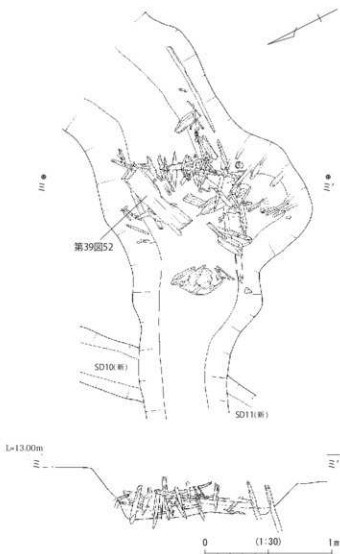
示した。鉢型の弥生土器小片38は口径約20cmを測り、内外とも摩滅が著しい。土師器甕39は口径17.8cmを測る。胴部は、内面を板状工具によるナデ調整、外面をケズリ調整で粗く仕上げ上げる。須恵器無台坏40は口径12.8cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。底部内面は使用に伴う磨耗が顕著である。SD8 N~P4、P5区で検出したSX1~3と一体をなす基幹水路である。SX1~3の間を湾曲しながら流れ、SX3の北端コーナーに沿って短く南西方向に屈曲した後、堰を経て西側に折れて流下し、SD13を経て、SD14(新)につながるものと推定する。SX1~3とは水口で連結し、水口の標高12.9~13.15mと堰の標高12.8mの関係から、主に排水に用いたと考えられる。遺構の切り合い関係では、SD10(新)・11(新)より新しく、SD13より古い。

溝の規模は、堰より上流が幅96~120cm、深さ30~50cmを、堰から下流で幅50~70cm、深さ15~22cmを測り、最終段階(埋没段階)は一回り小振りで浅くなる。覆土は、排水機能を維持した段階で堆積した暗褐色系の腐植土や灰色系の粗砂・細砂の上層に、短期間に流入した濁灰黄~淡灰緑色を呈する粗砂~シルトが堆積する。第38図マ-マ'土層断面7層の存在から、SX3と同時期の埋没が復元できる。

SD8のSX3北東コーナー近くの屈曲部で、多数の細い杭を打ち込んだ堰を検出した(第37図)。杭は、主に樹皮を残す広葉樹の枝を利用したものであり、杭径は2~4cmを主体に1~10cmを測る。いずれの杭も打ち込む先端を斜方向に尖らせており、1方向のみを削ったものが主体を占める。杭7点について樹種同定を行い、内訳はツバキ属、ヤナギ属、サクラ属、コナラ節、ウツギ属が各1点、ガマズミ

属2点と、利用可能な雑木を特に選択せず利用した状況を復元できる。

杭の配置から大きくA～Dの4つのグループに分けられ、いずれも何度も補修される。Aグループは、SD8に直交して打たれた杭列群で、頭部を下流側である西方向に向けた斜めの状態で、約130cmの幅で検出した。杭間から二股状の横木が出土したことから、本来は直立に打ち込まれた杭の間に横木を渡して水を堰きとめる構造であったものが、水圧により杭が下流側に押し倒されたものと推定する。杭列に接して長さ約60cm、幅18cmの板状木製品(第39図52)が出土しており、杭間に渡された水を堰き止める横木本体の可能性が高い。また、Aグループの堰の最終機能段階(埋没段階)の溝底は標高12.55mを測り、溝底から約5～10cmの厚さで濁明茶色粗砂が堆積する。Bグループは、Aグループ南西側左岸が瘤状にふくらむ箇所です。主に南北方向に打たれた杭列群で、頭部を西方向に向けた斜めの状態で、約50cmの幅で検出した。横木は確認できなかった。Cグループは、SD8の瘤状のふくらむ箇所を塞ぐように東西方向に打たれた杭列群で、頭部を北方向に向



第37図 第三-2面SD8堰平面図・断面図(縮尺1/30)

けた斜めの状態で、約80cmの幅で確認した。Aグループに比して明確な列を成さず、多数の杭を乱雑に打ち込んでおり、Aグループのように1枚の横木を渡すのではなく、主に小枝や草木を挟んだ堰き止め構造で護岸機能を併せもつものと推定する。杭の頭部が北方向に倒れることから南側から水圧を受けており、Bグループと併せてSX3の水口(排水口)の末端と考えられ、SX3耕作面との高低差は約30cmを測る。Dグループは、SD8の両岸肩部に不規則に打ち込まれた杭群及び横木で、主に護岸機能をもつと考えられる。右岸ではAグループ下流に延長約60cmを確認、水流が強くなる左岸では延長約200cmにわたり、細長い板を横木として併用しながら溝肩部を何度も補強する。使用した杭は最大径約10cmを測る。

遺物は、古代の土師器・須恵器、木製品の他、縄文土器片・弥生土器片各1点が出土、第39図41～48を図示した。うち44・45・48は堰付近から出土したものである。41は縄文土器深鉢小片で、外面を半裁竹管で加飾する。中期前葉に位置付けられる。非ロクロの内黒土師器塊42は口径11.8cmを測り、内外面とも丁寧なミガキ調整を施す。土師器小甕底部43は肉厚で、煮炊きに伴うス・ヨゴレの付着が著しい。ロクロ土師器小甕44は口径12.6cmを測り、口縁端部を嚙状につまみあげる。45～48は須

## 【SD8】 (第22・23・25・26図)



- 1 茶褐色砂質土 (ビートが多く混ざる)
- 2 1層に淡灰色細砂がブロック状に混ざる
- 3 淡灰色粗砂～砂利 (炭粒、ビートが若干混ざる)
- 4 1と同質土
- 5 濁黄灰色粗砂とぶい褐色砂質土の混合土 (ビートが多く混ざる)
- 6 濁灰色粗砂と褐色ビート質土の混合土 (ベース土) 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



- 1 茶褐色粗砂と淡灰色シルトの層状堆積
- 2 淡灰色細砂～シルトと褐色ビート質土の層状堆積
- 3 暗灰色腐植土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 4 淡灰色粗砂
- 5 褐色ビート質土
- 6 茶褐色粗砂 (Na60木製盤出土)
- 7 淡黄灰色細砂 (炭粒が混ざる)
- 8 濁灰色細砂 (5層がブロック状に混ざる)
- 9 濁灰色砂質土 (ビートが混ざる)
- 10 7層と同質土
- 11 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



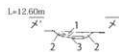
- 1 緑灰色粗砂質土 (粘質でしまりあり)
- 2 1層と同質土 (やや茶色帯びる)
- 3 濁黄灰色粗砂と淡灰色細砂のレンズ状堆積
- 4 1層と同質土 (灰色強い)
- 5 茶褐色粗砂と緑灰色砂質土のレンズ状堆積
- 6 淡茶色粗砂と淡灰緑色シルトのレンズ状堆積 (炭粒が多く混ざる)
- 7 淡灰色～淡灰緑色細砂～シルト (水成堆積)
- 8 濁淡灰色粗砂 (植物遺体が混ざる)
- 9 暗褐色腐植土 (淡緑灰色シルト塊が混ざる)
- 9' 9層と同質土 (灰色が強い)
- 10 8層と同質土 (ベース土がブロック状に混ざる)
- 11 暗褐色腐植土
- 12 10層と同質土
- 13 9層と同質土

[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



- 1 淡灰黄色細砂 (しまりあり、炭化物が多く混ざる)
- 2 濁淡黄灰色粗砂 (褐色土塊が混ざる)
- 3 2層と同質土
- 4 濁淡灰黄色粗砂と褐色砂質土の混合土
- 5 4層と同質土 (炭粒が少し混ざる)
- 6 茶灰色粗砂～小砂利
- 7 濁灰色砂質土 (植物遺体が多く混ざる)

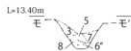
[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



- 1 濁黄灰色粗砂
- 2 1層と茶灰色ビートの混合土
- 3 ぶい褐色ビート

[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)

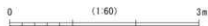
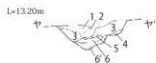
## 【SD10(新)】 (第26図)



- 1 濁茶灰色粗砂
- 2 ぶい褐色砂質土
- 3 濁褐色砂質土 (淡灰色砂質土塊が混ざる)
- 4 褐色砂質土
- 5 濁淡灰色シルトと茶灰色粗砂の交互堆積層
- 6 淡灰黄色粗砂 (炭粒が混ざる)

- 6' 淡灰色粗砂 (炭粒が混ざる)
- 6'' 6層と同質土 (砂利が混ざる)
- 7 ぶい灰褐色砂質土 (粗砂が混ざる)
- 8 明茶色砂利 (固くしまる)

[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



## 【SD11(新)】 (第23図)



- 1 濁褐色砂質土と濁淡灰色シルト～細砂の交互堆積
- 2 濁淡灰色砂 (黒色ビートが層状に混ざる)
- 3 褐色ビート
- 4 2層と同質土 (黄色が強い)

[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)



- 1 淡灰緑色シルト (褐色ビートが混ざり、しまりあり)
- 2 淡灰緑色細砂 (褐色ビートが混ざり、しまりあり)
- 3 1・2層と濁褐色砂質土の混合土
- 4 淡灰緑色粗砂 (ビート、炭粒が混ざる)
- 5 2層と同質土 (褐色土がブロック状に混ざる)

[ベース土] 暗灰褐色砂質土 (第IV面包含層)

第38図 第Ⅲ-2面水田遺構 (SD8・10・11) 土層断面図 (縮尺1/60)

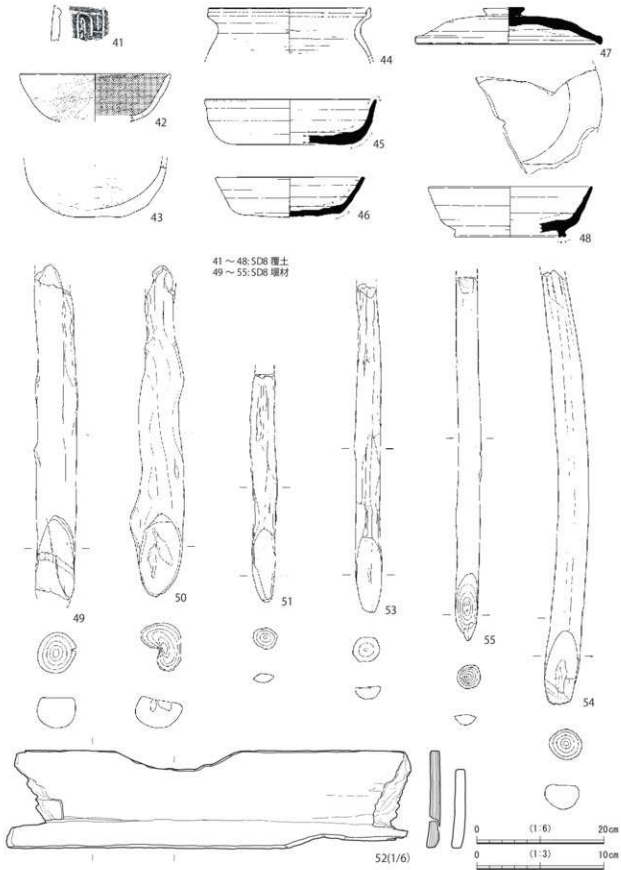


恵器である。無台坏45は口径13.4cm、器高3.6cmを測り、偏平な印象を受ける。46は口径11.6cm、器高3.2cmを測り、体部は直線的に外傾する。底部内面は使用に伴い磨耗する。坏蓋47は偏平な鈕をつけ、転用甕に用いる。有台坏48は口径12.8cm、器高4.0cmを測り、台部は外展する。45がⅢ期、47・48がⅣ期、46がⅤ<sub>1</sub>期に位置付けられる。

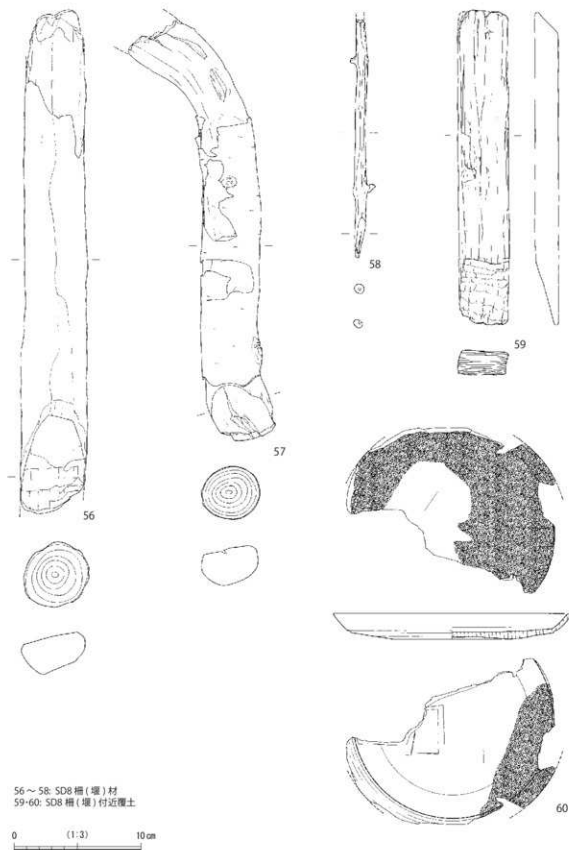
木製品は、第39図49～第40図59の塚部材と、覆土出土遺物第40図60～第42図68(62・65は塚出土)を図示した。覆土出土木製品は、ほとんどが食膳具・調理具である。塚部材のうち、49～51・53～58は杭で、径0.8～5.3cmを測る。49はツバキ属、51は樹皮付きのヤナギ属、53・55はガマズミ属、50・54は広葉樹の材を用い、小枝を落とした後に先端部を1方向から切断して尖らす。杭56は先端を2斜方向で加工して尖らせるのに対して、57は1斜方向の加工にとどまる。56はサクラ属、57は屈曲したコナラ節の材を用い、いずれも樹皮が残る。58はウツギ属の小枝を用いた最も細い杭で、径0.8～1.0cmを測る。板材52は、塚構造材中、最も大きな材で、幅63.7cm、高さ15.5cm、厚さ1.5cmを測る。上側面に緩く丁寧な円弧状の、また両側面に粗いV字状の切れ込み痕がそれぞれ認められる。出土状況からも、前者は塚に溜まった水の一部を下流に流すための加工、後者は板材を杭等の固定するための加工である。樹種はスギと考えられる。59は断面長方形を呈する角材で、両端を斜方向に加工する。樹種はスギである。

白木の挽物盤60は口径18.8cm、器高2.1cmを測り、1/2程度が遺存する。底部は外縁に向けて薄くなり、明瞭に屈曲して内湾気味の体部が外傾する。底部外面中央付近にはハツリ痕が残る。61～65は側板を結合する木釘孔をもつ曲物底板で、うち61・62は周縁部を有段とする。平面円形を呈する61は、ヒノキ材を用い、径約42cm、厚さ2.3cmを測る。内外面とも刀子痕が多く残る。材はケヤキと考えられる。62は、平面楕円形を呈する曲物の3側面を切り落とした転用材である。スギ材を用い、側面2ヶ所に木釘痕が残る。63～65は円形曲物である。63はスギ材を用い、径20.0cmを測る。側面4ヶ所の木釘孔のうち2ヶ所で木釘が遺存する。64は復元径17.7cmを測り、材はスギと考えられる。65はスギを用い、径12.5cm、厚さ0.6cmを測る。片面は腐食が目立つ。66は側面を削り出した箸状木製品で、一端は斜方向に切断される。67はスギ材を用いた部材と考えられ、一端に略方形孔を穿つ。側面2ヶ所が炭化する。68はスギ材を用いた方形鉢の体部片と考えられる。残存長30.3cm、残存幅15.8cmを測る。**SD10(新)・11(新)** N・O-3～5区に位置し、SX1・3の北西脇を北東側から南西方向に向けて直線的に流れる。流路がSD8を挟んで位置がずれることから、南西側をSD11、北東側をSD10として調査したが、本来は1条の溝である。ともに最終段階(短期間に流入した土砂で埋没する段階)に近い様相を第三-2面に属する新段階、最初の掘削時の様相を第四面に属する古段階とした。新段階のSD10は幅60～110cm、深さ35～50cm、SD11は40～60cm、深さ15～20cmを測り、特にSD10はしっかりと掘られる。第四面に属するSD10(古)・11(古)は、SX1・3との位置関係から水田造成の西側基軸ラインとなった溝であるが、SD8との切り合い関係、覆土が腐植土の混ざる粗砂や砂質土を基本とすること、SX1・3畦畔に連結する水口が確認できないこと等から、第三-2面が埋没する新段階では一定量の土砂が堆積した細く浅い溝となり、ほとんど機能していないものと考えられる。なお、遺構の切り合い関係は、第二面遺構及び第三-2面SD8より古い。また、SD10(新)のO-5杭南西側で、溝主軸方向に直交する幅約27cm、長さ約84cmの厚い板材(第44図77)が出土しており、原位置を保持するならば簡易な橋となる。

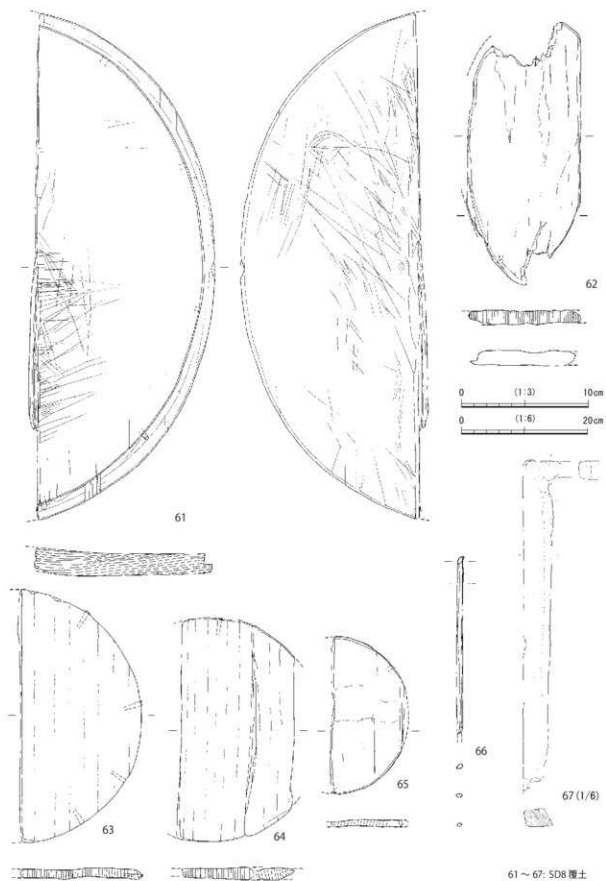
SD10(新)からは弥生時代後期の高坏片、古代の土師器壺・須恵器片、木製品が出土し、第42図69～71の須恵器、第42図72～75、第44図77の木製品を図示した。無台坏69は薄手で、体部は大きく外傾する。偏平な有台坏70は口径13.8cm、器高3.7cmを測り、腰部で明瞭に屈曲する。高坏71内面には、降灰が厚く溶着する。69はⅤ<sub>2</sub>期、70はⅢ期に位置付けられる。杭状木製品72の断面形は不整形



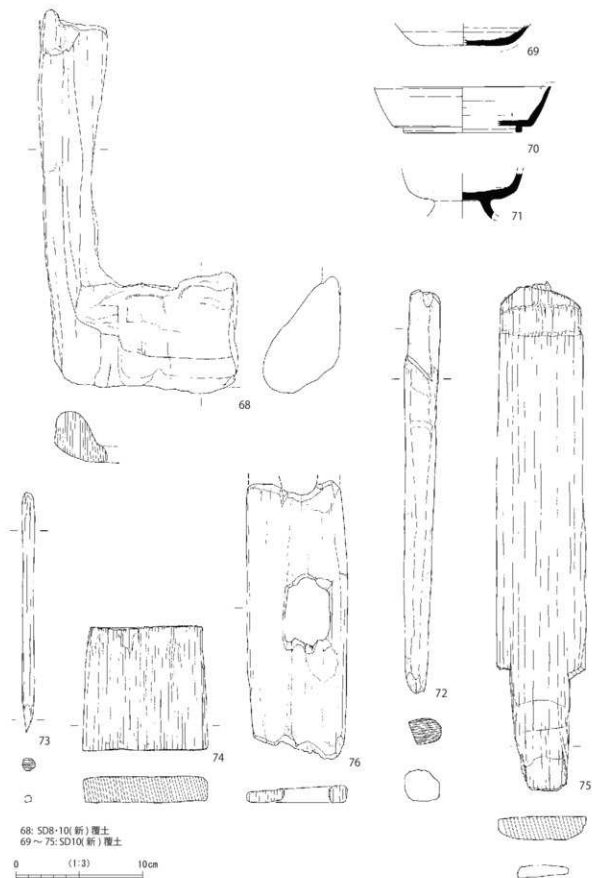
第39図 第三-二面SD8出土遺物実測図1(縮尺1/3・1/6)



第40図 第Ⅲ-2面SD8出土遺物実測図2(縮尺1/3)



第41図 第三-2面SD8出土遺物実測図3(縮尺1/3-1/6)



第42図 第Ⅱ-2面SD8・10出土遺物実測図(S=1/3)

形を呈し、先細る先端は打ち込みでつぶれる。棒状木製品73はスギ材を用いる。側面を多角形に加工し、先端部を四方から削って尖らす。板状木製品74の材はスギと考えられる。75は先端部を四方から削って薄くした矢板状木製品である。頭部に粗い切断痕と幅約2.4cm、深さ0.2cmの仕口痕が残る転用材で、スギ材を用いる。76は、2ヶ所に方形のホゾ穴をもつ板を切断した転用材である。大きさのわかるホゾ穴は5.0×3.7cmを測り、斜方向に穿たれる。材はスギと考えられる。第44図板材77は、SD10(新)主軸方向に直交する位置で出土した。幅27.3cm、長さ84.4cm、厚さ7.2cmを測り、上面は腐食が目立つ。

SD11(新)からは古墳時代と考えられる土師器や古代の土師器・須恵器、木製品が出土し、第44図78～80を図示した。78は底径20cmを測る小型のてづくね土器で、底部は台状を呈する。須恵器無台坏79は底部内厚で、内面の磨耗が目立つ。Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。80はアカガシ亜属の材を用いた鋸の歯先で、長さ31.2cm、残存幅7.7cm、厚さ1.8cmを測る。平面形は頭部隅を斜めに切り落とし、刃部を半楕円形に加工する。断面形は中央が厚く、縁を薄くしており、鉄刃を装着したと考えられる。柄装着孔の平面形は台形を呈し、長軸約5cm、短軸3.4cm以上を測る。柄装着孔は使用に伴う欠落があるものの、着柄角度は前面に対して80度弱が復元できる。

#### 4 溝、その他の遺構(第43・44図)

**SD12** M・N3区で検出した溝で、等高線に直交して西方向に屈曲しながら流下し、SD14(新)に接する東端部付近で二股に分岐する。第Ⅳ面SD38と流路がほぼ一致することから、SD38が溝機能を次第に喪失した後も第Ⅳ面SD38掘削段階での土地割りを維持し、浅い溝状の窪みとして残り、そこに流入土が堆積したものと推定する。幅25～80cm、深さ5～20cmを測り、覆土は明茶黄～灰黄色粗砂を基本とする。古代の土師器甕片、須恵器有台坏片が出土した。

**SD13** L・M3区、M・N4区で検出した。湾曲する2条の溝がM3区で合流して、SD12とほぼ並行しながら西側に流下する。幅は合流部が約120cm、他の箇所は30～80cm、深さは5～17cmと浅く、覆土はベース土が粒状に混ざる明茶黄色粗砂を基本とする。遺構の切り合い関係ではSD8・16より新しい。遺物は、古代の土師器甕、須恵器無台坏・有台坏・坏蓋が出土し、第44図81の須恵器無台坏を図化した。81は使用に伴う磨耗が顕著で、Ⅴ<sub>1</sub>期に位置付けられる。

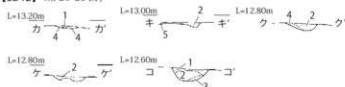
**SD14(新)** L2・3区、M2区の調査区西端部で検出した直線的な溝で、主軸方位はほぼ北～南を示す。最終段階(短期間に流入した土砂で埋没した段階)に近い様相を第Ⅲ～2面に属する新段階、最初の掘削時の様相を第Ⅳ面に属する古段階とした。新段階は幅93～120cm、深さ10～35cmを測り、流入した淡黄茶～灰黄色系の砂質土・粗砂・砂利を覆土とする。第44図82は棒状木製品で、第47図127と類似した形状を呈する。一端を多方向から削って先細らせる一方、他端を丸く仕上げる。長さ19.3cm、径1.0～1.5cmを測り、材はスギと考えられる。他に土師器甕、須恵器片が少量出土した。

**SD15** N3区で検出した幅の広い溝で、調査区外南側に延びる。幅115～190cm、深さ5～20cmを測り、上層から褐色砂質土、淡灰色細砂～シルトが堆積する。少量のロクロ土師器甕片が出土し、SK1・2と同じ形成過程が想定できる。

**SD16** M・N4区で検出した溝で、大きく湾曲しながら北西方向に流下する。南端部で幅約20cm、深さ5cm、西端部で幅約120cm、深さ15cmと、北西側へ向かうほど規模が大きくなる。覆土は、茶橙色粗砂と褐～灰色砂質土の交互堆積層を基本とし、遺構の切り合い関係はSD16よりSD17が新しい。遺物は、古代の土師器甕、須恵器坏類が出土し、第44図83の須恵器無台坏を図示した。83は内外面とも使用に伴いかなり磨耗し、底部外面に記された2文字の墨書は判読できない。Ⅳ<sub>1</sub>期と考えられる。

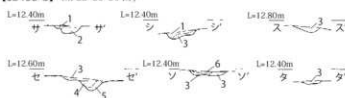
**SD19** M5、N5・6区で検出した不定形な溝状の浅い落ち込みである。幅50～190cm、深さ5cm前後

【SD12】(第21・23図)



- 1 濃暗灰色褐色砂質土と2層の混合土
  - 2 明茶黄色粗砂（鉄分が沈着し、ベース土粒が混ざる）
  - 3 淡灰色粗砂
  - 4 濃灰黄色粗砂（炭化物が混ざる）
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD13a・b】(第22・23・26図)



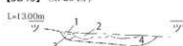
- 1 明茶黄色粗砂（褐色砂質土がブロック状に混ざる）
  - 2 1層と同質土（植物遺体が混ざる）
  - 3 1層と同質土（ベース土がブロック状に混ざる）
  - 4 淡青灰色細砂
  - 5 黄灰色粗砂
  - 6 褐色砂質土（炭化物が混ざる）
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD14(新)】(第21図)



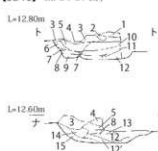
- 1 に近い暗灰褐色砂質土
  - 2 淡黄茶色粗砂～砂利
  - 3 淡灰白色細砂と褐色土の交互堆積（水流で堆積）
  - 4 淡灰黄色粗砂
  - 5 濃褐色砂質土（粗砂が混ざり、しまりない）
  - 6 7層とベース土の混合土
  - 7 明灰色粗砂（ベース土細粒が少し混ざる）
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD15】(第20図)



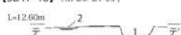
- 1 試験坑跡
  - 2 褐色砂質土（しまりあり）
  - 3 淡灰色細砂～シルト（レンズ状に堆積し、褐色～灰緑色土が粒状に混ざる）
  - 4 濃灰黄色粗砂
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD16】(第24・27図)



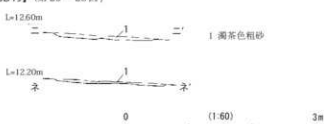
- 1 黒灰色砂質土
  - 2 淡灰黄色砂
  - 3 濃灰茶色粗砂（第三-2面包含層）
  - 4 に近い茶色粗砂
  - 5 淡黄灰色細砂
  - 6 淡茶褐色シルト（ベース土が混ざる）
  - 7 暗灰褐色砂質土（ベース土の崩落土）
  - 8 濃淡灰色細砂（炭粒が混ざる）
  - 9 茶黄色粗砂とにに近い褐色砂質土の交互堆積層
  - 10 濃褐色砂質土（植物遺体が混ざる）
  - 11 暗褐色砂質土
  - 12 茶褐色粗砂と褐色～灰色砂質土の交互堆積層
  - 12' 12層と同質土（褐色～灰色砂質土が主体）
  - 13 に近い褐色砂質土
  - 14 暗褐色砂質土
  - 15 14層と同質土（やや暗い）
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD17-18】(第26・27図)



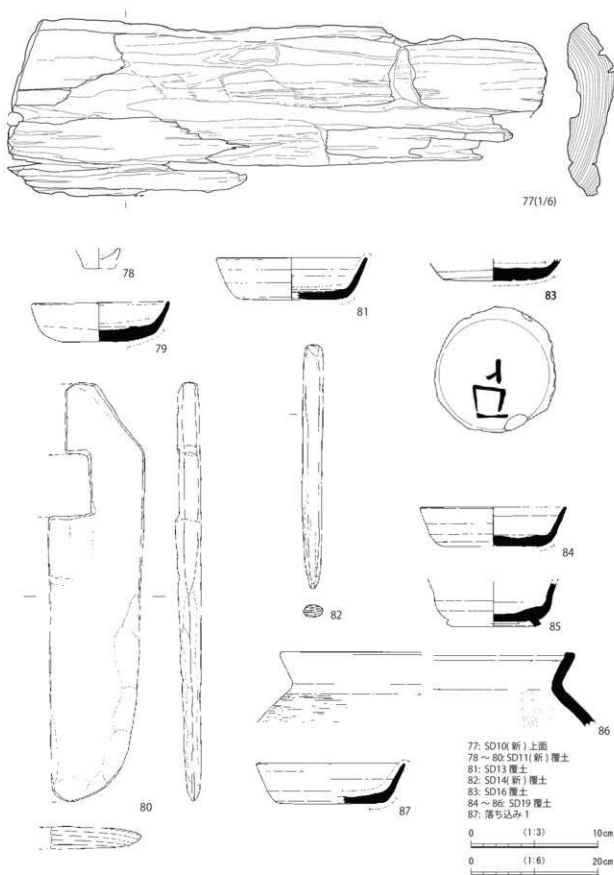
- 1 淡青灰～淡灰黄色細砂（レンズ状に堆積）
  - 2 淡青灰色細砂
- 〔ベース土〕 暗灰褐色砂質土（第IV面包含層）

【SD19】(第26～28図)



- 1 濃茶色粗砂

第43図 第三-2面SD土層断面図(縮尺1/60)



第44図 第三-2面SD他出土遺物実測図(縮尺1/3・1/6)



を測り、覆土は濁褐色～灰緑色を呈する粗砂～砂質土である。第IV面の自然流路SD88bの埋没過程に生じた浅い窪みに、SE1と同時期に土砂が堆積したと考えられる。出土遺物は比較的多く、古代の土師器甕、須恵器有台坏・坏蓋・甕類が出土し、第44図84～86の須恵器を図示した。無台坏84は口径11.4cm、器高3.1cmを測る。有台坏85は焼成堅緻で、小振りで断面方形を呈する台部が外展する。ともにIV<sub>2</sub>期と考えられる。短頸壺86は口径約23cmを測り、口縁端部は内側に肥厚する。

**SD20** N-4区で検出した小溝で、最大幅約60cm、深さ10cmを測る。覆土は濁黄褐色粗砂～砂利であり、古代の土師器甕、須恵器甕片が出土した。

**落ち込み1** N-4区で検出した不定形な落ち込みである。長軸約7.5m、短軸約7.0m、深さ6～40cmを測り、覆土は茶灰～茶褐色砂利である。第IV面に同様の落ち込みが検出できることから、その埋没過程に生じた浅い窪み部分と考えられる。遺構の切り合い関係はSD8-13より古く位置付けられる。遺物は、第44図87の須恵器無台坏を図示した。口径11.6cm、器高3.3cmを測り、体下部外面に被熱に伴う黒色タール状付着物が残る。IV<sub>2</sub>期と考えられる。他に古代の土師器甕片が出土した。

**ピット** 調査区に点在する小規模な小穴を検出したが、建物柱穴等になりうる小穴は確認できなかった。P3～6から古代の土師器甕片、P7から弥生後期の甕・高坏片、古代の土師器甕片、P8から古代の土師器甕片、須恵器甕片が出土した。

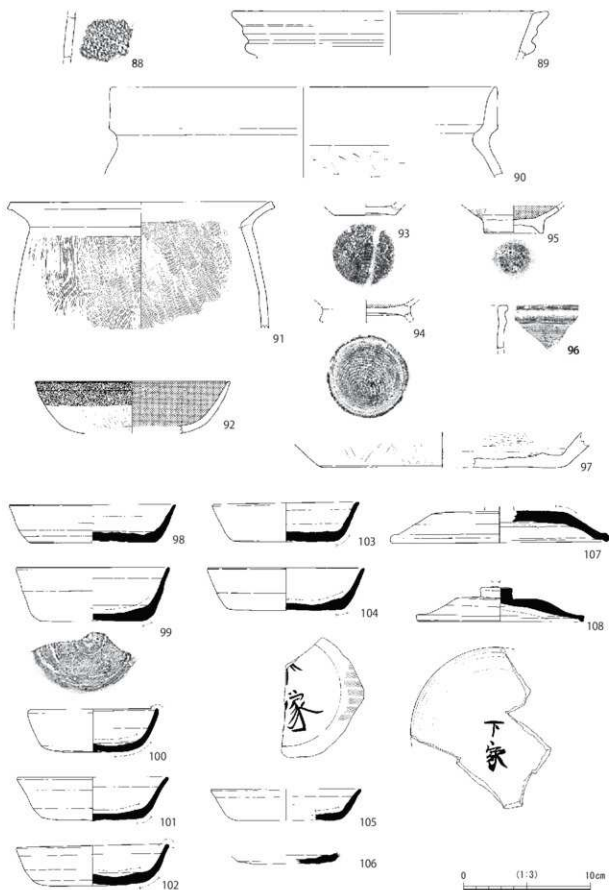
## 5 包含層出土遺物(第45～48図)

第三～一面のベースとなる流入・堆積土(淡灰緑色～褐灰色砂質土(第9図13a・b、14層))出土遺物のうち第45図88～92、同図96～第48図131を、また第三～一面の生活面を構成する黒灰色腐植土(第9図12a～c層)出土の第45図93～95を図示した。後者は、第三～一面の存続時期を考える上での指標となる。

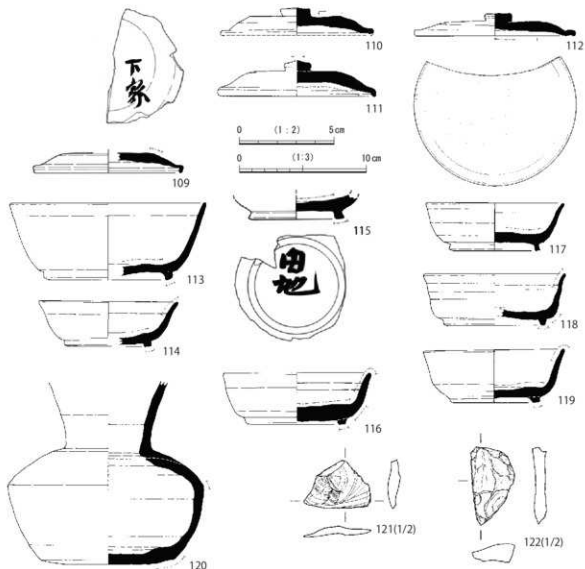
第45図88・89は縄文土器である。深鉢89は口径約25cmを測り、外面をヨコナデと突帯で加飾する。胎土に粗砂が多く混ざり、中期中葉に位置付けられる。弥生土器後期の甕90は口径約30cmを測る大型品である。内外面とも摩滅する。土師器長甕91は、胴部に細かいハケ調整を施し、口縁端部に外傾する平坦面をつくる。薄手の非ロクロの内黒土師器壺92は、丁寧なミガキ調整を施し、口縁端部を小さく外反させる。煮沸容器に転用されたため、外面には帯状にススが付着する。

第45図93は橙色を呈したロクロ土師器無台坏で、底部は若干台状を呈する。94・95はロクロ土師器有台坏底部である。94の黒色処理は不完全で、底部外面に回転糸切り痕を残す。95は底径4.4cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。静止糸切り後に逆台形の台部を雑に貼り付ける。94はVI期、93はVI期末～VII期、95は中世I期に位置付けられる。第45図96はロクロ土師器甕小片で、口縁端部を外側に肥厚させる。97は大型の土師器盤底部片で、内面を粗いカキメ調整、外面を平行タタキの後にケズリ調整を加えて仕上げる。

第45図98～第46図120は須恵器で、98～106が無台坏となる。扁平な98は混和材がほとんど混ざらない粘質な胎土で作られ、口径13.1cm、器高3.0cmを測る。深身の99は口径12.0cm、器高4.3cmを測り、磨耗が著しい。小振りの100は、底部と体部の内面の境は沈線状を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。101は丸味をもつ体下部から外反気味に立ち上がる。102・103は口径11.4～12.0cm、器高3.1～3.3cmを測り、やや扁平な印象を受ける。104は口径12.3cm、器高3.4cmを測り、底部と体部の境は明瞭に屈曲する。底部外面に細い筆跡で2文字が墨書され、「下家」の可能性が高い。扁平な105は胎土中に海綿骨針が混ざる。106は、薄手で底部円盤状を呈する。焼成が甘いため摩滅が顕著である。98・101がIII期、100・102・103がIV<sub>2</sub>期、104がV<sub>1</sub>期、106がVI<sub>2</sub>期に位置付けられる。

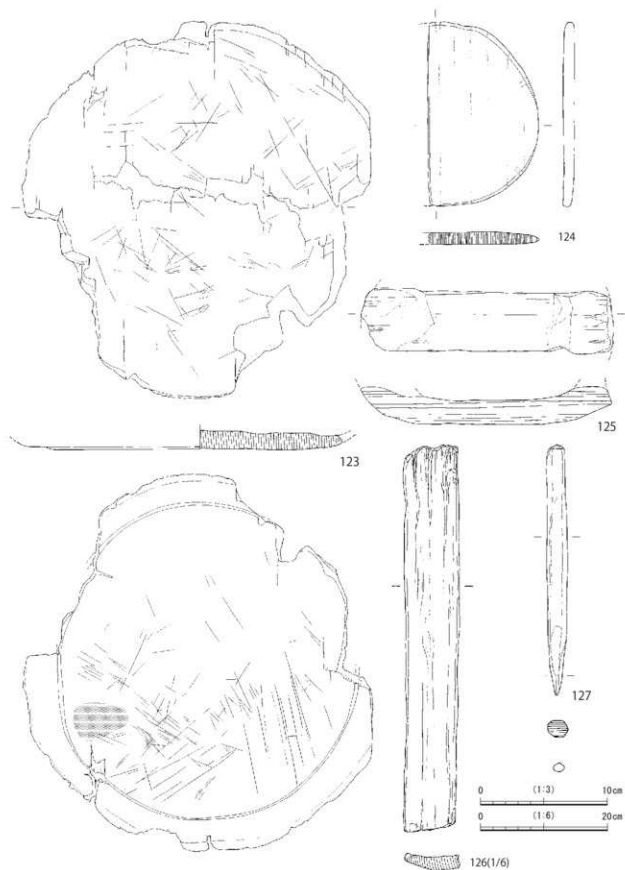


第45図 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図1(縮尺1/3)

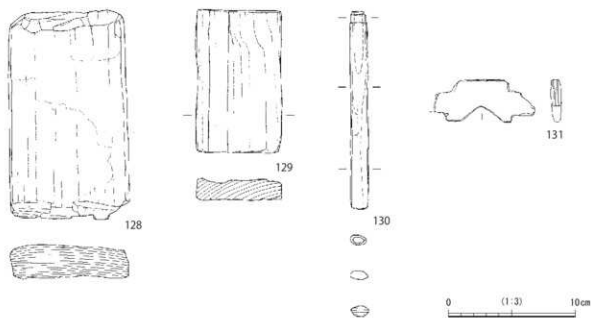


第46図 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2(縮尺1/2・1/3)

第45図107～第46図112は坯蓋、第46図113～119は有台坏である。大型の107は口径16.9cmを測り、口縁端部を下方に短く折り曲げる。108は口径13.1cm、器高2.8cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。天井部内面中央に「下家」と墨書する。第46図109は口縁端部をしっかりと折り曲げ、肩部外面に「下家」と墨書する。110の天井部は平坦である。111は肉厚で、重ね焼きに伴う自然釉の溶着が目立つ。偏平な112は小さなボタン状の鈕を付ける。天井部内面が磨耗し、墨痕が残ることから甌に転用したと考えられる。108～110・112はⅣ期、107・111はⅤ期に位置付けられる。有台坏113は口径15.6cm、器高6.1cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。114は堅緻に焼成され、体部は緩やかに外反する。115は台部がしっかりと外展し、底部外面に大きく「田地」と墨書する。肉厚な116は口径11.5cm、器高4.1cmを測り、使用に伴う磨耗が著しい。117・118は箱形を呈し、口縁部で小さく外反する。口径約11cm、器高約4cmを測る。119は体下部にふくらみを有する。114はⅢ期頃、115はⅣ<sub>1</sub>期、116～119はⅣ<sub>2</sub>期、113はⅤ期に位置付けられる。瓶類120は肩部でしっかりと屈曲する。121・122は、石器製作時に出た剥片である。121は黄褐色を呈する鉄石英(黄玉)、122は富来産と考えられるガラス質安山岩で、残存



第47図 第Ⅱ-2面包含層出土遺物実測図3(縮尺1/3-1/6)



第48図 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4(縮尺1/3)

重量はそれぞれ487g、9.72gを測る。第47図123～第48図131は木製品である。白木の挽物盤123は底径24.4cmを測る大型品で、ケヤキ材を横木取りする。底部外面4ヶ所にロクロ爪痕が残る他、内外面とも刀子痕が顕著に認められる。124は円形曲物底板で、スギ材を用いる。径14.6cmを測り、3ヶ所に木釘痕が残る。125は内面の湾曲具合から小型の削物鉢と考えられる。スギ材を用い、板状に再加工が行われる。板状木製品126は腐食で一部変形し、材はスギと考えられる。127は、第44図82と同形状を呈し、側面を粗く加工する。長さ19.9cm、径1.3～1.8cmを測る。128・129は板状木製品である。128は一端を片面から、他端を両面から、それぞれ粗く斜方向に切断する。126は11.4×6.8cm、厚さ1.8cmを測り、表面の一部を木目方向にくぼませる。ともに材はスギと考えられる。130は、スギ材を丁寧に削り出した小振りの刀子柄で、柄長15.7cm、柄径1.6×0.8cm、莖長4.8cm、莖径0.8×0.4cmを測る。柄は直線で、柄元に向けて若干細身となり、貴金具を装着するための刳込みをもつ。また、断面形は略楕円形を呈し、刃側を細くつくる。本来は、莖断面は方形を呈したと考えられるが、腐食のため略楕円形を呈する。131は板目のスギ材を用い、左右は非対称である。上底は幅広で、下底は逆V字状の切れ込みを入れる。斜辺は直線的に加工する。上底に弦受けの溝がないことから琴柱でなく、用途は不明である。





第14表 Ⅲ-2面出土木製品観察表2

※( )は残存量

図No	No	実測番号	グリップ名	出土遺構名・層位等	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	本取り	破損	備考
39	52	H27-木1	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.24	板状木製品	15.5	63.7	1.5	板目	-	3側面を削ぐ加工、スギか
39	53	H13-木263	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.26	板	(26.1)	径2.1	径2.0	芯持ち丸木	ガマズミ	柱、一端が欠け、破れ残存、同定No.225
39	54	H13-木264	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.28	板	(34.4)	径2.8	径2.5	芯持ち丸木	-	広葉樹の板、板底残存。
39	55	H13-木265	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.29	板	(28.8)	径2.0	径1.9	芯持ち丸木	ガマズミ	柱、破れ残存、一端が欠ける、同定No.224
40	56	H13-木268	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.29	板	(33.4)	径4.9	径4.3	芯持ち丸木	サクラ	破れ残存、一端が欠ける、同定No.229-1
40	57	H13-木281	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.34	板	(40.0)	径5.3	径5.2	芯持ち丸木	コナラ	破れ残存、一端が2斜方向から欠ける、同定No.223
40	58	H13-木282	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.35	板	(18.0)	径1.0	径0.8	芯持ち丸木	ツバキ	柱、一端が欠ける、同定No.224
40	59	H13-木300	O-4-4	SD8土層断面部	角材	25.0	4.1	2.0	板目	スギ	辺材、両端を斜方向に加工、同定No.161
40	60	H13-木402	O-4-3	SD8土層断面部・ホ7-6層	白木残物・部	18.8	16.0	2.1	榎木取り (板目)	-	内外面にスス付着
41	61	H13-木255	O-4-4	SD8 埋土層側	円形曲物遺産	(40.2)	(14.5)	2.3	板目	ヒノキ	両端は有段、本釘孔5ヶ所、内外面に刀子痕顯著、同定No.220
41	62	H13-木257	O-4-4	SD8 柄 (東) 西側取上17No.31	楕円形曲物遺産	(20.8)	(8.0)	1.3	板目	スギ	両端部は有段、本釘孔3ヶ所残存、3ヶ所を削り落しに転用、同定No.222
41	63	H13-木281	O-4	SD8 埋土	円形曲物遺産	径20.0	-	0.8	板目	スギ	本釘孔4ヶ所に残存、同定No.230
41	64	H13-木285-1	O-4-3	SD8 西側・溝底	円形曲物遺産	径17.7	-	1.0	板目	-	スギか、本釘孔1ヶ所残存
41	65	H13-木256	O-4-4	SD8 柄 (東) 西端	円形曲物遺産	径12.5	-	0.6	板目	スギ	本釘孔2ヶ所に残存、片面が腐食、同定No.221
41	66	H13-木258	O-4	SD8 埋土層側	板状木製品	(14.2)	0.5	0.4	芯より削り出し	-	一端は切斷、スギか
41	67	H13-木269	P-4	SD8 埋土	多孔板状木製品	(52.4)	(6.0)	2.7	溝板目	スギ	一部腐食、1ヶ所に孔、同定No.230
42	68	H12-木274	O-4-3	SD8西側埋土・SD10(新)埋土層	製物・方形鉢	(30.3)	(15.5)	(6.2)	榎木取り (板目)	スギ	同定No.223
42	72	H13-木307	O-5-6	SD10(新)埋土	板状木製品	32.0	3.0	2.5	芯より分割	-	先端つぶれる、スギか
42	73	H13-木275	O-5-6	SD10(新)埋土	棒状木製品	19.0	1.0	0.9	芯より削り出し	スギ	先端を四方から欠らす、同定No.234-1
42	74	H13-木285	O-5-6	SD10(新)埋土	板状木製品	9.9	9.9	2.1	板目	-	スギか
42	75	H13-木299	O-5-6	SD10(新)埋土	尖頭板状木製品	40.6	7.0	1.9	板目	スギ	先端を四方から欠らす、柱口處より、同定No.194
42	76	H13-木303	O-5-6	SD10(新)埋土	板状木製品	(22.1)	8.0	1.4	板目	-	方形孔(15.0×3.7cm)2ヶ所か、板用材、スギか
44	77	H27-木2	O-5	SD10(新)上面	板状木製品	27.3	84.2	7.0	板目	-	
44	80	H13-木405	N-3-3	SD11(新)取上17No.10	織網	21.7	(7.7)	1.8	板目	アカガシ巻	縄方糸の織り、同定No.248
44	82	H13-木318	L-2-3	SD14(新)埋土	棒状木製品	19.3	径1.5	径1.0	芯より削り出し	-	一端が欠ける、スギか
47	123	H13-木153	M-4-2	包含層	白木残物・部	(29.8)	-	(1.2)	榎木取り (板目)	ケヤキ	片側部に片側4ヶ所、内外面に刀子痕顯著、同定No.195
47	124	H13-木280	N-4-3	包含層(黄灰色砂)	円形曲物遺産	径14.8	-	1.0	板目	スギ	本釘孔3ヶ所に残存、同定No.235
47	125	H13-木270	M-4-4	包含層	加工材(製物・餅か)	(20.0)	(5.0)	(3.0)	榎木取り (板目)	スギ	転用材、同定No.231
47	126	H13-木298	M-4-3	包含層(黄灰色ピートと黄灰色砂の層)	板状木製品	61.3	8.0	2.7	板目	-	スギか
47	127	H13-木317	N-4-2	包含層	棒状木製品	19.9	径1.8	径1.3	芯より削り出し	-	一端が欠ける、スギか
48	128	H13-木292	M-4-2	包含層(黄灰色砂)	板状木製品	16.6	9.6	2.7	板目	-	辺材、スギか
48	129	H13-木294	N-3	包含層	板状木製品	11.4	6.8	1.8	板目	-	辺材、スギか
48	130	H13-木138	O-5-2	包含層(黄灰色粘砂)、排水溝	刀子柄	15.7	1.8	0.9	芯より削り出し	スギ	0.9×0.5cm、深さ4.9cmの溝孔あり、黄銅屑を要蓋す、同定No.200
48	131	H13-木407	N-4-1	ベール層(黄灰色砂と茶褐色粘土の層)	加工材	3.4	(8.1)	0.9	板目	スギ	同定No.160



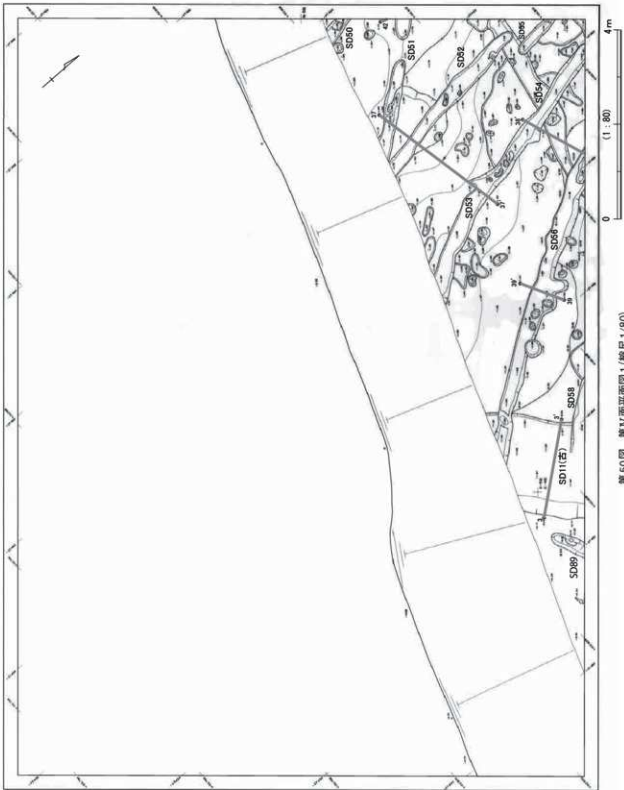
### 第5節 第IV面の遺構と遺物 (第49～77図、第15～18表)

E地区第IV面は、第Ⅲ-2面ベース土となる暗灰褐～黒灰色砂質土(第9図16c層)を遺物包含層、淡灰～茶灰色を基調とする粗砂・砂質土・シルト(同図17層)をベース土及び遺構検出面とした調査(生活)面で、第1次調査A・B地区下面に対応する。ベース面の標高は、調査地区南東端(P-4杭付近)で12.75m(第



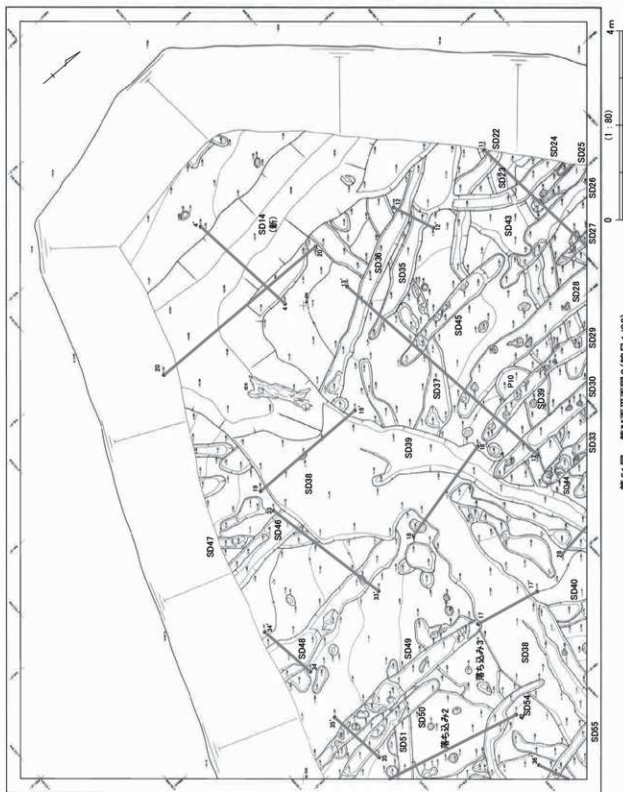
第49図 第IV面遺構配置図(縮尺1/250)

2	5	8
3	7	9
6	10	



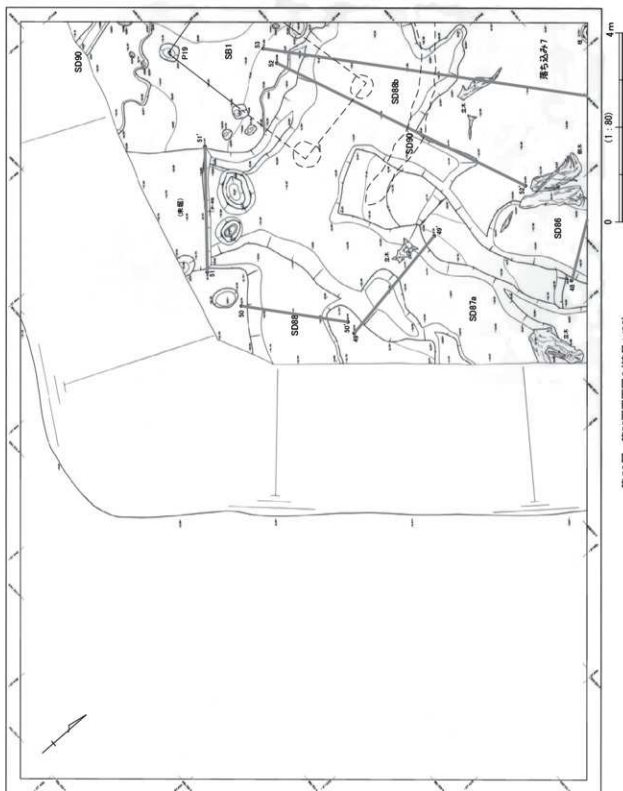
第50図 第V面平面図1 (縮尺 1/80)

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10



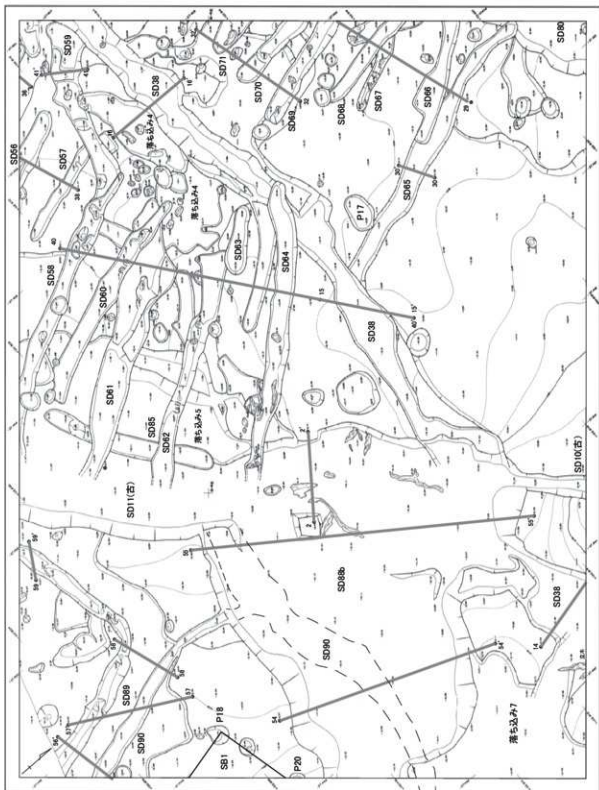
第51図 第IV面平面図2(縮尺1/80)

0	1	2	3
4	5	6	7
8	9	10	11



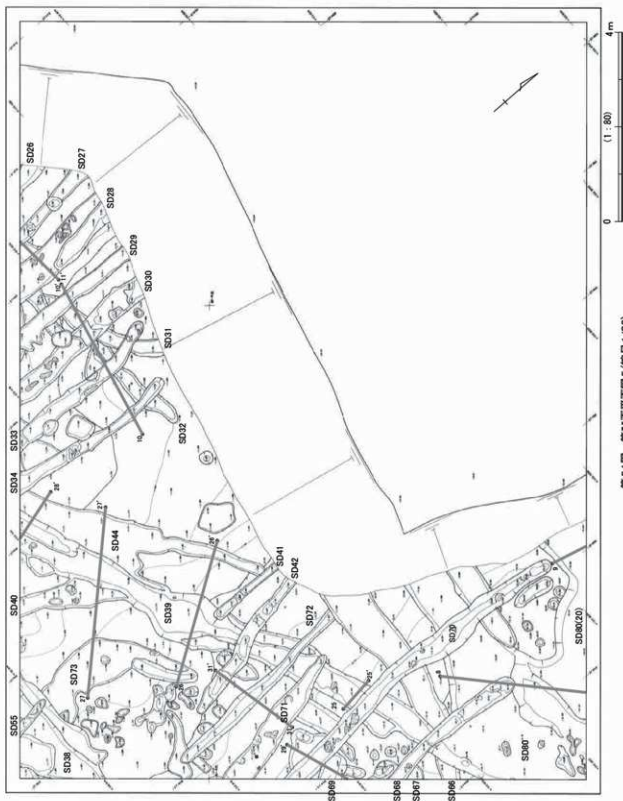
第52図 調査区平面図3 (縮尺 1/80)

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10		



第53図 第IV面平面図4(縮尺1/80)

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10



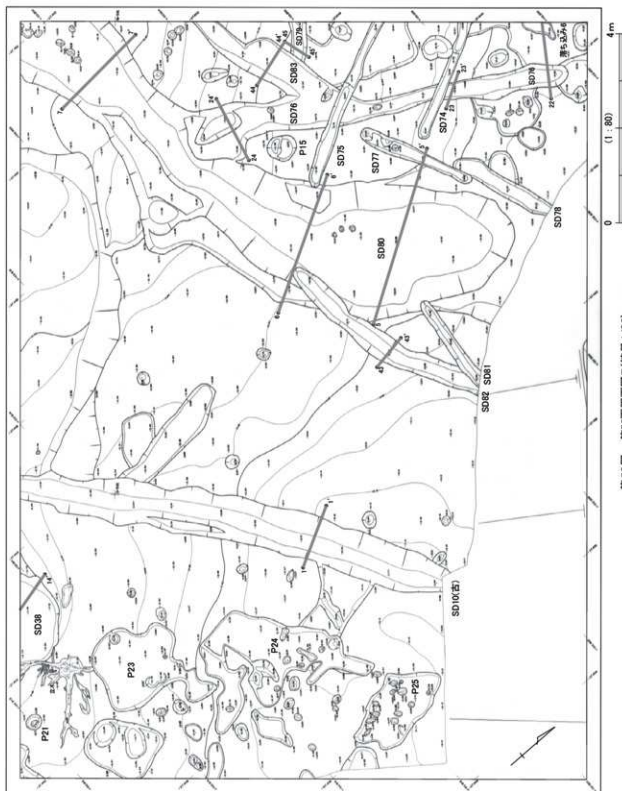
第54図 第IV面平面図5(縮尺1/80)

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10



第55図 第IV面平面図6(縮尺1/80)

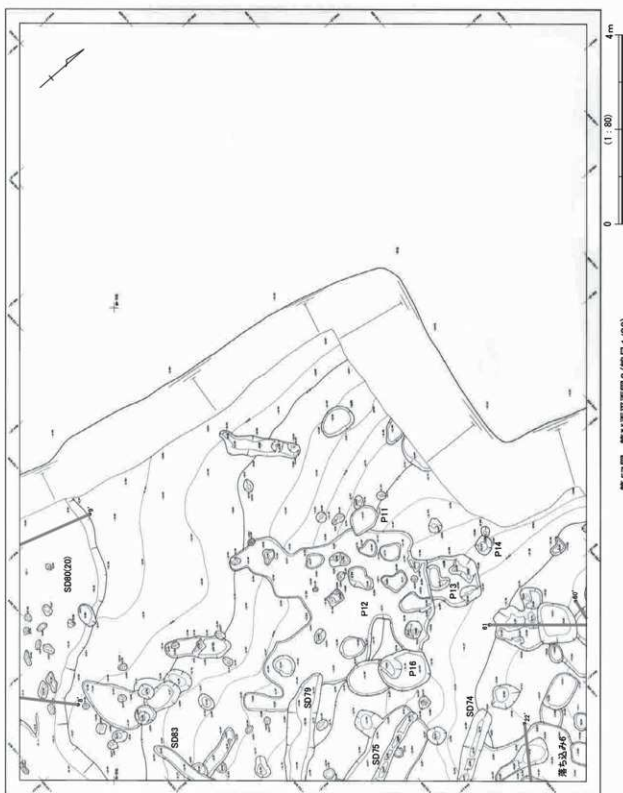
1	2	
3	4	5
6	7	8
9	10	



第56図 第IV号平面図7(縮尺1/80)

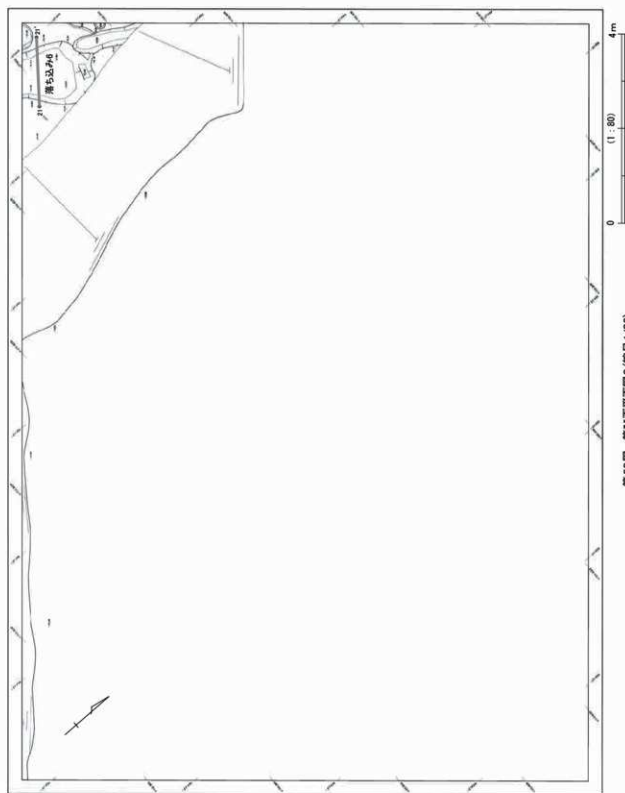


6	7	8	9	10
1	2	3	4	5

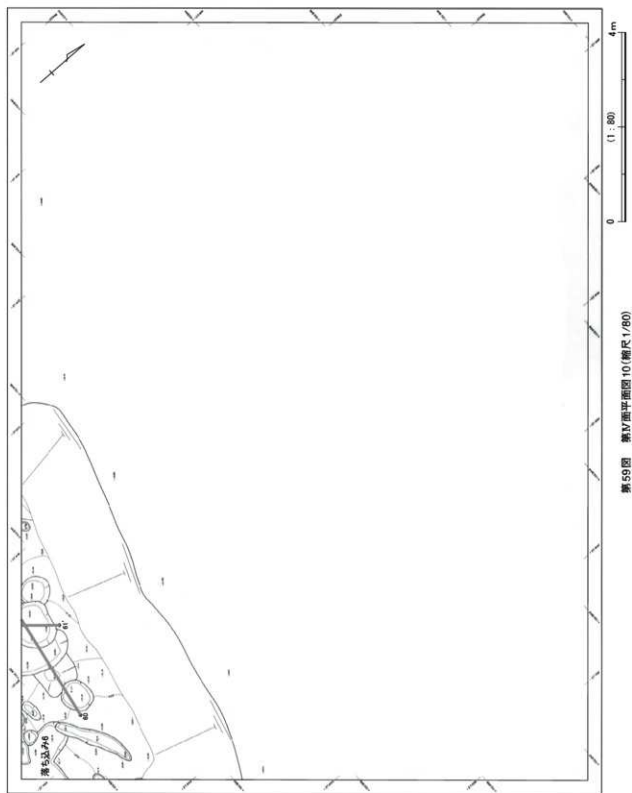


第57図 第IV面平面図8(縮尺1/80)

3	1	2	
6	7	8	第10



1	2	3	4	5
6	7	8	9	10



第59図 第IV面平面図10(縮尺1/80)

Ⅲ-2面ベース面より-35cm)、N-3杭脇で11.58m(同-13cm)、調査地区南西端(SD14南西脇)で11.29m(同-7cm)、同北西端で12.40m(同-7cm)、N-6杭脇で13.19m(同±0cm)と、Nラインでの南北方向の高低差約1.6m、南壁での東西方向の高低差約1.4mを測り、他の調査(生活)面と同様に南側および西側に向けて緩やかに傾斜する地形である。

遺構は、掘立柱建物(SB)1棟と溝(SD)約70条、落ち込み5基、ピット多数を検出した(第49～59図)。掘立柱建物SB1は2×1間の小規模な建物で、西・北側に隣接するSD90を区画溝とする。溝は、その性格から自然流路(SD20・80・86～88a・b等)、土地区画や用排水に係る溝(SD10・11・14・38・39・76・89等)、主に調査区西半部で等高線に沿って分布する耕作に伴う小溝群(SD22・52・70・75等多数)、その他の小規模な浅い溝に大別できる。落ち込みは、主にベース面の緩やかな凹部における包含層の堆積と考えられ、平面形態が不整形を呈した浅いものが多い。ピットは、SB1を構成する柱穴を除き、有意な組み合わせを復元できず、その規模等から多分に樹木の根痕やベース面の緩やかな凹部を含むものと考えられる。

これらの遺構は、遺構の切り合い関係から自然流路→SB1、SD89・90→土地区画や用排水に係る溝→耕作に伴う小溝群の大きく4小期の変遷に整理可能であり、さらに耕作に伴う小溝群は切り合い関係から2～3回に細分できる。遺物は、7世紀末～9世紀後葉の土師器や墨書を含む須恵器、挽物盤、曲物等の木製品の他に、少数の縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、石器剥片が出土している。なお、第Ⅲ-2面造成時期と第Ⅳ面最終機能時期の間には、第Ⅲ-2面遺構検出時に第Ⅳ面の耕作に伴う小溝群の畝状高まりを確認できないことから、一定の空白期間を想定する。

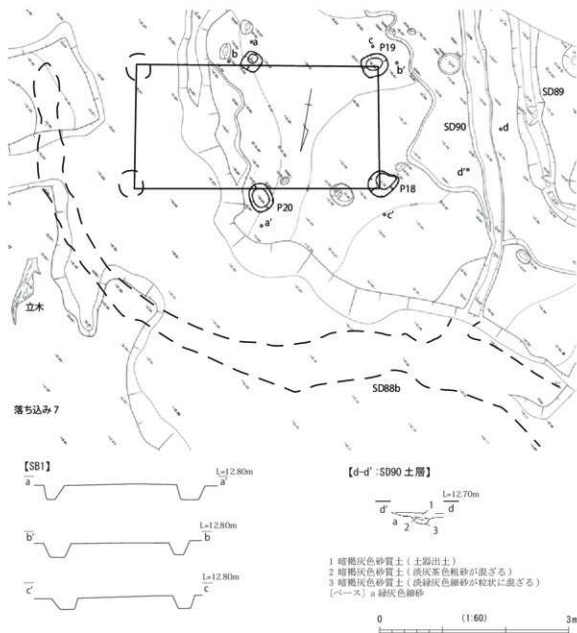
## 1 建物跡(第60・61・72図)

**SB1・SD90** O-3・4区に位置する2×1間の小規模な掘立柱建物跡で、東側の2柱穴については現地調査時にSD88に伴う浅い窪みと判断したため、十分な記録措置ができなかった。柱間寸法は梁行約2.0m、桁行約3.7m、床面積約7.4㎡を測り、主軸方位はN-10°Wを示す。柱穴の平面形態は略方形または不整形を呈し、P18で長軸48cm、短軸38cm、深さ18cm、P20で長軸46cm、短軸36cm、深さ23cm、東側の2柱穴で深さ約5cmを測り、1×1間の建物に下屋が付く構造の可能性をもつ。柱穴覆土は、P20及び南東隅柱穴が炭粒の多く混ざる濁褐色砂質土、P18・19が粒状のベース土の混ざる灰褐色砂質土、東側の2柱穴は暗褐色腐植土と淡灰色粗砂の混合土で、いずれも柱痕跡、柱根は確認できなかった。遺物は、P20から第61図132の非クロ土師器小片が出土したにとどまる。132は口径約13cmを測り、口縁部は直線的に短く外傾する。内面は煮炊きに伴うススが附着する。

SD90は、SB1の区画溝と考えられる。西側に隣接するSD89と並行する位置関係にあり、周辺のベース土の状況も類似する。溝の規模は、直線的な西辺が延長5m以上、幅20～40cm、深さ8～14cm、崩れた円弧状を描く北辺は延長約10m、幅約40～60cmを測り、西側に流下する。覆土はベース土の混ざる暗褐色砂質土を基本とし、溝底後にSD89と共通する暗褐色砂質土が堆積する。遺構の切り合い関係はSD88bより新しく、古墳時代の土師器片1点が出土したにとどまる。

## 2 溝(第62～72図)

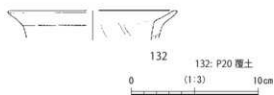
**SD10(古)・11(古)** N・O-3～5区に位置し、第Ⅲ-2面SX1・3の北西脇を北東側から南西方向に向けて直線的に流下する1条の基幹的な溝である(第50・53・56・62図)。第4節で記したとおり、第Ⅲ-2面SX1・3造成の西側基軸ラインとなった溝であり、掘削時の様相を第Ⅳ面SD10(古)・11(古)、短期間の流入土で埋没する浅い溝の段階を第Ⅲ-2面のSD10(新)・11(新)に分けており、第Ⅳ面の最終期には、



第60図 第IV面SB1平面図・土層断面図(縮尺1/60)

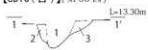


第IV面SB1周辺遺構検出状況



第61図 第IV面SB1出土遺物実測図(縮尺1/3)

【SD10(古)】(第56図)



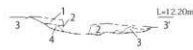
- 1 第Ⅲ-Ⅱ面(第38図モーモ'参照)
- 2 濁灰色粗砂(暗褐色土塊が混ざる)
- 3 暗褐色色砂質土

【SD11(古)】(第50-53図)



- 1 濁灰色シルト
- 2 濁灰色シルトと褐色腐植土の交互堆積層
- 3 暗褐色色砂質土(しまりなし,腐植土・淡灰色土粒が混ざる)
- 4 3層とベース土(淡灰色粗砂)の混合土
- 5 3層と同質土(しまりなし,腐植土粒が混ざる)
- 6 濁灰色粗砂(褐色土粒が混ざる)
- 7 濁灰色色細砂と淡褐色色砂の交互堆積層

※ 5～7はSD88b覆土



- 1 暗褐色色砂質土
- 2 濁灰色粗砂
- 3 暗褐色色砂質土(腐植土が層状に混ざる)
- 4 暗褐色腐植土

【SD14(古)】(第51図)



- 1 濁褐色色砂質土(炭化物が多く混ざる)
- 2 褐色色砂質土と淡灰色砂の混合土
- 3 濁灰色色粗砂
- 4 濁褐色色砂質土(淡灰色砂が粒状に混ざる)
- 5 黒褐色弱粘質砂(しまりない)

- 6 淡灰色粗砂(褐色腐食土が層状に入る,木片多く混ざる)
- 7 灰白色粗砂( # )
- 8 におい・褐色色砂質土(しまりない)
- 9 灰褐色色砂質土(しまりあり)

【SD80】(第54・56・57図)



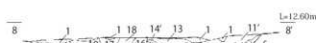
- 1 濁灰色～黄褐色細砂～粗砂
- 1' 層に褐色腐植土が混ざる
- 1'' 層に淡灰色粗砂が混ざる
- 2 暗褐色色砂質土と灰茶色粗砂の混合土
- 3 暗褐色色粘質土(しまりなく,腐植物やベース土が粒状に混ざる)



- 3 暗褐色色砂質土
- 4 におい・褐色色砂質土(腐植物やベース土が粒状に混ざる)
- 5 3層と同質土(しまりあり)
- 6 淡灰色粗砂(炭粒が混ざる)
- 7 褐色色砂質土(4層と同質土)



- 7 7層と同質土(淡灰色粗砂が多く混ざる)
- 8 淡灰緑色細砂～シルト(砂利が混ざる)
- 8 8層と褐色細砂の混合土
- 9 淡灰緑色細砂(褐色細砂が層状に混ざる)



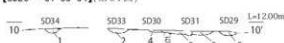
- 10 濁灰色褐色粗砂
- 11 濁灰色粗砂(ベース土が混ざる)
- 12 濁褐色色粗砂と淡黄褐色色粗砂の交互堆積層
- 13 12層と暗褐色色砂質土の混合土
- 14 におい・褐色色砂質土



- 15 濁暗褐色色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
- 16 15層と同質土(ベース土が多く混ざる)
- 17 暗褐色色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
- 18 暗褐色色砂質土(ベース土と暗褐色土が混ざる)
- 19 濁暗褐色色砂質土(包含層)
- 20 暗褐色腐植土(しまりない)
- 21 19層に淡灰緑色細砂が層状に入る
- 22 淡灰緑色粗砂

【ベース】a におい・淡灰緑色粗砂, b 淡灰緑色細砂, c 淡黄褐色粗砂, d 黒色粘質土

【SD29～31-33-34】(第54図)



【SD22-24-26～28】(第51-54図)



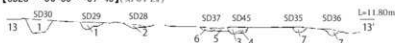
【SD35-36】(第51図)



〈10-10'～13-13'土層〉

- 1 濁暗褐色色砂質土(黄褐色粗砂が混ざる)
- 2 濁暗褐色色砂質土
- 3 濁黄褐色粗砂
- 4 濁黄褐色粗砂と暗褐色色砂質土の混合土
- 5 濁褐色色砂質土

【SD28～30-35～37-45】(第51図)



第62図 第Ⅳ面SD土層断面図1(縮尺1/60)

ほとんど埋没して溝機能を失っていたと考えられる。古段階の溝の規模は、SD10が幅32～80cm、深さ30～35cm、SD11が幅140～180cm、深さ18～25cmを測る。覆土は、腐植土が混ざるしまりのない暗褐色灰色砂質土の自然堆積を基本とし、底面に暗褐色腐植土層が確認できる箇所もある。遺構の切り合い関係では、SD88bより新しく、SD38や耕作に伴う小溝群SD56・58・61・62・64・85より古く位置付けられる。

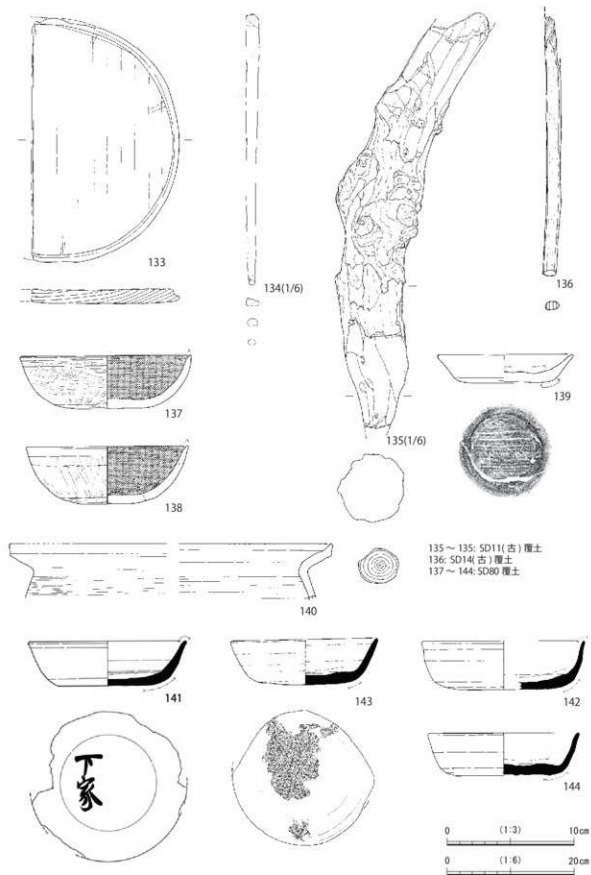
出土遺物は、SD11(古)から縄文土器細片、古代の土師器甕、須恵器坏類が少量出土し、第63図133～135の木製品を図示した。円形曲物底板133は板目取りのスギ材を用い、径19.5cmを測る。周縁にめぐらせた段と径3～4mmの木釘で側板と結合する。134は全長約43cmを測る角棒状木製品で、全側面を削って先端を先細らせる。頭部はへし折られたと考えられる。枕状木製品135は曲がった樹皮付きのハンノキ亜属の材を利用し、径9.8～13.8cmを測る。

**SD14(古)** L2・3区、M2区の調査区西端部で検出した直線的に延びる基幹的溝で、東側からSD38が合流する(第51・62図)。最終段階(短期間に流入した土砂で埋没)に近い様相を第Ⅲ-2面に属する新段階、最初の掘削時の様相を第IV面に属する古段階とした。主軸方位はほぼ北-南を示し、南方向に流下する。古段階の規模は幅1.6～1.9m、深さ34～63cmを測り、肩部・底面ともしっかりと掘られる。覆土は、下層から主に灰褐～褐色砂質土、褐色腐植土が層状に混ざる淡灰～灰色粗砂、濁褐色灰色砂質土が自然堆積する。覆土から出土した第63図136の棒状木製品は、先端部を2斜方向から切断し、頭部は炭化・欠損する。土器類は出土しなかった。

**SD80(20)** M2～4区、N4・5区で検出した自然流路である(第54・56・57・62図)。現地調査では、N4・5区からM4区までの北東方向から南西方向に湾曲しながら流下す範囲(第54・57図土層断面8-8'以东)をSD80、M4区の大きく屈曲して2条に分岐する範囲(同図土層断面8-8'以西)の本流部をSD20と呼称した。分岐した本流部SD20が第1次調査A地区SD5に、分岐した支流部が第1次調査A地区SD6にそれぞれつながる。本流部分は幅約1.3～3.0m、深さ20～45cmを測り、上流側で規模が大きくなる傾向を示す。基本的な覆土は、淡灰～淡灰緑色または褐色を呈するの粗砂～シルト、しまりのない暗褐色灰色腐植土(部分的)の後に、暗褐色～灰褐色を基調とする砂質土が複雑に自然堆積する。また、N5区の最深部付近で立木の株が3ヶ所で確認している。遺構の切り合い関係では、耕作に伴う小溝群(M4区SD68・70、N5区SD75・77・78・81・82)と、明確でないが流路が重複するSD39・76がSD80より新しく位置付けられる。

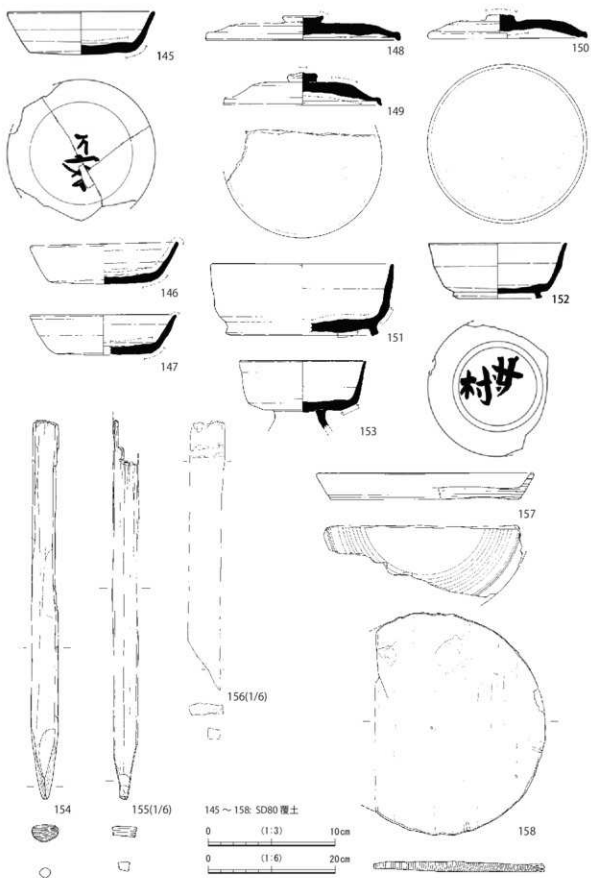
覆土から縄文土器、古墳時代の土師器、V期を下限とする土師器、須恵器坏類、木製品が出土、第63図137～140の土師器、同図141～第64図153の須恵器、同図154～第65図160の木製品を図示した。非ロクロの内面黒色を施した土師器甕137、138は、内面に丁寧なミガキ調整を行い、しっかりとした黒色処理を施す。外面のミガキ調整は、137が細い棒状の原体で横位を基本とするのに対して、138は板状の原体で縦位を基本とする。137が口径13.5cm、器高4.3cm、138が口径12.6cm、器高4.6cmを測る。ロクロ成形の無台皿139は口径10.7cm、器高2.3cmを測り、体部は直線的に先細りながら外傾する。底部を静止糸切りで切り離した後に、外縁部に回転ケズリ調整を加える。黄橙色を呈し、胎土には海綿骨針、粗砂が混ざる。類例は少ないもののV期に位置付けられる。ロクロ成形の小甕小片140は口径約15cmを測り、口縁部内面には煮炊きに伴う帯状のヨグレが付着する。

第63図141～第64図147は無台坏である。141は口径13.6cm、器高3.6cmを測り、体下部は丸味をもつ。底部外面左側に「下家」と墨書する。やや深身の142は口縁部が大きく焼きゆがみ、内面は使用に伴い円滑となる。143は口径11.5cm、器高3.7cmを測り、体部は直線的に外傾する。外面に二次被熱痕を残す。144は背の低い箱形を呈し、口径11.8cm、器高3.4cmを測る。使用に伴う磨耗が著しい。



第63図 第Ⅳ面SD出土遺物実測図1(縮尺1/3・1/6)





第64図 第IV面SD出土遺物実測図2(縮尺1/3・1/6)

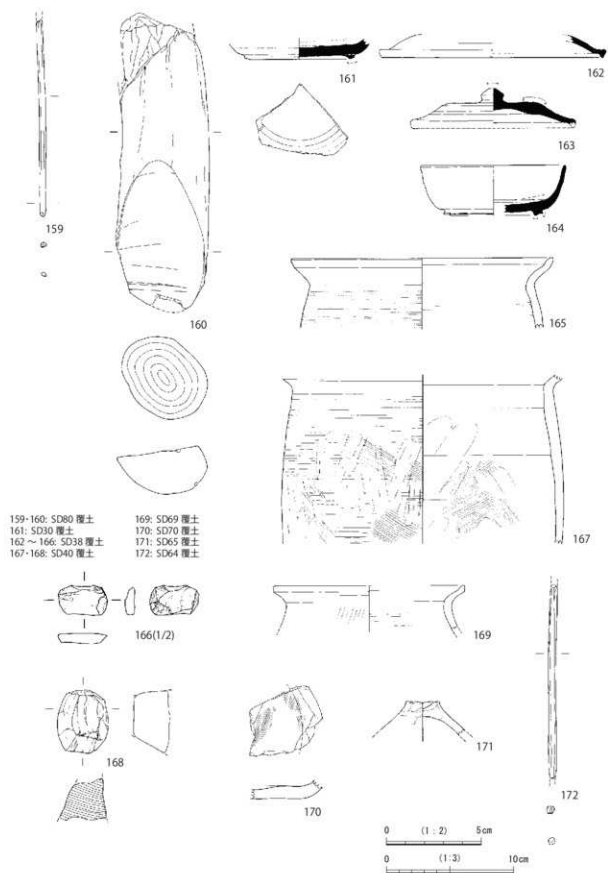
145～147は底部と体部の境で明瞭に屈曲し、体部は直線的に外傾する。145は口径11.5cm、器高3.4cmを測る。底部外面中央に崩れた字体で2文字の墨書が残り、上の文字は3画目の跳ねがないことから「下」の可能性が高い。下の文字は一部欠損するが「家」と判読できる。薄手の146・147は口径11.5cm前後、器高3.3cmを測り、底部外面に丁寧なナデ調整を加える。141・142がⅢ期、145～147がⅤ期に位置付けられる。第64図148～150は坏蓋で、天井部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整を加える。148は口径15.2cm、器高2.0cmを測り、偏平な鈕を付ける。149・150は硯に転用され、天井部内面に磨耗と墨痕が残る。149は口径12.5cm、器高2.6cmを測り、口縁端部を嘴状に引き伸ばす。150は口径12.7cm、器高2.0cmを測り、小振りなボタン状の鈕を雑に貼り付ける。148がⅣ<sub>1</sub>期、149・150がⅣ<sub>2</sub>期に属する。151・152は有台坏である。151は口径14.3cm、器高5.7cmを測り、箱型を呈する。底部外縁～体部下端外面に丁寧な回転ケズリ調整を加え、外展する台部を貼り付ける。薄手の152は口径10.9cm、器高4.4cmを測る。底部外面に2文字の墨書が認められ、左側の文字は「村」と判読できる。152はⅢ～Ⅳ<sub>1</sub>期、151はⅣ<sub>2</sub>(古)期と考えられる。高坏153は外面の黒化・降灰が目立つ。短い脚部は破損後、ほぼ水平に割りそろえて脚部を安定させ、使用を続けた可能性が高い。SD74からも破片が出土する。

木製品は、第64図154～156がSD39・80の重複箇所、同図157～第65図160がSD80から出土した。杭状木製品154はスギ材を用い、全長30.0cmを測る。1側面上半をやや細く仕上げ上げる他、先端を多方向から加工して尖らせる。155は、断面長方形を呈する矢板状木製品で残存長約60cmを測る。先端を丁寧に加工して尖らせる一方、頭端に雑な切断痕を残す。156は全長42.8cmを測る矢板状木製品で、先端を一方向から尖らせる。頭部に粗い切断痕と、他材と組み合わせた際の幅約2cm、深さ約3mmの相欠きの仕口を残すことから転用材と考えられる。側面の一部が炭化する。157は白木の挽物盤で、横木取りのヒノキ材を用いる。口径約17cm、器高約1.5cmを測り、体部は短く外傾しながらのびる。円形曲物底板158はスギ材を柁目取りし、径約17.5cmを測る。箸状木製品159は断面略方形を呈する。160は樹皮付きの広葉樹を用いた杭で、先端を一方向から加工して尖らせる。

**SD22・24・27～30・33～36・45** L・M-3区のSD14とSD39に挟まれた範囲で検出した耕作に伴う小溝群(第51・54・62図)で、第1次調査A地区で検出した小溝群につながる。溝の主軸方位は、SD35・36がN～約30°Wを示す他は、SD14と同様に南～北方向を指向する。溝の延長は、第1次調査A地区を含めて4.7～11.5mを測り、5m前後、9～11.5mに主体をもつ。幅20～60cm、深さ5～10cm前後を測り、底面は耕作に伴う起伏が残る。覆土はベース土の混ざる暗灰褐～褐色砂質土を基本とし、褐色系のビート質土が堆積する箇所もある。遺構の切り合い関係ではSD39より新しく、その配置等から①SD22・45・28・30・34の群(延長9～11m強、溝間距離1.6～1.8m)、②SD24・27・29・33の群((延長5～9m、溝間距離約1.7m)、③主軸方位の異なるSD35・36の群(新旧あり)に整理でき、第1次調査の成果を含めて②の群が後出する。遺物はSD22・27～30・33・34・36から少量の土師器・須恵器片が出土、SD30出土の須恵器有台坏第65図161を図化した。161は小振りな背の低い台部を貼り付ける。底部外面に墨痕が残ることから硯に転用されており、Ⅳ<sub>2</sub>期に位置付けられる。

**SD23・31・32・37・43** L・M-3区のSD14とSD39に挟まれた範囲で検出した小溝群(第51・54・62図)で、重複するSD22・24・27～30・33～36・45に前出する一群である。主軸方位は屈曲しながらも南東～北西方向～東～西方向を指向するものが多く、地勢に応じて掘削された印象が強い。溝の規模は一定でなく、幅30cm前後を測るものが主体となる。深さは5～15cmを測り、覆土は濁黄褐～褐色を呈する粗砂・砂質土である。遺物は、SD31から土師器甕小片が出土したにとどまる。

**SD38** M-2・3区、N-2・3区、O-4区で検出した直線的に延びる溝で、SD14(古)と直交する位置関係にある(第51・53・54・56・66図)。等高線にほぼ直交するように東方向から西方向に流下し、M-2区で幅を広げ、SD14(古)に合流する。溝の規模は、上・中流で幅40～150cm、深さ10～20cm、下流のM-2区



第65図 第Ⅳ面SD出土遺物実測図3(縮尺1/2-1/3)

で幅220～240cm、深さ8～20cm、SD14合流地点で幅200～20cm、深さ40～60cm弱を測る。上流側では淡灰緑～淡灰色を呈する粗砂・小砂利・細砂の上層に暗褐色～褐色系の砂質土が、中・下流側では褐色～褐色色を呈する砂質土・粘質砂が、それぞれ水流により複雑に堆積する。SD14(古)との合流部付近では長さ約1m、径約30cmの流木も確認している。遺構の切り合い関係では、SD10(古)・11(古)、SD59・73、落ち込み4より新しく、SD39や耕作に伴う小溝群(SD30・55・64等)より古い。SD14(古)とは並存する。

覆土から古代の土師器甕、須恵器坏類等が出土し、第65図162～164の須恵器、165のロクロ土師器長甕、166の石器剥片を図化した。坏蓋162の口縁端部は鋭い面取りを行い、外面は降灰が著しい。坏蓋163は天井部外面に丁寧な回転ケズリ調整を加え、しっかりとした肩部に仕上げる。口径約12.5cm、器高約3cmを測る。有台坏164は口径11.3cm、器高4.0cmを測り、体部は内湾気味にたちあがる。外面に二次被熱痕が残る。163・164はⅣ<sub>2</sub>(古)期に位置付けられる。ロクロ土師器長甕165は口径20.4cmを測り、口縁端部は反外気味にのびる。内外面とも使用に伴うス・ヨゴレが付着する。166はガラス質安山岩を用い、残存重量3.18gを測る。一部に2次調整が認められる。

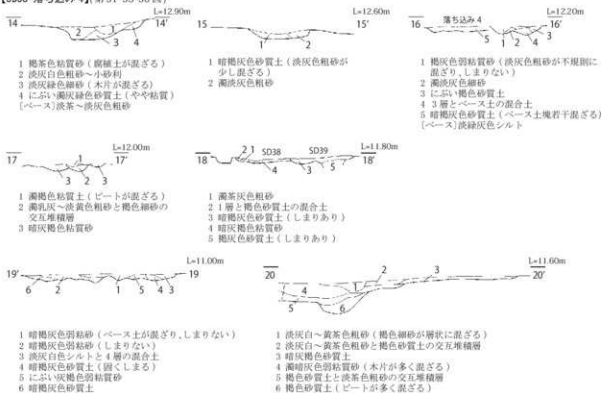
**SD39・76** SD39はM・3・4区、SD76はN・5区で検出した遺構で、規模等からSD80に分断された1条の溝である(第51・54・56・66図)。上流側のSD76は、主軸方位N-31°Eを示し、直線的に南西方向に流下する。幅30～70cm、深さ10～20cmを測り、覆土は暗褐色砂質土である。遺構の切り合い関係は、落ち込み6より新しく、耕作に伴う小溝群SD74・75・83より古く位置付けられる。下流部のSD39は、主軸方位N-66°Eを示し、直線的に流下し、SD38と重複する。幅60～110cm、深さ20cm前後を測り、基本的な覆土は暗褐色～暗灰褐色砂質土の上層に淡黄灰色粗砂が堆積する。遺構の切り合い関係では、SD38・40より新しく、SD44・SD70等の耕作に伴う小溝群より古い。縄文土器細片、古代の土師器甕片・須恵器坏類片が出土している。

**SD40** M・3区のSD38・39間で検出した浅い溝(第51・54・66図)で、主軸方位はN-33°Eを示し、SD76に近い。幅40～60cm、深さ6～10cmを測り、覆土は暗褐色粘質砂である。遺構の切り合い関係は、SD38・39より古い。覆土から第65図167のロクロ土師器長甕胴部片と、168の木製品が出土した。167の外面は、上半に粗い単位のカキメ調整、下半にタタキ成形→縦位のケズリ調整→細かい単位のカキメ調整を順次施す。168は盤類の脚部片と考えられ、端部は欠損する。膨らみをもたせた略方形の断面形態を呈し、器面は丁寧に加工される。

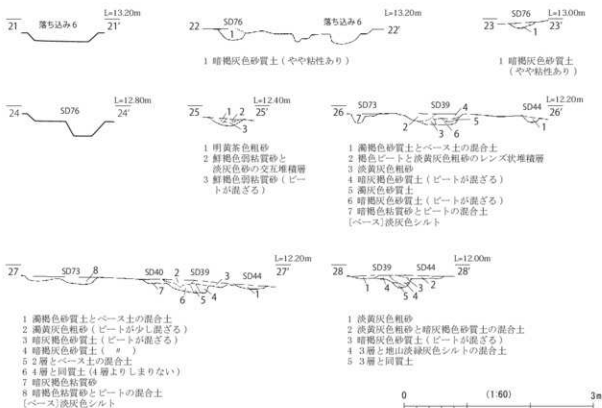
**SD41・42・66～72** M・N・4区で検出した耕作に伴う小溝群(第53・54・67図)で、西側のSD45等の小溝群と一連のものと考えられ、第1次調査A地区で検出した小溝群につながる。溝の主軸方位から、ほぼN-0°を示すSD41・68・70・72と、N-14～30°Wを示すSD42・66・67・69・71に大別できる。また、溝の長さは、前者の群が第1次調査A地区を含めて6.5～9mを測るのに対して、後者の群は2.5～約5mと短い。溝の規模は、いずれも幅15～60cm(40cm前後が主体)、深さ3～14cmを測り、底面は耕作に伴う起伏が目立つ。覆土はベース土の混ざる暗灰褐色～褐色色を呈する砂質土・弱粘質土を基本とし、ピート質土が混ざる箇所もある。遺構の切り合い関係では、SD39・65・80より新しく、主軸方位N-14～30°Wを示すSD42等の群(溝間距離1.5m前後)が、N-0°を示すSD41等の群(同1.6～1.8m)より古く位置付けられる。SD68～70から古代の土師器が出土、SD69出土のロクロ土師器長甕第65図169、SD70出土の非ロクロ土師器盤底部170を図化した。169は口径約25cmを測る。胴部はナデ屑で、口縁部は斜め上方に短くのびる。170は厚手で、内面に炭化物が付着する。第1次調査でも出土した仏器的器種と考えられる。

**SD65** N・4区で検出した耕作に伴うと考えられる小溝で、主軸方位はN-約18°Wを示す(第53・67図)。

【SD38-落ち込み4】(第51・53・56図)

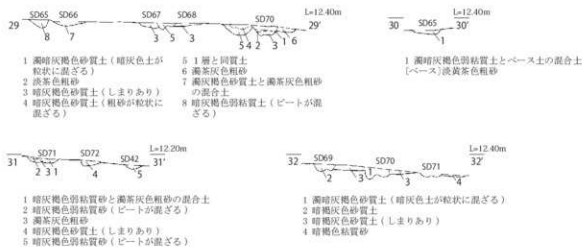


【SD39-40-44-73-74-76、落ち込み6】(第51・54・56～59図)

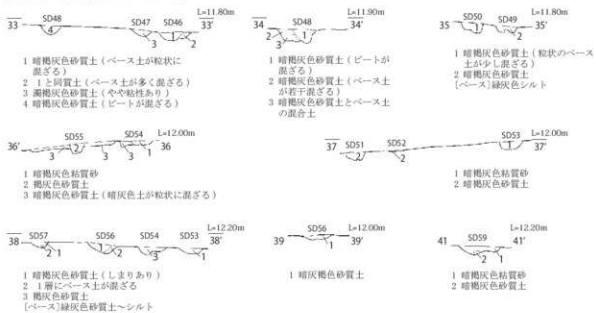


第66図 第IV面SD土層断面図2(縮尺1/60)

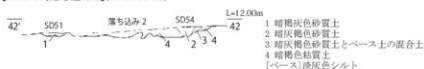
## 【SD42-65 ~ 72】(第53-54図)



## 【SD38-46 ~ 62-64】(第50-51-53-54図)



## 【SD51-54, 落ち込み2】(第50-51図)



第67図 第IV面SD土層断面図3(縮尺1/60)

長さ約6.4m、幅20～60cm、深さ10cm前後を測り、覆土はビート質土が混ざる暗灰褐色粘質土である。遺構の切り合い関係は、SD80より新しく、SD66、P17より古く位置付けられる。覆土から出土した古墳時代の土師器蓋第65図171は、断面が略三角形を呈する環状のつまみを雑につける。

**SD46・48～50・52・53・55～58・60～64・85** M・2・3区、N3・4区のSD38以南に分布する耕作に伴う小溝群(第50～54・67図)で、SD55・64はSD38より新しい。溝の主軸方位は等高線の影響を大きく受けており、SD53以西の群(主軸方位N-3～10°W)と、SD56以東(同N-20～40°W)の群に分かれ、それぞれに新旧関係が認められる。SD53以西の群には、SD46・48～50・52・53・55が属し、SD50・55が古いと考えられる。溝間距離は、SD46・48・49間が約2m、SD49～52間が約3.5m、SD52～56間が約2mを測る。溝の規模は幅30～80cm(30～40cmが主体)、深さ5～20cmを測り、底面は起伏をもつ。覆土はベース土が混ざる暗褐色を呈する粘質砂・砂質土である。SD56以東の群には、SD56～58・60～64・85が属し、SD57・60・62・85が古いと考えられる。新しい群の溝間距離は1.6～1.8m等間で、溝の幅はSD61が最大幅約2mを測ることを除けば、覆土とともにSD53以西の群と変わらない。いずれの溝も深さ5～10cm前後と浅く、底面は起伏をもつ。SD64覆土から第65図172の箸状木製品が出土した。残存長15.4cmを測り、スギ材と考えられる。他にSD50・56・60～64・85から古代の土師器壺・甕類、須恵器坏類小片が出土している。

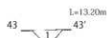
**SD47・51・54・59** M・2・3区、N3・4区のSD38以南に分布する小溝群(第50・51・53・67図)で、前述のSD46・48～50等の耕作に伴う小溝群と重複する。主軸方位は、SD47・51がN-約40°Wを測る他は、周辺の無番号溝を含めて規則性に乏しい。幅20～60cm、深さ5～15cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は、落ち込み2より新しく、SD46・48～50等の耕作に伴う小溝群より古い。SD51から古代の土師器甕片が出土したにとどまる。

**SD74・75・77・78・81～83** M・N5区で検出した小溝群(第56・57図)で、SD76・79・80に後出する。主軸方位N-27～29°Wを示すSD74・75と、それらと直交する位置関係(N-約70°E)にある不連続な溝群SD77・78・82・83に大別でき、切り合い関係ではSD74・75が新しい。SD74・75は耕作に伴う溝と考えられ、幅20～40cm、深さ5～10cm、溝間距離1.8～2.0mを測る。覆土は褐～灰褐色粘質土である。SD82とSD77・78・83は、溝間距離約3.5～4mで並行することや、調査区北東側に延びることから、耕作以外の目的をもった溝の可能性を残す。幅30～80cm、深さ2～20cmを測り、覆土は暗褐色～暗灰黄色砂質土を基本とする。SD74・77・78・81～83から古代の土師器・須恵器片が出土、SD74出土の高坏片第64図153を図化、破片はSD80からも出土している。

**SD79** M5区で検出した小溝(第56・57・68図)で、主軸方位はN-43°Wを示す。長さ約3m、幅35～60cm、深さ15cm前後を測り、覆土は鈍い灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係ではP12より新しく、SD83より古い。北西側約0.5m及び4.8mに直交する位置関係をもつ小溝(長さ約1.5m)が確認でき、なんらかの区画を示す可能性をもつ。出土遺物はない。

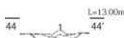
**SD86・87a・88a・88b・落ち込み5・7** N～P3～5区で検出した遺構群である(第52・53・55・68・69図)。幾筋もの自然流路・鞍部(窪地)が複合したものと考えられ、基本的に北東または東側から流れ込んだ溝(SD86・87a・88a)が、O4区で西側に屈曲(SD88b・落ち込み7)または南西側に分岐し、さらにN4区で南西側に折れ曲がる(落ち込み5)。SD86・87a・88aが幅1.24～2.4m、深さ16～60cmを、屈曲する箇所(SD88b・落ち込み7)が幅6～9m、深さ20～50cm、落ち込み7が幅3m前後、深さ10～25cmを測る。覆土は茶褐～暗褐色腐植土、淡灰～茶黄色を呈する粗砂～細砂シルト、灰褐色系の砂質土が、水流により複雑に堆積する。覆土中には倒木・太い自然枝片が混ざり、溝底付近3ヶ所で立木根の痕跡を確認したことから、樹木が繁茂した水辺の景観が復元可能である。また、O4区落ち込み7が埋没した段階で、

【SD82】(第56図)



- 1 暗褐色砂質土 (3~5cm 次の砂利が多く混ざる)

【SD83】(第56図)



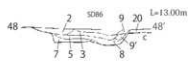
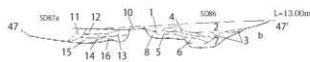
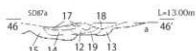
- 1 濁緑褐色砂質土
- 2 暗灰色砂質土
- 3 暗緑褐色砂質土

【SD79】(第56図)



- 1 にぶい灰褐色砂質土 (砂利が混ざる)

【SD86-87a-88a-88b】(第52-53-55図)



- 1 濁茶黄色粗砂
  - 2 濁緑灰色細砂
  - 3 褐色粘質土 (しまりない)
- [ベース] 緑灰色細砂~淡灰色粗砂



- 1 淡緑灰色細砂 (一部に茶色粗砂が層状に入る)
  - 2 灰緑色粘質土
  - 3 灰褐色粗砂と褐色土の交互堆積層
  - 4 茶褐色腐植土 (木片が多く混ざる)
- [ベース] 灰色粗砂



- 1 暗褐色砂質土
  - 2 褐色腐植土と淡灰色粗砂の交互堆積層
  - 3 淡灰色粗砂
  - 4 褐色腐植土
  - 5 にぶい茶褐色腐植土
  - 6 淡灰色~淡灰黄色粗砂 (土器出土、褐色ビートが層状に入る)
  - 7 にぶい濁灰色細砂 (假粒が混ざる)
  - 8 濁茶褐色腐植土と淡灰色細砂の交互堆積層
  - 9 淡灰色粗砂 (ビートが混ざる)
- [ベース] 淡緑灰色細砂



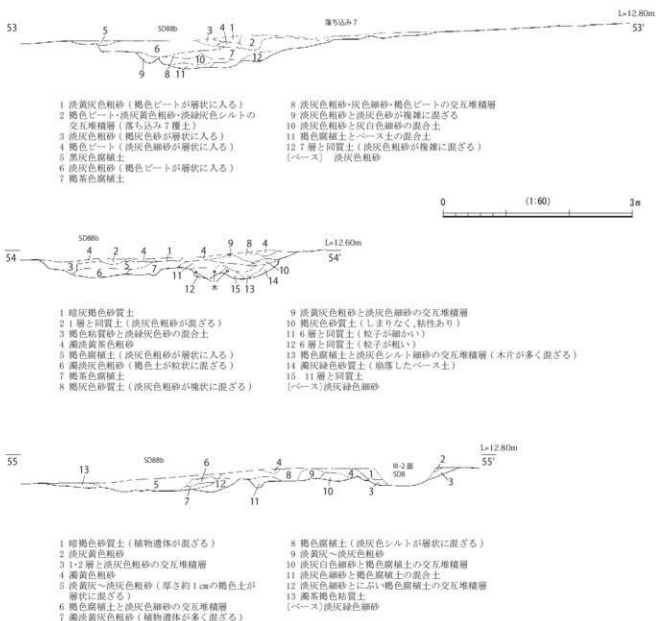
#### (46~46'~48~48'土層)

- 1 にぶい褐色砂質土 (しまりなく粘質)
  - 2 茶褐色腐植土
  - 3 淡灰色粗砂~灰色砂 (ビートが混ざる)
  - 4 3層と同質土 (ビートが多く混ざる)
  - 5 暗褐色腐植土 (しまりない)
  - 6 淡灰色粗砂 (褐色土塊が混ざる)
  - 7 3層と同質土 (褐色ビートが多く混ざる)
  - 8 灰褐色粘質土 (しまりない)
  - 9 灰色粘質土と淡灰色シルトの混合土
  - 9' 灰色粘質土と淡灰色粗砂の混合土
  - 10 濁暗褐色砂質土と淡灰色シルト
  - 11 淡褐色灰色砂質土
  - 12 淡灰色粗砂、淡灰色シルト、褐色砂質土の交互堆積層
  - 13 濁褐色砂質土 (ベース土が粒状に混ざる)
  - 14 淡灰色粗砂
  - 15 茶褐色腐植土 (しまりなく、淡灰色シルトが混ざる)
  - 16 茶褐色砂質土 (しまりあり)
  - 17 茶黄色粗砂
  - 18 暗褐色砂質土 (淡灰色粗砂が粒状に混ざる)
  - 19 13層と同質土 (ベース土主体)
  - 20 にぶい灰色粘砂
- [ベース] a 淡灰色粗砂, b 淡灰色粗砂~細砂, c 灰~茶灰色粗砂

第68図 第IV面SD土層断面図4(縮尺1/60)

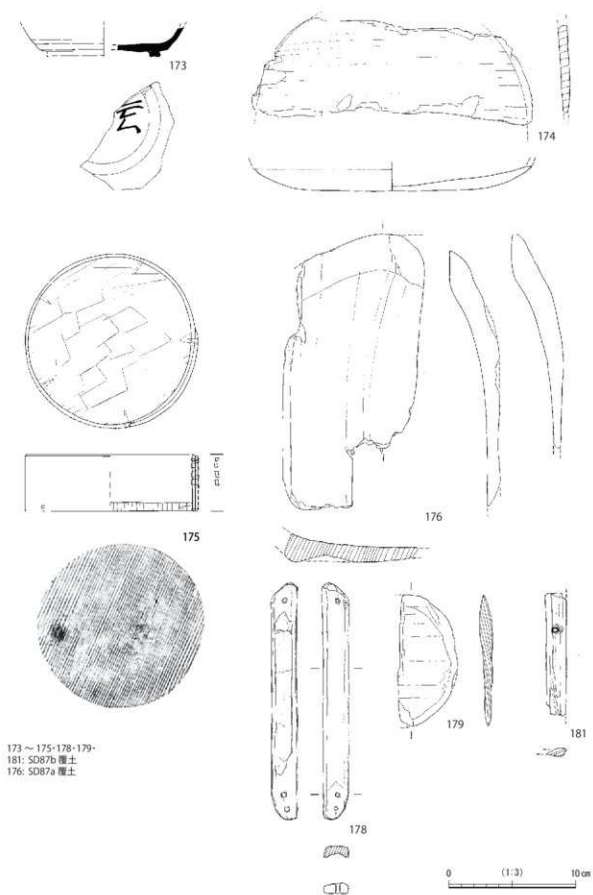


【SD88b、落ち込み7】(第52・53・55図)



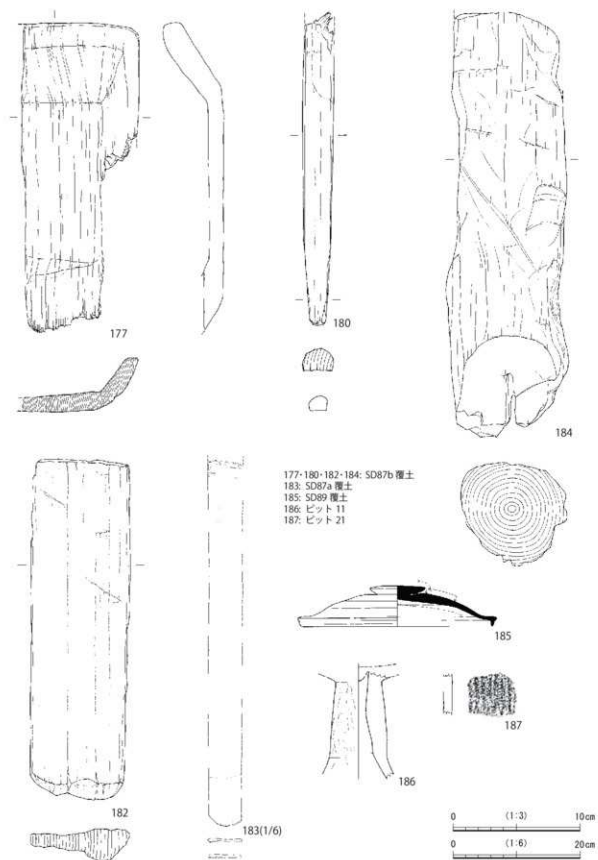
第69図 第IV面SD土層断面図5(縮尺1/60)

P21と南東側約1.5mの2ヶ所において径約15cm前後の柱根を検出したが、その位置付けは不明である。他遺構との切り合い関係では、SD88bがSD10(古)・11(古)より古くなる。覆土から縄文土器細片、古墳時代の土師器片、古代の土師器甕類・須恵器坏類に加え、多数の木製品が出土、須恵器有台第70図173、同図174～第71図184の木製品を図示した。薄手の173は、底部と体部の境が明瞭に屈曲し、体部外面にはロクロひだが目立つ。底部外面にかすかに墨書が認められるが、判読できない。VI<sub>1</sub>期に位置付けられる。白木の挽物盤挽物174は底径17.2cmを測り、底部外縁からゆるやかに立ち上がる。腐食が目立ち、材はケヤキと考えられる。完形の円形曲物175は径13.7cm、器高4.5cmを測り、材はスギと考えられる。底部と側板を4ヶ所の木釘で結合し、側板を樺皮で1列内4段に綴じる。176はスギ材を横木取りした浅い割物鉢で、平面形は略円形と考えられる。器高約4.1cmを測り、薄手の底部



173～175・178・179・  
181: SD87b 覆土  
176: SD87a 覆土

第70図 第M1面SD出土遺物実測図4(縮尺1/3)



第71図 第Ⅳ面SD、ビット出土遺物実測図(縮尺1/3-1/6)

から緩やかに立ち上がり、口縁端部を水平に仕上げる。

小型の方形鉢である第71図177はスギ材を用い、体部は一部肥厚しながら直線的に外傾する。残存長24.6cm、残存幅9.2cm、高さ4.8cmを測る。完形の有孔板状木製品第70図178はモクレン属の材を用いる。長さ18.8cm、幅2.1cm、厚さ0.9cmを測り、中央付近に長さ約13cm、幅1.3cm、深さ0.3cmの浅い袢り込みを有する。両端を丁寧に加工し、その内寄りに径3mmを測る円孔を1～2箇所に穿つ。円孔は紐等を結わえるためと考えられるが、用途の特定はできなかった。179は周縁を両方向から削って先細らせた円形板で、径約11.6cm、厚さ1.0cmを測る。中心に孔を確認できないが、紡輪の可能性を残す。棒状木製品第71図180の断面形はカマボコ状を呈する。3側面を削って、先端部を先細らせる。第70図181～第71図183は板状木製品である。181は断片である。182は全長25.9cm、幅7.6cmを測り、先端を斜方向に切断し、表面は段状を呈する。183は柾目取りの板状木製品で、表面を滑らかに仕上げる。樹種はスギと考えられる。第71図184は先端を1斜方向から加工した枕状木製品である。径約9cmを測り、ヤナギ属の材を用いる。

**SD89** O-3区に位置する溝で、北端ではほぼ直角に屈折する(第72図)。その形状・主軸方位からSB1と併存した時期の区画溝としたが、写真図版16のとおり、溝周辺のベース面が不整形に深さ5～10cm下がり、堅穴建物または地業の可能性が残る。東側の溝の主軸方位はN～約20°Wを示す。溝の規模は南北方向3m以上、東西方向約3.5m、幅30～46cm、深さ5～32cmを測り、断面形態は逆台形にしっかりとした肩部をもつ。覆土はベース土の混ざる暗褐色砂質土を基本とし、溝底後に暗褐色砂質土が堆積する。溝内部にいくつかのピットを検出したが、柱穴と確定できたものはない。他遺構との切り合い関係はなく、ほぼ同じ主軸方位を示すSD90と近似した埋没過程を経ると考えられる。覆土から第71図185の須恵器壺蓋が出土した。185は口径15.1cm、器高3.2cmを測り、薄手で各部の面取りは鋭い。径4.4cmの偏平で大振りな鈕を付けており、Ⅱ<sub>3</sub>期に位置付けられる。

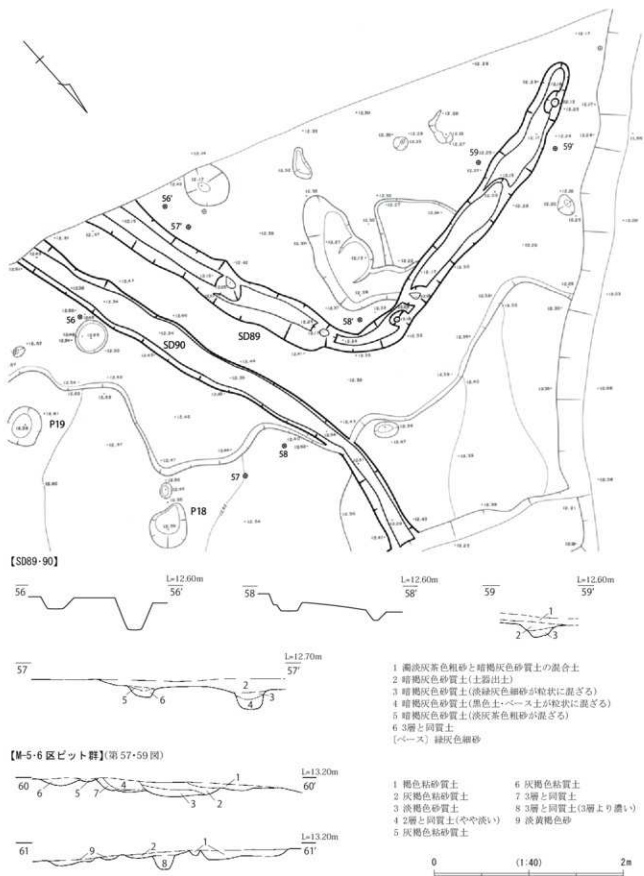
### 3 その他の遺構

**落ち込み2・3** M-3区で検出した不整形な2ヶ所の窪みで、底面は起伏に富む(第51・67図)。深さ5～15cm前後を測り、覆土は暗褐色粘質土である。遺構の切り合い関係からSD49～51・54より古く、出土遺物はない。

**落ち込み4** N-3区で検出した不整形な窪みで、底面は起伏をもつ(第53・66図)。深さ5～15cm前後を測り、覆土はベース土が混ざる暗褐色砂質土である。遺構の切り合い関係からSD38・60・61より古く、古代のロクロ土師器長壺片が出土した。

**落ち込み6** M・N-5・6区で検出した不整形な窪みである(第56～59・66図)。深さは約5～25cmを測り、底面には小穴が目立つ。覆土は灰褐色砂質土を基本とし、遺構の切り合い関係でSD74・76より古い。古代の土師器壺片が出土したにとどまる。

**ピット** 調査地区では多数のピットを検出したが、SB1を構成する柱穴、P21及び東側隣接ピット以外に明確な柱穴となりうるピットを復元できなかった。主に遺物が出土したピットに番号を付しており、覆土はベース土粒が混ざる灰褐～暗褐色砂質土を基本とする。P12・23・25の平面形態は不整形を呈し、ベース面の緩やかな凹部で、落ち込み2・4・6と類似した位置付けができる。P24は暗褐色粘質土を覆土とする木の根痕と考えられる。また遺構番号を付していないが、M-5・6区に位置する重複するピット群の断面図は、第72図に示すとおりである。P11から出土した弥生土器高坏第71図186、P21から出土した縄文土器深鉢片同図187を図化した。186は外面にかすかにミガキ調整が残る。またP12からは弥生土器壺片、古代の土師器壺片、P13～17・22からは古代の土師器壺片、P24からは土師



第72図 第IV面SD89-90、ピット 平面図・土層断面図(縮尺1/40)

器甕、須恵器坏・瓶類小片が出土した。

#### 4 包含層出土遺物(第73～77図)

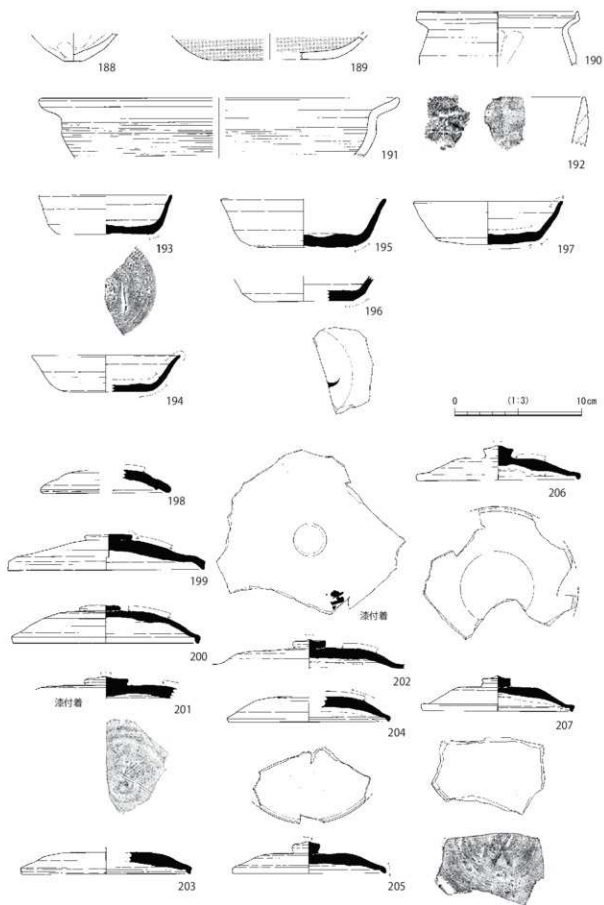
第73図188～第75図221の土器類、第75図222の砥石、第75図223～第77図243の木製品を図化した。弥生後期の甕底部188は黄橙色を呈し、摩滅が著しい。非ロクロの赤彩土師器塊189は底径約10cmを測り、内外面とも橙色を呈する。ロクロ土師器小甕190は口径12.6cmを測り、口縁端部を嘴状に上方につまみあげる。内外面とも使用に伴うスス・ヨゴレが付着する。ロクロ土師器塼片191は口径約28cmを測る。頸部で明瞭に屈曲し、口縁端部は目立たない。内外面ともススが厚く付着する。製塩土器192は、内面にハケ調整、外面に粘土紐の輪積み痕が認められる。胎土中に8mm大の礫が混ざり、小片のため傾きに不安を残す。

第73図193～第75図220は須恵器で、うち193～197は無台坏である。193は口径10.5cm、器高3.1cmを測り、箱形を呈する。使用に伴う磨耗が目立ち、内面全体に黒色付着物が認められる。淡灰色を呈する194は口径11.7cm、器高2.9cmを測り、体部は緩やかに外反する。胎土中に海綿骨針が目立つ。深身の195は口径12.9cm、器高3.9cmを測り、底部外面に敷物圧痕が残る。196の腰部は丸味をもち、底部外面に判読不明の墨書が認められる。197は体部と底部の境で明瞭に屈曲する。193・194がⅡ<sub>3</sub>期、195がⅢ期、197がⅤ<sub>2</sub>期に位置付けられる。

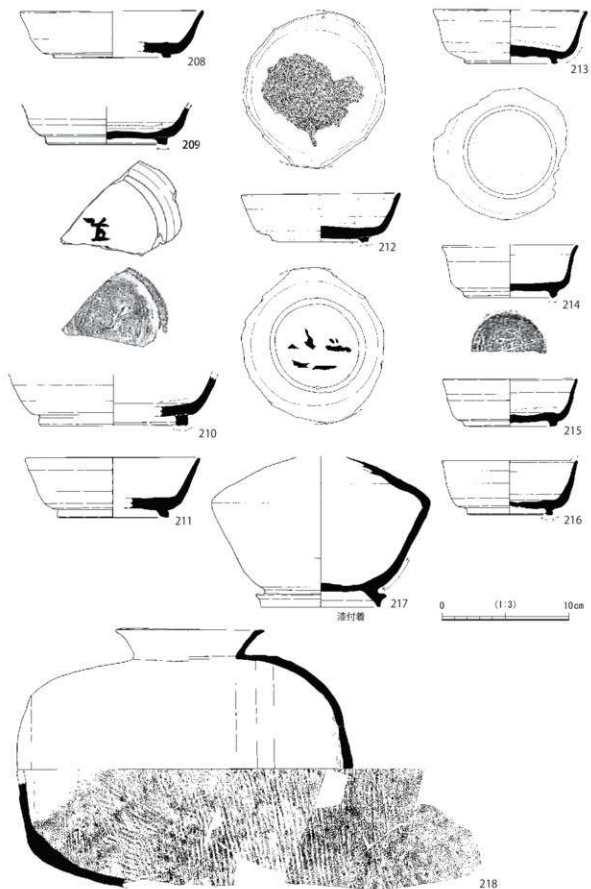
第73図198～207は坏壺である。198は坏G小片で、口径約10cmを測り、内面の返しは退化が著しい。背の低い199は口径15.5cm、器高2.8cmを測り、径3.8cmの大型鈕を付ける。口縁端部付近はしっかりと面取りされる。山笠形を呈する200は口径14.5cm、器高3.0cmを測り、扁平な鈕を付ける。I類重ね焼きで堅緻に焼成される。201は内面にヘラ記号「J」が、外面に漆状の黒色付着物が認められる。202は焼成堅緻で、外面全体に降灰が溶着する。天井部内面は使用に伴い磨耗し、外面肩部に褐色の漆が付着する。厚手の203は口径13.2cmを測り、口縁端部を下方に小さく折り曲げる。内面に光沢をもつ黒褐色のタール状付着物が残り、容器に転用されたことがわかる(写真図版34)。204は口径12.6cmを測り、小さい口縁端部は断面三角形を呈する。硯に転用されたため、天井部内面に墨痕と磨耗が認められる。205は口径12.1cm、器高2.5cmを測り、擬宝珠形の鈕を付ける。内面にススが付着する。肩部をしっかりとつくりだした206・207は、硯に転用されたため天井部内面に墨痕と磨耗が認められる。206は口径12.7cm、器高2.7cmを測り、口縁端部は丸くおさめる。207は口径11.8cm、器高2.8cmを測り、天井部内面にヘラ記号「+」を刻む。198がⅡ<sub>2</sub>期、199・200がⅢ期、201・202がⅣ<sub>1</sub>期、203～207がⅣ<sub>2</sub>期と考えられる。

第74図208～216は有台坏である。背の低い208は口径14.4cm、器高3.7cmを測り、扁平な台部を内寄りに貼り付ける。焼成は堅緻で、外面が黒化する。209も背の低い器形と考えられる。ふくらみをもつ体下部に貼り付けた台部は、貼り付け時に一部変形する。底部外面に2文字の墨書が残るが判読できない。深身の210は、断面方形のしっかりとした台部を貼り付ける。211の体下部は丸味をもち、台部は外展する。212は口径12.5cm、器高3.9cmを測り、小振りな台部を内寄りに付ける。底部内面にスス状付着物が、外面に顕著な磨耗と墨痕が認められる。青灰色を呈する213は口径12.1cm、器高4.3cmを測り、丸味をもつ体下部から口縁部が緩やかに外反する。底部外面に墨痕が残り、墨溜めに転用される。214～216は、体下部が丸味をもった箱形を呈し、口径10.6cm、器高4cm前後を測る。214は底部外面にヘラ記号が認められる。215は焼成堅緻で、青灰色を呈する。208・209がⅢ期、210・211がⅣ<sub>1</sub>期、212～215がⅣ<sub>2</sub>期、216がⅤ期に位置付けられる。

灰白色を呈する長頸瓶第74図217は、しっかりと面取りした台部を外展して貼り付ける。淡緑色

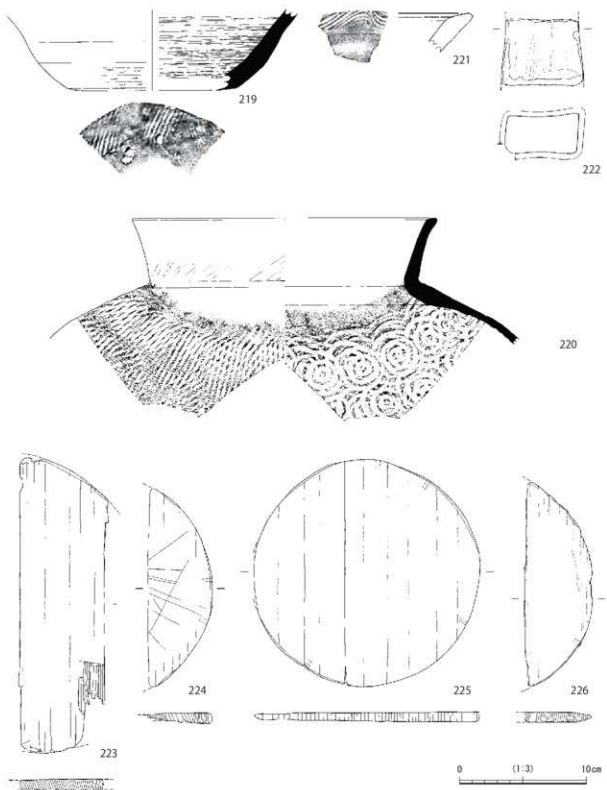


第73図 第IV面包含層出土遺物実測図1(縮尺1/3)



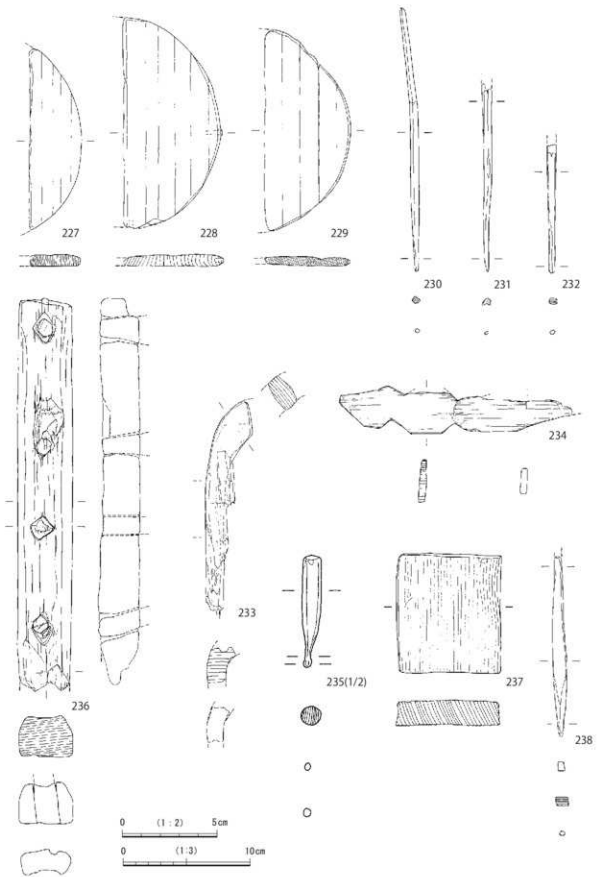
第74図 第17面包含層出土遺物実測図2(縮尺1/3)





第75図 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図3(縮尺1/3)

の自然釉が溶着し、台部に囲まれた底部外面に漆が付着する。青灰色を呈する横楕218は胴部長径約26.5cm、胴部短径約18cm、口径11.9cmを測り、胴部は片面閉塞で作られる。薄手の口縁部は大きく外傾し、端部を横方向に肥厚させる。胴部閉塞面を上に、口縁部を火前に向けた焼成が復元できる。

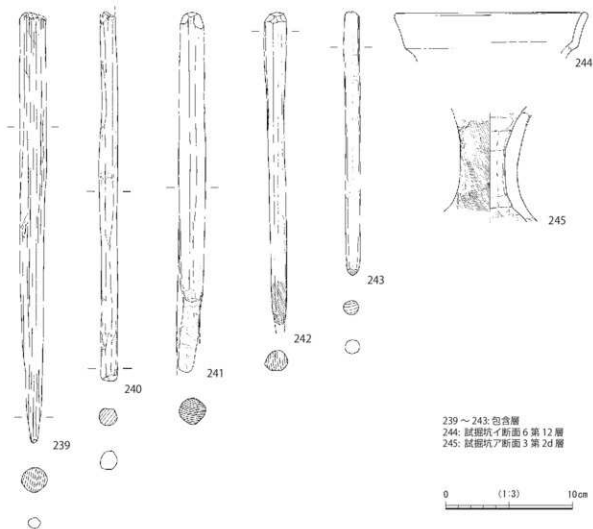


第76図 第3層包含層出土遺物実測図4(縮尺1/2・1/3)

第75図219は鉢と考えられ、還元は弱い。外面は平行タタキ成形→ケズリ調整→カキメ調整が順次施される。大型の甕220は口径24.2cmを測る。焼成は堅緻で、胴部内外面とも密にタタキ成形を施す。珠洲焼221は、調査区壁面からの混入品と考えられる。面取りした口縁端部に波状文を施す。砂岩を用いた砥石222は、両端とも破損する。残る4側面は研ぎで平滑となり、刃物痕が残る部分もある。

木製品は第75図223～第77図243を図示した。223～229は円形曲物底板で、樹種同定を行った個体は全てスギを柾目取りする。223は径約23.5cm、厚さ0.9cmを測る。224・225・226は径約18cm、厚さ0.8cmを測り、側面に不規則な配置の木釘痕が残る。224は刀子痕が目立つ。227は径約17cmを測り、木釘痕は認められない。228は径16.5cmを測り、側面2カ所に木釘痕が残る。229は径16.4cmを測り、木釘痕は認められない。230～232は側面にケズリ加工を施した箸状木製品で、231はスギを用いる。完形の230は長さ20.8cmを測り、両端を尖らせる。断面形状は、230・231が略方形、232が略楕円形を呈する。233は、木沓の左側壁部断片と推定する。横木取りのスギ材を用い、残存長17.4cm、残存高2.8cm、厚さ1.3～1.5cmを測り、器内は厚手な印象を受ける。外面は、使用に伴い爪先に近い部分が磨り減る。

第76図234はスギ材を用いた鳥形木製品で、尾部等を欠落する。長方形の板材を直線的に加工し、側面形を表現する。残存長18.5cm、残存高2.7cm、厚さ0.6cmを測り、他材との結合痕は確認できない。235は先端部を鉞頭状に丁寧に加工しており、留針の可能性が高い。全長6.0cm、軸径約1cm、頭部径



第77図 第IV面包含層他出土遺物実測図(縮尺1/3)

0.4cmを測る。236は断面略台形を呈する部材で、一端に切断痕があることから、馬蹴または田下駄の一部と考えられる。4ヶ所に略菱形のホゾ穴を穿ち、平面形が略円形または略方形を呈するホゾをもつ他材を挿入する。挿入されたホゾは遺存する。237は板状木製品で、材はスギと考えられる。第76図238～第77図243は棒状木製品で、材はスギと考えられる。238は断面方形を呈する棒状木製品で、両端を削って先細らせる。239は全長34.1cm、径約2cmを測り、先端部を削って先細らせる。240は側面を粗く加工し、先端は打ち込み等でつぶれる。241・242は頭部と側面を丁寧に加工し、断面は略円形を呈する。243は中途でへし折られ、242は先細る先端が炭化する。ともに断面形態は略円形を呈する。243は断面円形を呈する棒状木製品で、先端が滑らかに炭化することから火鋸材の可能性をもつ。径1.1cm前後を測り、スギ材と考えられる。

## 5 第Ⅳ面下試掘調査出土遺物(第77図)

第Ⅳ面下の試掘調査の概要は、第1節文末に記した。第77図244は、第8・10図試掘坑イの断面図6第12層から出土した弥生後期の有段口縁の甕片で、口径15.0cmを測る。245は同図試掘坑アの断面図3第2d層から出土した古墳時代中期の土師器高坏で、外面に粗いハケ調整が残る。いずれも粗砂層における摩滅した小片であることから、調査区外東側から流れ込んだものと判断した。

第15表 第Ⅳ面出土土器類観察表1

図号	実測番号	グリッド名	出土遺物の 部位名	種類	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	出土時期 (内)	出土時期 (外)	胎土	構成	成形 方法 (内)	成形 方法 (外)	備考	
61	132	H12-D05	N-4-1 Pz20(5B)	土師器土 器片	小甕	8	13	-	12.3	小片	黒焼	黄灰	キ	良	コナダ、 ナダ	コナダ	内面にスス付着
62	137	H12-D10	N-4-1 1-2	S040瓦土	瓦	133	60	43	14	黒	に白い黄 褐色	ウ	良	ナダ、コナ ダ	ナダ、コナ ダ	口縁部外側へ一部黒 化	
63	138	H12-D10	N-4-1 1-2	S040瓦土	瓦	126	77	46	12	黒	に白い黄 褐色	ウ	良	ナダ、コナ ダ	ナダ、コナ ダ	口縁部外側へ一部黒 化	
63	139	H12-D14	N-4-1	S040瓦土	土師器土 器片	107	81	33	6	に白い黄 褐色	イ	やや良	コナダ	コナダ、ナ ダ	口縁部外側へ一部黒 化		
63	140	H12-D10	N-4-1	S040瓦土	土師器土 器片	105	-	12.7	小片	に白い黄 褐色	黄灰	イ	良	コナダ、 ナダ	コナダ	口縁部に横状のゴレ 付着	
63	141	H13-特4	N-4-4 池袋	S040瓦土、池 袋	瓦	124	69	3.6	6	灰、黄灰	灰	a	良	コナダ、 ナダ	コナダ、 ナダ	外側に遺着「下室」	
63	142	H12-D10	N-4-1 1-2	S040瓦土	瓦	127	92	3.9	2	灰	灰	e	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
63	143	H12-D05	N-4-1	S040瓦土、池 袋(100cm上)	瓦	115	75	3.7	6	灰	灰	b	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
63	144	H12-D10	N-4-1 1-2	S040瓦土	瓦	118	74	3.4	8	灰	灰	e	やや良	コナダ、 ナダ	コナダ、 ナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
64	145	H13-特4	N-4-1	S040瓦土	瓦	115	76	3.4	8	焼灰質	焼灰質	h	良	コナダ	コナダ	外側に遺着「口 下室」	
64	146	H12-D13	N-4-1	S040瓦土、池 袋(100cm上)	瓦	116	86	3.3	2	灰	灰	e	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
64	147	H12-D13	N-4-1 1-2	S040瓦土	瓦	114	78	3.3	6	灰質	灰質	d	やや良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
64	148	H12-D12	N-4-5	S040瓦土	瓦	152	102	2.0	2	灰	灰	f	やや良	コナダ	コナダ	磨削面	
64	149	H12-D13	N-4-5	S040瓦土	瓦	125	104	2.6	8	灰	灰	h	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化、内面磨削、遺 着、裏面1箇所	
64	150	H12-D15	N-4-1	S040瓦土	瓦	127	103	2.0	10	灰	灰	e	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化、裏面1箇所	
64	151	H12-D16	N-4-1 池袋	S040瓦土、池 袋	瓦	143	121	5.7	2	灰	灰	f	やや良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化、内面磨削	
64	152	H13-特4	N-4-1	S040瓦土、池 袋(100cm上)	瓦	109	71	4.4	6	灰	焼灰質	i	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
64	153	H12-D11	N-4-1 2-4 池袋	S040瓦土、池 袋	高坏	9.8	-	12.4	6	灰	灰	h	やや良	コナダ	コナダ	有蓋、磨削面、遺 着、口縁部外側へ 一部黒化	
65	161	H12-D07	N-4-2	S040瓦土	瓦	174	-	7.8	(12)	灰	オリーブ 灰	a	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
65	162	H12-D10	N-4-4	S040瓦土	瓦	174	-	(18)	2	灰	黄灰	i	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
65	163	H12-D10	N-4-3	S040瓦土	瓦	103	103	-	-	灰	灰	e	やや良	コナダ	コナダ	外周磨削	
65	164	H12-D10	N-4-3	S040瓦土	瓦	113	79	4.0	-	灰	灰	d	良	コナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
65	165	H13-D10	M-4-4	S040瓦土	土師器土 器片	20.4	-	(35)	2	に白い黄 褐色	灰黄褐色	ケ	良	コナダ、 ナダ	コナダ	外側に遺着「カ キメ」	
65	167	H12-D09	M-4-4	S040瓦土	土師器土 器片	-	-	13.2	小片	反黄	に白い黄 褐色	カ	良	コナダ、 ナダ	コナダ	外側に遺着「カ キメ」	
65	169	H12-D10	N-4-1	S040瓦土	土師器土 器片	105	-	(45)	2	黄灰質	黄灰質	ケ	良	コナダ、 ナダ	コナダ	口縁部外側へ一部黒 化	
65	170	H12-D10	N-4-1	S040瓦土	土師器土 器片	-	102	(15)	-	反黄質	反黄質	ク	良	コナダ、 ナダ	ナダ	内面に炭化付着	
65	171	H12-D14	N-4-2	S040瓦土	土師器土 器片	-	-	(24)	12	に白い黄 褐色	に白い黄 褐色	石灰、黄 灰	良	ナダ	ナダ		



第18表 第N面出土木製品観察表

図No.	No.	発掘層号	グリッド名	出土遺構名・層位等	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	本数/り	備 考	備 考
63	133	H13-木232	N-4-2	SD11 覆土	円形遺物底版	径 19.5	-	1.1	板目	スギ	縦線は有目、本釘孔3ヶ所残存。同定№ 227
63	134	H13-木211	N-4-2	SD11 覆土	角棒状木製品	43.0	2.2	1.3	芯去り分割	-	先端部欠損。スギか
63	135	H13-木241	N-4-2	SD11 覆土	杖状木製品	(95.0)	径 13.8	径 9.8	芯持ち丸木	ハンシキ 産履	縦皮残存。同定№ 196
63	136	H13-木216	M-3	SD14 覆土	棒状木製品	(20.6)	1.4	0.7	芯去り削り出し	-	芯材、一端は炭化している。スギか
64	154	H13-木210	N-5-4	SD39 覆土	杖状木製品	30.0	2.1	1.4	板目	スギ	一端先削り。同定№ 167
64	155	H13-木297	N-5-1-2	SD39(SD80) 覆土	尖頭杖状木製品	(60.1)	4.1	1.7	板目	-	芯材、粘用材。スギか
64	156	H13-木296	N-5-1-2	SD39(SD80) 覆土	尖頭杖状木製品	42.8	6.8	1.9	板目	-	粘用材で、調整付面に凹凸の仕口あり。断面の一部が炭化。スギか
64	157	H13-木130	N-6	SD80 覆土	白木残物・葉	径約 17	底径約 13	2.1	縞木取り(板目)	ケヤキ	内面に刀子痕あり。同定№ 152
64	158	H13-木287	N-5-1	SD80 覆土	円形遺物底版	径約 17.5	-	0.9	板目	スギ	本釘孔2ヶ所。一部炭化。同定№ 242
65	159	H13-木276	N-5-1	SD80 覆土	箸状木製品	(15.6)	0.5	0.4	芯去り削り出し	-	スギか
65	160	H13-木259	N-5-1	SD80 覆土	杖	(23.4)	径 7.3	径 6.6	芯持ち丸木	-	炭化樹・縦皮残存
65	168	H13-木304	M-4-2	SD40 覆土	盤割部材	(3.3)	(5.0)	(4.1)	縞木取り	-	断面に凹みを生じ、平頭錐状方形
65	172	H13-木129	N-4-1	SD64 覆土	箸状木製品	(15.4)	径 0.8	0.8	芯去り削り出し	-	スギか
70	174	H13-木407	O-4	SD47b 覆土	白木残物・葉	(22.3)	底径約 17.2	1.9	縞木取り(板目)	-	ケヤキか、炭化箇所あり
70	175	H13-木401	O-4	SD47b 覆土	円形遺物	径 13.7	-	高 4.5	板目	-	変形。本釘痕1ヶ所。スギか
70	176	H13-木120	P-5	SD47b 覆土	斬物・鉢	(21.8)	高約 4.1	(2.3)	縞木取り(板目)	スギ	柄杓付か。炭化箇所。同定№ 197
71	177	H13-木134	O-4	SD47b 覆土	斬物・方形鉢	(24.6)	(9.2)	4.8	縞木取り(板目)	スギ	同定№ 196
70	178	H13-木301	O-4-5	SD47b 覆土	有孔杖状木製品	11.8	2.1	0.8	縞木取り(板目)	モウレン 産	変形。径 3mmの孔3ヶ所。同定№ 193
70	179	H13-木279	O-4	SD47b 覆土	円形底	径約 11.6	-	1.0	板目	-	縦線は先細形。炭化樹
71	180	H13-木308	O-4	SD47b取上げ№6	棒状木製品	(24.8)	2.5	1.8	芯去り削り出し	-	先端はつぶれる。スギか
71	181	H13-木278	P-5	SD47b 覆土	板状木製品	(9.7)	(1.7)	0.6	板目	-	裏あり
71	182	H13-木302	O-4-5	SD47b 覆土	板状木製品	25.9	7.6	2.4	板目	-	裏面を削り加工
71	183	H13-木306	P-5	SD47b 覆土	板状木製品	(36.1)	5.8	0.6	板目	-	芯材。スギか
71	184	H13-木224	O-4-5	SD47b 覆土	杖状木製品	(32.7)	9.1	6.3	芯持ち丸木	ケヤキ 産	先端部1割方向から加工。同定№ 213
75	223	H13-木282	O-4-4	包含層	円形遺物底版	径 23.5	-	0.9	板目	スギ	本釘痕1ヶ所。同定№ 238
75	224	H13-木290	N-2-1	包含層	円形遺物底版	径約 18	-	0.8	板目	スギ	本釘痕2ヶ所、刀子痕あり。同定№ 245
75	225	H13-木286	M-3-4	包含層	円形遺物底版	径 18.0	-	0.8	板目	スギ	本釘痕4ヶ所。同定№ 241
76	226	H13-木288	P-4-3	包含層	円形遺物底版	径約 18	-	0.8	板目	スギ	本釘痕1ヶ所。同定№ 243
76	227	H13-木291	O-5-1	包含層	円形遺物(底)版	径約 17	-	0.9	板目	スギ	同定№ 246
76	228	H13-木294-2	M-2-4	包含層	円形遺物底版	径 16.5	-	0.9	板目	スギ	本釘痕2ヶ所。同定№ 239
76	229	H13-木289	N-4-2-4	包含層	円形遺物底版	径 16.4	-	0.7	板目	スギ	同定№ 244
76	230	H13-木272	N-5-4	包含層	箸状木製品	20.8	0.7	0.5	芯去り削り出し	-	変形。両端尖る。スギか
76	231	H13-木271	-	包含層	箸状木製品	(15.0)	0.8	0.5	芯去り削り出し	スギ	一端尖る。同定№ 232
76	232	H13-木273	N-5-4	包含層	箸状木製品	(10.2)	0.7	0.5	芯去り削り出し	-	スギか
76	233	H13-木137	M-4-4	包含層	木漆	(17.4)	(2.7)	(2.8)	縞木取り(板目)	スギ	左側部。爪先部分は縦線。同定№ 199
76	234	H13-木140	P-4-3	包含層(茶灰色砂)	角棒木製品	(18.5)	3.8	0.8	板目	スギ	同定№ 194
76	235	H13-木139	N-3-3	包含層	盤割か	6.0	径 1.1	1.0	芯去り削り出し	-	一端を球状に仕上げた。
76	236	H13-木305	P-4-1	包含層	盤割(高脚。凹下部)	(31.2)	4.3	3.3	芯去り分割	-	盤方丸孔4ヶ所(盤内側または盤方部のホコを挿入)。スギか
76	237	H13-木293	N-5-3	包含層	板状木製品	9.8	8.4	2.3	板目	-	芯材。スギか
76	238	H13-木277	N-4-1	包含層	棒状木製品	(14.2)	1.1	0.7	芯去り分割	-	一端尖る。スギか
77	239	H13-木209	N-4-2	包含層	棒状木製品	34.1	径 2.1	径 2.0	芯去り削り出し	-	一端は尖る。スギか
77	240	H13-木312	O-4-1	包含層	棒状木製品	(29.3)	径 1.5	径 1.4	芯去り削り出し	-	一端は丸くつぶれる。スギか
77	241	H13-木313	-	緑水漬	棒状木製品	(28.6)	径 2.4	径 2.1	芯去り削り出し	-	断面は丁取加工。スギか
77	242	H13-木314	-	緑水漬	棒状木製品	(24.8)	径 1.8	径 1.6	芯去り削り出し	-	断面は丁取加工。スギか
77	243	H13-木315	O-5-1	包含層	棒状木製品(火傷付)	(21.0)	径 1.2	径 1.1	芯去り削り出し	-	先端は炭化。スギか

## 第5章 総 括

### 第1節 E地区古代調査面の変遷について

**時間的位置付け** 本遺跡を特徴付ける古代に営まれた集落の盛衰については、第1次A・B地区の調査報告書で、7世紀後葉～9世紀中葉をA期～D期に分ける時間軸及び集落変遷案(第1次A・B地区集落1期～6期)が示されている(布尾他2005)。A期(集落1a・b期)の存続時期は田嶋明人氏編年<sup>(2)</sup>Ⅱ～Ⅲ期、B期(集落2期)が同Ⅳ<sub>1</sub>期、C期(集落3・4期)が同Ⅳ<sub>2</sub>期を中心とする時期、D期(集落4期)は同Ⅴ<sub>1</sub>～Ⅴ<sub>3</sub>期におおむね比定している。そして、集落5・6期の存続時期は出土遺物が少ないことからD期以降としており、具体的な時間軸は示していない。

以下では、第1次調査の時間軸・集落変遷案を軸として、第19表のとおり、集落5期をおおむね田嶋氏Ⅴ<sub>1</sub>期に比定するとともに、新たに田嶋氏Ⅴ<sub>2</sub>～Ⅴ<sub>3</sub>期を指標とするE期を設定し、E地区第Ⅲ-2面・第Ⅳ面の変遷過程を整理したい。E地区第Ⅲ-2面・第Ⅳ面については、Ⅱ<sub>3</sub>～Ⅴ<sub>3</sub>期の遺物が出土しているが、自然流路や溝を主体とする検出遺構の性格から存続時期の特定が容易でないことに加え、遺構に伴う遺物も比較的少ない。そのため、第4章の各遺構で記した隣接遺構との切り合い関係を重視し、耕作に伴う小溝群の規模や主軸方位、配置等を併せて検討している。また、E地区出土の土器・木製品等の大部分は、調査区外東側に展開した集落域から流れ込んだものと推定しており、施設名を示す「下家」(墨書や転用硯、木沓片(第76図233)、馬形木製品(同図234)、挽物盤等の木製食膳具は、集落域の性格を考えるうえで重要である。なお、E地区第Ⅱ面の存続時期は15世紀後半代を下限とし、第Ⅲ-1面は古代末～中世前半代を中心とする存続時期を想定している。

**集落1期** 第1次A・B地区古代集落の始動期であり、a・bの2小期が設定されている。E地区では、調査地区東側のSD86・87a・87b・88a・88b、落ち込み5・7等で構成される不定形な自然流路、SB1、SD89・90で構成される建物域、直線的に流れるSD10(古)・11(古)等が当該期に属し、遺構の切り合い関係や遺構検出時の観察から、少量の木製遺物が流れ込んだ自然流路のうちSD88 bがほぼ埋没した後に、主軸方位N-10°Wを示す小規模な建物域が短期間形成され、その後に排水を目的とした溝SD10(古)・11(古)が掘削される変遷を復元した(第78図)。建物域は、1×1間の母屋東側に1間分の下屋が付す小規模な掘立柱建物SB1と、堅穴建物の可能性をもつSD89で構成される。出土遺物では、包含層出土の退化した内面返しをもつ坏蓋(第73図198)や、SD80出土の仏器的な高坏(高脚碗、第64図153)、SD90出土の坏蓋(第71図185)等のⅡ<sub>2</sub>期を上限とする少量の遺物群が最も古相を示し、Ⅲ期以降に「下家」等の墨書土器(SD80:第63図141等)を含めて遺物量が増加傾向を示す。これらから、E地区東側での土地利用については、第1次A・B地区集落1a期は集落・耕作域外(未利用域)であり、集落1b期の中でもⅡ<sub>2</sub>期以降に始まった可能性が高い。ただし、その在り方は、A・B地区とは異なり、地表水の影響を受けやすい地勢から集落縁部における限定的な利用にとどまる。また、建物域廃絶後に掘削されたSD10(古)・11(古)は、第42図70の有台坏からⅢ期のうちに埋没過程に転ずるが、調査区

第19表 古代集落の時間的位置付け

区 分	古代集落変遷期	田嶋氏編年
1次A期	集落1a・b期	Ⅱ <sub>1</sub> ～Ⅲ期
1次B期	集落2期	Ⅳ <sub>1</sub> 期
1次C期	集落3期	Ⅳ <sub>2</sub> 期
1次D期	集落4期	Ⅴ期
	集落5期	Ⅳ <sub>1</sub> 期
1次D期以降 (E期)	集落6期	Ⅴ <sub>2</sub> ～Ⅴ <sub>3</sub> 期

第20表 E地区第IV面・第Ⅲ-2面の変遷案

	第IV面変遷①	第IV面変遷②		第IV面変遷③		第Ⅲ-2面	
建物(SB)	SB1・SD90, SB89						
区域的要素が強い溝	SD10(古)・11(古)	上流部を中干流・堤として維持				SD10(新)・11(新)	大塚の土砂流入・堆積による変遷
		SD38	上流部を中干流・堤として維持		SD12		
耕作帯に伴う小溝群		SD39・76					
		SD14(古)			SD14(新)		
	(SD98・73・落ち込み4)		SD50・55	SD48・49・40・52・53	一定の空白期間		
	(SD22・24・31・32・36・27・42)		SD57・60・62・85	SD66・58・61・63・64			
	(SD40)		SD22・45・28・30・34	SD24・27・29・32			
			SD77・78・82・83	SD14・75			
		SD42・65・66・67・68・71	SD41・68・70・72				
	(SD47・51・54・59)						
自然流路・落ち込み	SD88・37・88a6 落ち込み2・5・7	SD10(新)・11(新)重複部分より上流部の一部が埋没または自然流路として維持					SK1~3, SD8
特 期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ-Ⅵ期		Ⅶ-Ⅷ期
1次・自然流路の対応	A期 集落1b期	A期 集落1b期	B期 集落2期	C期 集落3期	D期 集落4期	D期 集落5期	E期 集落6期

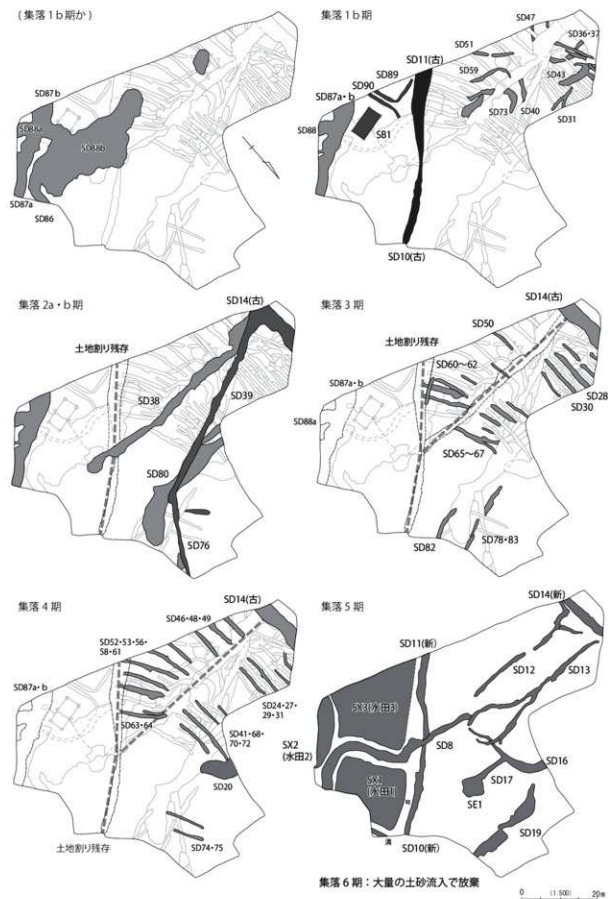
を東西に画する土地規制は第Ⅲ-2面(集落第5・6期)まで継続しており、第Ⅲ-2面検出状況からも浅い溝状のくぼみとして残っていた可能性が高い。一方、E地区西側には不定形な小溝が散在する様相を示す。例えばSD47・37、SD31、SD59・73のように建物敷地を想像させる円弧状の平面プランを呈する溝や、SD51・40のようにSD10(古)・11(古)と主軸方位が類似する溝も存在し、一定の土地利用が始まったと考えられる。

**集落2期** 集落縁辺部としての土地利用は継続し、直線的に流れるSD38とSD76・39の切り合い関係から、集落2a期・集落2b期という2小期に細分可能である。集落2a期は、南北方向に主軸方位を示すSD14(古)と直交するSD38、自然流路SD80、落ち込み6が属する。このうち、SD14(古)は、第Ⅲ-2面(集落第5・6期)まで利用され続ける基幹水路と考えられ、集落3期以降の遺構との重複は認められない。集落2a期は、明確に東西南北を指向する土地利用が採用され、第Ⅲ-2期(集落第5・6期)まで続く土地割り成立の意味で、一つの画期といえる。集落2b期は、SD80が埋没・廃絶するとともに、SD38がSD39・76に付け替えられ、SD14(古)に流れ込むものと考えられる。なお、集落2a期に成立したSD38線上の土地割りは維持されたようだ。一方、SD10(古)・11(古)を境とする調査区東側は、集落2期を通じて自然流路SD87a・88が残存する程度の未利用域に転ずる。集落2a期については、SD38覆土出土遺物(第65図163・164)がⅣ<sub>2</sub>(古)期に属することから、Ⅳ<sub>1</sub>期を中心とした時期と考えたい。遺物には、集落2a期に「田地」墨書(第45図115)、集落2b期には「下家」墨書(第45図108)が存在する他、転用硯や木製食膳具が定量出土している。

**集落3期** SD10(古)・11(古)より西側で耕作地(畠地)としての利用が始まる一つの転機である。耕作域は、集落2期に成立したSD10(古)・11(古)及びSD38、SD14(古)による土地割りを維持するように分布するとともに、ほぼ直交するSD78・81の存在から、不明瞭ではあるが大きく3つの耕作単位が想定できる。さらにSD38以北の南北方向に主軸をもつ小溝群で構成される耕作単位は、SD26・28・30・31等の群(溝間距離1.6~1.8m)とSD42・71・69・67・65等の群(同1.5m前後)に2分割可能である。耕作に伴う小溝群は、等高線に沿うように屈曲しながら掘られる。集落3期については、SD30出土の有台坏片(第65図161)からⅣ<sub>2</sub>(新)期を中心とした時期を想定したい。文字資料では「下家」墨書(第45図109)が出土している。

**集落4期** 集落3期で成立した耕作地(畠地)利用と、集落2期で成立した土地割りが継承される。当





第78図 E地区 遺構変遷図(縮尺1/500)

第21表 E地区出土墨書土器等時期別一覧表

調査面	遺構名	器種	内容	挿図番号	時期
第IV面	SD80	無台坏	「下家」	第63図141	Ⅲ期
第Ⅲ-2面	包含層	有台坏	「田地」	第46図115	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第IV面	包含層	無台坏	墨書・判読できず	第73図196	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第IV面	包含層	有台坏	墨書・判読できず	第74図209	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第IV面	包含層	有台坏	墨書・判読できず	第74図212	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第Ⅲ-2面	SD8	坏蓋	転用硯	第39図47	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第IV面	包含層	坏蓋	漆付蓋	第73図202	Ⅳ <sub>1</sub> 期
第Ⅲ-2面	包含層	坏蓋	「下家」	第45図108	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第Ⅲ-2面	包含層	坏蓋	「下家」	第46図109	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	SD30	有台坏	転用硯	第65図161	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	包含層	坏蓋	転用硯	第73図206	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	包含層	坏蓋	転用硯	第73図207	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	包含層	有台坏	転用硯	第74図213	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	包含層	坏蓋	転用硯	第73図204	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第IV面	SD80	坏蓋	転用硯	第64図149	Ⅳ <sub>2(Ⅲ)</sub> 期
第Ⅲ-2面	包含層	無台坏	□(下)家	第45図104	V <sub>1</sub> 期
第IV面	SD80	無台坏	「下家」	第64図145	V <sub>1</sub> 期
第IV面	SD80	有台坏	「村」等2字	第64図152	V <sub>1</sub> 期
第Ⅱ面	包含層	無台盤	「福」	第16図11	V <sub>2</sub> 期
第Ⅲ-2面	水田1耕作土	無台盤	墨書・判読できず	第36図34	V <sub>2</sub> 期
第Ⅲ-2面	水田1耕作土	有台坏	墨書・判読できず	第36図36	V <sub>2</sub> 期
第Ⅲ-2面	SD16	無台坏	墨書・判読できず	第44図83	V <sub>2</sub> 期
第Ⅲ-2面	包含層	坏蓋	転用硯	第46図112	V <sub>2</sub> 期
第IV面	SD80	坏蓋	転用硯	第64図150	V <sub>2</sub> 期
第Ⅱ面	包含層	坏蓋	「乙」	第16図7	V <sub>1</sub> 期
第IV面	SD87 b	有台坏	墨書・判読できず	第70図173	V <sub>1</sub> 期
第Ⅲ-2面	水田1流入土	無台盤	「福」	第36図33	V <sub>2</sub> 期

期に属する遺構には、新たな耕作に伴う小溝群、SD14(古)、SD87a・b、SD80(20)及びSD10(古)・SD11(古)・SD38線上の土地割りがある。新たな耕作に伴う小溝群は、等高線に沿うように分布し、溝間距離はSD46・48・49が約2m、その他の小溝群が1.6～1.8mを測る。また、小溝の延長は9～11.5mに主体をもち、集落3期に比して長く掘られる傾向を示す。SD80(20)は、集落域と耕作域を画する溝の役割をもつようだ。

集落4期は、SD80(20)出土の無台坏第64図145がV<sub>1</sub>期、同図146がV<sub>2</sub>期、SD87a出土有

台坏(第70図173)がV<sub>1</sub>期に位置づけられることから、V<sub>1</sub>期初め頃を下限にする時期を考えている。文字資料には、SD80(20)等から「下家」、第Ⅱ面包含層から「福」(第16図11)、「乙□(上カ)」(第16図7)が存在する。なお、第Ⅲ-2面遺構検出時に耕作に伴う小溝群に起伏が認められないことから、集落5期までに耕作が放棄されたと考えられ、かつ集落4期と集落5期の間に一定の空白期間を想定する。

**集落5期** 第Ⅲ-2面検出遺構が属し、集落2期で成立した土地割りを継承しつつも、土地利用が大きく転換する時期である。ほぼ未利用であったSD10(古)・SD11(古)より東側の土地は、大規模な造成を行い、水田域(SX1～3、SD8等)となる一方、西側の土地は湧水の取得を目的とする簡素な井戸(SE1・SD17)が認められる程度である。土地割りは、流入した淡灰色粗砂・シルトの堆積からSD10(新)・11(新)、SD12・13、SD14(新)を復元でき、SD14(新)以外は浅い溝状を呈する。水田域では、水田間を屈曲しながら流れるSD8を主に排水溝とし、SX1北東側で検出した溝を加味すれば、基本的に用水と排水が分離された構造ではあるが、貯水機能を目的とするSD8堰の存在から完全に用排水を分離する状況まで達していない可能性を残す。また水田は、地形の強い制約を受けつつも方形を指向する。規模がわかるSX1で約70m(約9.4×約7.4m)、SX3で93m以上を測る。この大規模な土地造成に伴う水田開発は、おそらく集中豪雨に起因する調査区東側からの短期間に流入・堆積した土砂で一挙に埋没し、その後の復旧作業にも係らず、放棄されることとなる。集落5期の下限は、SX1流入土に混ざる無台盤(第36図33)から、おおむねV<sub>2</sub>期初め頃と考えられる。文字資料には吉祥句である「福」(第

36図33)等がある。なお、SD8から挽物白木盤や箸、鉢等の定量の木製食膳・調理具が出土しており、当時の木製品の普及状況を考える上で興味深い。

**集落6期** 第1次C地区以北で定量出土するVI<sub>2</sub>～VI<sub>3</sub>期に属する遺物は、E地区では確認できない。集落5期末に発生した大量の土砂流入・堆積後、耕作地としての復旧も放棄され、長期間未利用の状況が続いたものと考えられる。

## 第2節 A～C・E地区の古代集落の変遷について

本遺跡は、邑知地溝帯の小扇状地上において南北方向の延長約380mの規模で展開する縄文時代～近世初頭の複合遺跡である。南側約1/3に位置するA～C・E地区(南北方向約120m)には、主に古代の集落・耕作域が盛衰しており、既報告I・IIの成果を含めて、その概要・変遷等を整理する。なお、C地区で検出した中世～近世の集落・耕作域(第0-I～III面)、弥生時代末～古墳時代中期の集落(第V面)については、小扇状地中央部(D・F・G地区、南北方向約100m)にも延びることから、当該地区の報告において位置付けを行うのが適当と考える。

A～C・E地区は、小扇状地の南側に位置し、南側及び西側に緩やかに傾斜する地勢にあり、古代の集落域の中心域は調査区外東側(現在の四柳町集落)に展開するものと考えられる。遺構検出面の標高は、C地区北東端で約14.5m、E地区第IV面で約11.3mを測る。検出した遺構は、掘立柱建物35棟(C地区8棟、A・B地区26棟、E地区1棟)、竪穴建物3棟(B地区)、横板組隅柱留め井戸1基(B地区)、区画溝や耕作に伴う小溝群などの溝約240条、土坑・ピット多数で、A・B地区の一部では建物建築に伴う整地行為を確認している。B・C地区では、調査区外に延びる等の理由から復元しきれなかった掘立柱建物柱穴が多数あり、掘立柱建物の実数はさらに増加すると考える。

**掘立柱建物の概要** 現状で検出・復元した掘立柱建物の分布については、B地区中央付近をほぼ南北に延びる溝(C-SD23(C地区SD23を示す。以下、同じ)・B-SD16、B-SD21・23等)周辺が掘立柱建物分布の空白域となっており、何らかの土地規制を推測できる。掘立柱建物は、これらの溝の北東側に展開する群(B地区東群：B-SD14～25、C地区群：C-SB1～8)と、西側に重複しながら建てられる群(A・B地区西群：AまたはB-SB1～13)及び単独立する小規模なE-SB1に大別できる。なお、C地区については、C-SD23(B-SD16に連続する溝)と重複する掘立柱建物柱穴・溝の切り合い関係を元に、出土遺物・建物主軸方位等を加味して集落時期比定を行っている。また、A・B地区SB22～24は、C地区調査成果から建物平面規模を一部変更した他、B地区SB9は柱穴P174に正位に埋納された須臾器無台盤(報告書I第46図149)より集落5期の建物とした。

掘立柱建物の型式は、隅柱建物34棟に対して高倉様の総柱建物1棟(C-SB3、2×2間、8.4m<sup>2</sup>)と、圧倒的に隅柱建物が多い点に大きな特徴をもつ<sup>(4)</sup>。

隅柱建物の柱間数・平面積は、推測部分を含めて規模がわかる27棟でみれば、桁行6間以上×梁行3間1棟(B-SB22、平面積66.3m<sup>2</sup>以上)、4×3間4棟(C-SB22、B-SB23等、26.9～30m<sup>2</sup>または約43m<sup>2</sup>)、4×3または2間1棟(B-SB14、30.2m<sup>2</sup>)、3×4または3間1棟(B-SB16、30.5m<sup>2</sup>)、3×3間1棟(A-SB1、29.3m<sup>2</sup>)、3×3または2間3棟(C-SB21、C-SB8等、約28m<sup>2</sup>)、3×2間5棟(B-SB12、C-SB5等、20～26m<sup>2</sup>)、3×1間1棟(B-SB18、23m<sup>2</sup>)、2×3または2間1棟(A-SB4、19.4m<sup>2</sup>)、2×2間5棟(A-SB4等、7.8m<sup>2</sup>・11.5m<sup>2</sup>・15～20m<sup>2</sup>)、2×1間3棟(B-SB19等、7～12m<sup>2</sup>)、1×1間1棟(B-SB25、9m<sup>2</sup>)と、多様性を示す。その中で、①桁行4間または3間建物(平面積20～30m<sup>2</sup>、約43m<sup>2</sup>)が15棟と全体の半数以上を占めること、②桁行4間建物5棟及び平面積28m<sup>2</sup>以上の桁行3間建物5棟は梁行柱間数3間を基本とすること、

第22章 A～C地区根拠別独立柱建物一覧表

グリッド名	形式	根 拠 (間)	梁行寸法÷ 柱行寸法	桁行寸法 (m)	桁行柱間寸法(m)	梁行寸法 (m)	梁行柱間寸法(m)	面積(㎡)	断面形状	断面寸法 (mm)	主軸方位	集落時期	備考
J-K-10	側柱	6×3	～0.39	13.00～	2.15×2.15÷2.00×2.00×2.05	5.10	1.70×1.70×1.70	66.3	円	100×170	N-38°-W	6期	東側建物群
J-K-13	側柱	6×3	0.62	8.40	2.10×2.10×2.10×2.10	5.20	1.60×1.60×2.00	43.7	矩形円	60×80	N-47°-W	5期	C-SSB-上1号新 東側建物群
J-K-10	側柱	4×3	0.64	8.20	2.20×2.20×1.90×1.90	5.25	1.75×1.75	43.0	円	80×140	N-35°-W	3期	東側建物群
J-K-6	側柱	4×3	0.74	6.45	1.65×1.65×1.65×1.50	4.80	1.60×1.60×1.60	30.1	円	80×80	N-45°-W	3期	西側建物群
J-K-9	側柱	4×3×2	0.86	5.60	1.55×1.60×1.35×1.10	4.80	2.00×1.50×1.30	26.9	円、矩形	30×70	N-24°-W	3期	東側建物群
J-K-9	側柱	4×3×2	0.67	6.70	1.60×1.60×1.60×1.60	4.50	1.50×1.50×1.50	30.2	円、矩形	70×130	N-42°-W	6期	東側建物群
L-9	側柱	3×4×3	0.97	5.55	1.85×1.85×1.85	5.40	1.80×1.80×1.80	30.5	長方、矩形	80×110	N-37°-W	5期	東側建物群
K-5-6	側柱	3×3	0.79	6.10	2.20×2.00×1.90	4.80	1.30×1.80×1.70	29.3	矩形	50×70	N-14°-W	5期	西側建物群、漆器館等理納
J-K-13	側柱	3×3	0.89	5.70	1.90×1.90×1.90	5.10	1.70×1.70×1.70	29.1	矩形円	80×120	N-48°-W	6期	双耳長等理納
J-11	側柱	3×3×2	0.87	6.00	2.00×2.00×2.00	5.20	1.80×1.40×1.80	28.8	矩形円	50×80	N-42°-W	6期	西側建物群
K-6	側柱	0.73	東 6.20	2.10×2.10×2.00	4.50	2.20×2.30	27.9	円、矩形	50×90	N-25°-W	2期	西側建物群	
J-K-7	側柱	0.68	6.00	2.00×2.00×2.00	4.10	1.90×2.20	24.6	円、矩形	70×90	N-18°-W	4期	西側建物群	
L-11	側柱	0.61	6.00	1.60×2.20×2.30	4.00	2.00×2.20	26.4	矩形円	50×20	N-50°-W	5期	桁行寸法不明	
K-10	側柱	3×2	0.81	5.20	1.75×1.80×1.65	4.20	2.00×2.10	21.9	五、矩形	70×100	N-52°-E	5期	東側建物群
L-12	側柱	0.58	6.60	2.40×2.10×2.10	3.80	1.90×1.90	25.1	矩形円	60×80	N-42°-W	6期	東側建物群	
K-9-10	側柱	0.72	5.25	1.75×1.70×1.75	3.60	1.90×1.90	20.0	円、矩形	40×110	N-50°-E	6期	東側建物群	
K-10-10	側柱	3×1	0.73	5.60	1.80×1.80×2.00	4.10	4.10	23.0	円、矩形	50×90	N-64°-E	2期	東側建物群
L-5	側柱	2×2×3	0.90	4.60	2.10×2.10×1.70	4.30	2.10×2.15	19.4	円、矩形	50×60	N-14°-W	5期	西側建物群
L-5-6	側柱	2×2	0.88	4.60	2.20×2.40	4.50	2.25×2.25	20.7	矩形	30×55	N-23°-W	2期	西側建物群
L-4	側柱	2×2	0.88	4.20	1.85×2.15	4.30	1.70×1.70	14.4	円	30×60	N-20°-E	2期	西側建物群
L-12	側柱	0.87	5.00	1.50×1.50	2.60	1.20×1.30	7.8	矩形円	40×80	N-36°-E	3期	西側建物群	
K-6	側柱	2×2カ	0.95	3.80	1.60×2.00	3.80	3.50×2.10	15.2	矩形	35×70	N-21°-W	4期	西側建物群
K-8	側柱	2×2カ	0.89	3.60	1.60×1.50	3.20	1.60×1.60	11.5	円	30×60	N-24°-W	4期	西側建物群
K-10-10	側柱	2×1	1.00	3.50	1.50×2.00	3.50	3.50	12.3	五、矩形	40×70	N-43°-E	1a-b層	東側建物群
O-3-5区	側柱	2×1	0.53	3.60	1.90×1.90	2.60	2.60	7.4	矩形円	35×48	N-10°-W	1b層	東側建物群
K-7	側柱	2×1カ	0.90	3.80	2.00	2.80	2.80	8.1	矩形	40×70	N-20°-W	4期	西側建物群
K-10	側柱	1×1	1.00	3.00	3.00	3.00	3.00	9.0	円	60×80	N-45°-W	3期	東側建物群
J-9	側柱	3××2カ	-	東 6.40～	2.00×2.20×2.20+	4.50	2.30+	14.7	円	50×80	N-14°-W	4期	東側建物群
K-13-14	側柱	2××3	-	3.50～	1.75×1.75+	4.60	1.50×1.50×1.60	16.1	円、矩形	60×80	N-50°-W	5期	東側建物群
L-10	側柱	2××2	-	4.00～	2.00×2.00+	4.60～	2.30×2.30+	20.2	矩形	30×120	N-50°-W	3期	東側建物群
L-10	側柱	2××2	-	4.00～	2.00×2.00+	3.10	1.55×1.55+ (1.55?)	12.4	円	60×80	N-64°-E	6期	東側建物群
K-6	側柱	2××2	-	東 4.00～	2.00×2.00+	南 5.20	2.00×2.40	20.8	円、矩形	60×80	N-35°-W	1a-b層	西側建物群
K-6	側柱	1××1	-	南 3.50	東 2.50+	東 2.50+	2.50+	8.8	矩形	60×110	N-32°-W	5期	西側建物群、工器理納
K-5	側柱	1××2	-	南 4.00～	東 2.00+	東 2.00+	2.00+	8.0	矩形	50×70	N-34°-W	4期	西側建物群
L-12-13	側柱	2×2	0.93	3.00	1.50×1.50	2.80	1.40×1.40	8.4	矩形円	80×100	N-33°-E	3期	西側建物群

③平面積28～30m<sup>2</sup>に異なる梁行柱間数をもつ建て方が集中すること、④桁行3間以上の平面プラン(梁行寸法/桁行寸法の値)で0.75を超える建物が一定量存在すること、⑤桁行2間建物(平面積20m<sup>2</sup>以下)の平面プランは正方形を指向すること、⑥平面積66.3m<sup>2</sup>以上を測るB-SB22が突出した存在であること等が指摘できる。①は県内の当該期の「一般的集落」とされる建物規模として通有の在り方といえる。また、②～④は古墳時代後期以降の掘立柱建物プランが根強く継承されていることを示す。

掘立柱建物の主軸方位は、N-50～14°-Wを向く建物を向く建物(北西向き)とN-33～63°-Eを向く建物に大別できる。報告書Iで指摘されるとおり、南部の調査地区全体を網羅するような厳密な建物主軸方位の規制は認めがたく、B地区中央をほぼ南北に走る溝周辺(空白域)を基軸として、B地区東群、A・B地区西群、C地区群という程度の単位で時期ごとに建物主軸方位がまとまりを示す傾向が強い。勾配の強い扇状地形の制約から、北西～北を指向しながら建築単位(土地占有単位)ごとに地勢に応じて建物主軸方位が各時期に決定されたものと考えられ、同時期の3つの単位でも建物主軸方位に若干の差異が認められる。その状況は、建物の廃絶後の柱穴の埋め戻し方法にも反映されている可能性が高い。A・B地区西群では11棟に柱の柱抜き痕が確認でき、粘土と礫を用いた埋め戻し事例(B-SB1・4・6等)や遺物埋納(A-SB1、B-SB9)が認められるのに対して、B地区東群・C地区群では柱抜き後に周辺の土や粘土を混ぜた土で丁寧に埋め戻す傾向を示す。

**出土遺物** 遺物は、土壌堆積を基本とする扇状地形の特質から、墨書土器を含む多数の須恵器・土師器を中心に、挽物盤・曲物等の食器・調理具や柱根等の木製品、製塩土器片、金属製品(鉄斧、銅製刀鞘口金具)、生産活動を示すフイゴ羽口や鉄滓、土鍾の他、特徴的なものとして木杵、黒漆塗漆器碗、和同開珎、黒漆塗銅製丸柄裏金具が各1点出土している。

中でも、墨書土器や転用硯が多く、実測した個体数でいえば墨書土器132点、漆書土器1点、転用硯39点(うち6点は墨書土器と重複)を数える(第23・24表)。地区別では、掘立柱建物群が展開するA～C地区が多い一方、調査区外東側から移動してきたと考えられるE地区は18点と少ない。集落時期でみれば、集落1期(うち田嶋氏編年Ⅲ期)にA・B地区西群で「□(吉カ)」、漆書「+」、E地区で「下家」が確認される程度であるが、集落2期以降に急増し、集落5期まで定量的出土状況を継続する。集落6期は、A・B地区西群、E地区で出土点数が急減するのに対して、集落域を維持するC地区、A・B地区東群では田嶋氏編年Ⅵ期まで一定量の出土をみる。

次に文字内容でみれば、不明瞭なものを除いても40種類程度の文字が確認できる。集落1期(うち田嶋氏編年Ⅲ期)～集落5期までは、施設名や人名に関連する文字を中心に多様な内容をもつに対して、集落6期は主にC地区から吉祥句的な「福」や数量管理的要素の強い文字「||」「|||」「||||」が出土するととまる。「乙上」(17点)は、集落2期～5期まで各地区から出土する内容であり、略形と考えられる「乙」も集落4期に1点存在する。「乙上」は羽咋市教育委員会(以下、市教委)第1次調査区でも出土しており、本遺跡に特徴的な文字の一つといえる。「田地」「田地一」も、昭和23年の耕地整理時に近辺の水田から「田地」「田地八十」が採集されたことや、市教委第1次調査区の「田地」、同第2次調査区の「八十」から、本遺跡で広く認められる文字内容である。

施設に関連する文字は「上家」「上」「下家」「青家」「青」家「屋東」「寺」等が存在する。集落時期では、前述のとおり集落1期に「下家」(E地区)が出現し、集落2期で「上家」が、集落3期～5期に「青家」「青」「家」「屋東」がそれぞれ加わり、継続的な出土をみる。対をなす特定施設と考えられる「上家」(及び略形の「上」)、「下家」の出土は、A・B地区西群とE地区に限定され、建物を特定できないものの出土傾向から北側に「上家」、南側に「下家」が配されていた可能性が高い。「青家」(及び略形の「青」)は、集落3期～6期まで確認でき、C地区、A・B地区東群で多く出土する傾向を示す。「家」は集落3・4期にC地



第24表 A～C・E地区 黒書土器・転用規等時期別一覧表

事項	地区	実測 点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
実測黒書 土器点数	C地区	67	0	3	6	6	7	7	4
	A・B地区東群	27	1	5	5	5	5	3	3
	A・B地区西群	54	0	13	9	15	9	0	8
	E地区	18	1	6	2	2	4	1	2
計		132	2	27	22	38	25	11	17
			1.5%	20.5%	16.7%	21.2%	18.9%	8.3%	12.9%
文字内容	地区	実測 点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
「乙上」 「乙カ」上 17点	C地区	4			Ⅱ-46図344 Ⅱ-46図344		Ⅱ-31図163		Ⅱ-29図109
	A・B地区東群	8		I-93図627 I-93図636 I-94図652	I-13図3 I-13図5 I-13図6		I-13図4		I-96図708
	A・B地区西群	6		I-84図505 I-84図511 I-95図692	I-91図598	I-92図611	I-72図332		
	E地区	0							
「乙」,「乙 2点	A・B地区西群	1				I-46図143			
E地区	1					16図7			
「田」 3点	C地区	2			I-137図53	Ⅱ-49図401			
E地区	1	46図115							
「田一」 「上家」	A・B地区西群	1				I-73図344			
「上」 「上」	A・B地区西群	1				I-96図704			
A・B地区西群	2		I-96図695					I-95図687	
「下家」7点	A・B地区西群	2		I-84図503 I-95図689					
E地区	5	63図141			45図108 46図109	45図104 64図145			
「青家」	A・B地区西群	1					I-20図65		
C地区	1							Ⅱ-49図406	
「青」,「青」 「口(青カ)」	A・B地区東群	1				I-13図16			
A・B地区西群	3			I-46図147	I-96図711	I-22図94			
「家」,「家」	C地区	4			Ⅱ-49図407 Ⅱ-91図439	Ⅱ-52図459 Ⅱ-52図454			
「屋」 「屋(黒カ)」	C地区	1							
A・B地区東群	1			I-93図643					
A・B地区西群	1					I-96図709			
「寺」	A・B地区東群	2					I-14図29 I-96図713		
A・B地区西群	1					I-95図672			
「口(寺カ)」	A・B地区西群	1							
「櫻野一」 「櫻野一」	A・B地区西群	3				I-13図19 I-22図103	I-20図70		
「小島」	A・B地区西群	1	I-96図693						
A・B地区東群	2					I-91図609 I-94図658			
A・B地区西群	1			I-91図608					
「万呂」	A・B地区西群	1		I-74図370					
「小足」	A・B地区西群	1				I-73図343			
「口足」	C地区	1		Ⅱ-25図53					
A・B地区東群	1				I-93図647				
A・B地区西群	1					I-72図327			
A・B地区西群	1						I-92図616		
「口(力カ)」	A・B地区東群	1						I-49図187	
A・B地区東群	1	I-14図22							
A・B地区西群	1			I-20図64					
A・B地区東群	1			I-91図593					
A・B地区西群	1					I-74図363			
A・B地区西群	1					I-46図147			
C地区	2						Ⅱ-52図450	Ⅱ-45図327	
E地区	2						16図11	36図33	
C地区	2							Ⅱ-26図65 Ⅱ-52図451	
C地区	1						Ⅱ-45図321		
C地区	1							Ⅱ-17図25	
A・B地区西群	2			I-73図325 I-96図694					
A・B地区東群	1	I-85図519							
E地区	1			64図152					
C地区	1			Ⅱ-25図54					
C地区	1					Ⅱ-49図400			
A・B地区西群	1					I-14図25			
A・B地区西群	1					I-21図88			
C地区	1							Ⅱ-45図326	
C地区	1							Ⅱ-46図341	
A・B地区西群	1							I-72図328	
C地区	6		1	3			1	1	
A・B地区東群	9		1	4	1	1	2		
A・B地区西群	15	1	3	4	4	4	2	1	
E地区	9		2	5	1	2			

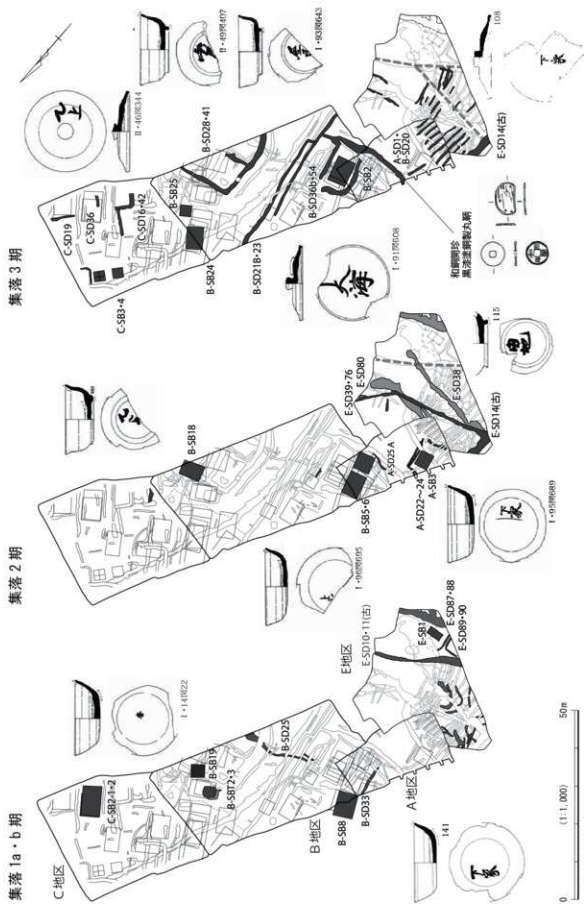
区のみで確認できる。「屋東」「屋□」は集落3期～5期に少数出土する。「寺」は、集落5期にA・B調査区で限定的に出土、仏器的な土師器大型盤や灯明痕をもつ坏蓋、「日」「知」等の文字の存在等から、近接して「堂」のような村落内寺院が存在したと考えられる。集落4期にA・B地区西群で確認できる「榎野一」「二」も「榎野」という施設に関する可能性をもつが、類例の増加を待ちたい。「小庭」は施設名または人名と考えられる。集落3・4期に確認できる「大海」は、現在の邑知湯または人名と考えられる。人名に関連する文字は「万呂」「小足」「忍人」「足女」「若枝」「□□(刀自カ)」が集落2期～5期に散見できる。「忍人」は、市教委調査出土「思人」の存在から「思人」の可能性をもつ。吉祥句的要素の強い文字は、集落1期に「□(吉カ)」、集落2期に「大」「大成」、集落4期に「吉継」「満」、集落5・6期に「福」「福□」が点在する。「満」と記された須恵器無台盤は、B-SB9柱穴P174出土であり、柱抜き取り後に正位で埋納される。管理的要素が強いとされる記号的文字は、集落1・2期に「+」、集落5・6期にC地区で「||」「|||」「||」が出土するが、それほど目立つ存在ではない。

**主要遺構の変遷** 集落時期ごとに4つの建物域を中心に主要遺構の変遷を概観する(第79・80図)。

**【集落1期】** 本遺跡南側に位置するA～C・E地区で集落域が形成される時期で、田嶋氏編年Ⅱ<sub>3</sub>期以降と考えられる。本遺跡D地区第Ⅳ面や、北側に隣接する四柳ミッコ遺跡で、田嶋氏編年Ⅱ<sub>1</sub>期頃以降の遺構・遺物が出土することから、おそらく北側や東側の微高地上で営まれた集落中心域から派生する形で扇状地南側での土地利用が始まったと考えられる。建物域は、C地区群(C-SB2-1・2)、B地区東群(SB19、SBT2・3)、A・B地区西群(SB8)、E地区南西(SB1・SD89・90)の4ヶ所に点在し、集落2期以降に継続する土地利用の原型が成立することに加え、羽咋市教委調査区を含めて小扇状地のほぼ全域に集落域が広く展開する意味で大きな画期の一つといえる。周辺遺跡も田嶋氏編年Ⅱ<sub>3</sub>期以降に集落形成が始まる傾向があり、邑知湯東縁部で集落形成が活発化する時期と推測できる。ただし、本遺跡南側の4ヶ所の各建物は、統一性・計画性に乏しい印象があり、一定の土地割りのもと個別の理由に基づいた空間利用であったと考えられる。C地区群のC-SB2-1(3×3・2間、29.1㎡)、C-SB2-2(4×3間、43.7㎡)が梁間3間の伝統的な建物プランを示すのに対して、A・B地区西群のB-SB8(2間以上×2間、20.8㎡以上)は梁間2間の建物である。E地区出土の「下家」墨書から、B-SB8を含むA・B地区西側群の建物域に「上家」「下家」と呼ばれる公共性をもつ特定施設が成立した可能性が高い。B地区東群のB-SB19(12.3㎡)とB-SBT2・3(7.6㎡・5.5㎡)は、その規模から2棟1対の作業場的な利用を復元できる。E-SB1・SD89・90の建物域も同様な位置付けが可能であり、その地勢に起因するのか短期間で廃絶する。その後、E地区の土地割り軸のひとつであるE-SD10・11(古)が掘削され、建物域以外としての利用に転じる。

**【集落2期】** 集落1期に成立した集落域のうち、C地区群で建物が復元されていないものの、出土遺物から基本的に3つの建物域は継続すると考える。B地区東群のB-SB18(23㎡)1棟に対して、A・B地区西群には2棟1対のB-SB5・6(20.7㎡・27.9㎡)、方形の溝で区画するA-SB3(2×2間、14.4㎡)が確認できる。A・B地区西群は、包含層出土の「上□(家カ)」「下家」墨書から、特定施設としての機能を代替後も維持したと考えられる。E地区傾斜地は基本的に空閑地であり、自然地形を利用した溝E-SD80・38を、A・B地区西群の建物主軸方位を強く意識した直線的な溝E-SD39・76・14(古)に置き換え、A・B地区西群の建物域の南辺を画する。出土遺物量は急増し、本遺跡で広範に出土する「乙上」「田地」、人名と推される「小庭」「万呂」「□足」、吉祥句的要素の強い「大」「大成」等の多種の墨書が認められる。また、壙型滓に代表される鉄滓の広範な出土から、当期以降に小鍛冶作業が始まったと考えたい。





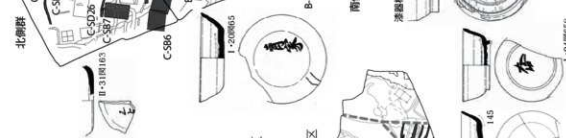
第79図 A～C・E地区家園区1(縮尺1/1,000)

和銅開元 黒漆土器製丸形

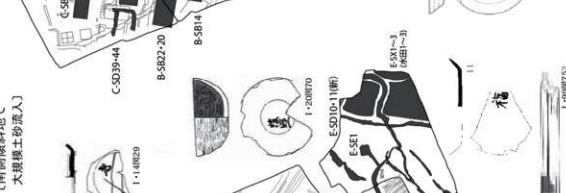
集落4期



集落5期



集落6期



第80図 A～C・E地区家屋図2 (縮尺1/1,000)

【集落3期】 南北方向に延びる溝B-SD28・41を基軸として3つの建物域は一体性を増し、E地区では耕作地(畠地)としての利用が始まる。また、「家」「屋東」「下家」「青」といった特定施設を示す墨書の出土や、土地割りを示す溝の卓越が始まる時期でもある。C地区群は、B地区東群、A・B地区西群と異なる主軸方位(土地割り)をもつ。小規模倉庫群と考えられるC-SB3(総柱建物)、C-SB4(側柱建物)が並列する他、調査地区東側を中心に方位を合せた小規模な溝が確認できる。文字資料では「家」墨書が出土しており、集落4期まで「家」と呼ばれる何らかの特定施設が近接した可能性を示す。一対をなすB-SB24(4×3間、30.1m)・B-SB25(1×1間、9m)は、前者が主屋となり、建物主軸方位からC地区群との関連が強いと考えられる。B地区東群は復元建物がなく、長方形を指向するB-SD28(B)・41(B)よりなる区画が成立し、この区画は集落4期まで存続する。溝で画される範囲は、南北方向約20m以上×東西方向15m以上を測る。A・B地区西側群は、南側で規模を縮小しつつ、直線的な溝による区画が明確化する。画される範囲は南北方向が約30m以上、東西方向がE-SD14(古)を西辺とすれば約35mを測る。区画内南東辺に寄って、四方を溝(A-SD1、B-SD20・36b・54)で区画する建物B-SB2(4×3間、26.9m)が建てられる。A-SD1・B-SD20から和同開珎、黒漆塗りの銅製丸靱裏金具各1点、「□上」「足女」「小足」「田地」墨書、円形曲物が、B-SD36bから「乙上」墨書が出土することから、何らかの特定機能を担った建物の可能性をもつ。A・B地区西側群周辺からは「下家」墨書に加え、「青」(集落5期出土「青家」墨書の省略形か)が出土しており、扇状地南側に新たな特定施設が設置されたと考えられる。E地区では、E-SD14(古)を含めた一定の土地割りのもと、集落4期まで耕作に伴う小溝群が存続する。E地区南東側における耕作域の展開は、集落5期の水田化に伴う土地造成のため判然としない。

【集落4期】 集落3期の様相が基本的に継承される。C地区群は、C-SD23の存在から少なくとも西寄りに建物は存在しないようだ。包含層からは前期と同じく「家」「屋」「墨書」を含む量の遺物の出土をみる。B地区東群は区画溝を維持し、B-SD27がB-SD28の西側約2mに並行して掘削され、その間は道路様の空地となる。B地区東群とA・B地区西群を分ける溝は、地形に沿うように屈曲するB-SD16・C-SD23に掘り直され、A・B地区西群の敷地は北側及び東側に大きく拡張される。A・B地区西群では、主屋の建物(B-SB7・10・12・15、15～25m<sup>2</sup>)と副屋・雑倉の建物(B-SB11・13、8～11m<sup>2</sup>)が南北方向で雁行するように展開し、B-SB12北東側約2mに横板組隅柱留め井戸B-SE1が掘られる。A・B地区西群周辺の出土遺物は、集落3期の様相を継承し、「乙」「上家」「下家」「青」「大海」「小足」「足女」墨書や木沓を含む。新たな要素としては、施設関連と考えられる「榎野一」墨書、吉祥句的要素の強い「吉継」「満」墨書がある。E地区も集落3期の様相が維持され、耕作地(畠地)に利用される。

【集落5期】 集落4期までの3つの建物域は、南北2つの建物域(南側群・北側群)に再編される。また、E地区では畠地が放棄される一方、南東側を造成して水田施設、簡易な井戸がつくられる。北側群では、主屋の建物6棟が復元でき、B-SB23(4×3間、43m<sup>2</sup>)が最大棟、C-SB7(3×2間、26.4m<sup>2</sup>)が最小棟となる。南側群では、主屋の建物3棟、倉庫様の堅穴建物1棟が復元できる。A-SB1(3×3間、29.3m<sup>2</sup>)は、造営時に整地を行い、建物廃棄の際に柱穴P1に打ち割った須恵器短頸壺、P2に漆器碗を自然石とともに埋納することから、重要な建物であった可能性をもつ。施設に関する文字資料は、北側群で「家」墨書、南側群で「上家」「下家」墨書が確認できなくなる一方、南側群で「青家」「屋東」「榎野」墨書が存続、新たに「寺」墨書の出現等、建物域の再編に併せて施設の再編が行われた可能性が高い。「寺」墨書は、仏器的遺物の出土からも近接して「堂」のような村落内寺院が存在を示すものとなる。吉祥句的な「福」、管理機能が強いとされる記号様の「|||」墨書も出土する。なお、E地区出土遺物の状況から、調査区外東側(山側)にも一定規模の建物域が想定できる。

〔南側土砂流入〕 B地区南側・A・E地区が、おそらく大雨等に起因した調査区外東側(山側)からの大規模な土砂流入により短期間に埋没する。埋没時期は、田嶋氏編年VI<sub>2</sub>期初め頃を想定したい。E地区水田では被災直後の復旧作業痕を復元できるが、最終的に水田耕作は放棄される。

〔集落6期〕 大規模な土砂流入の影響を受けて、南側群の建物域、E地区の耕作域は放棄される。存続した北側群の建物域では、東西棟を主体とする建物6棟が確認できる。主屋の建物には、C-SB5(3×2間、25m)、C-SB8(3×3・2間、28.8m)、B-SB14(4×3・2間、30.2m)、B-SB20(3×2間、20m)に加え、本道跡でも最大規模の平面積66m以上を測る長舎建物B-SB22が存在する。B-SB22は桁行6間以上×梁行3間の平面プランで、東側2間分が総柱となる。柱配置から、異なる2つの機能を付した特殊な建物と考えられるが、その位置付けは類例の増加を待ちたい。墨書土器は数量を大きく減らし(第24表)、文字内容では「寺」墨書は確認できず、「青」「福□」や記号様墨書が中心となる。また、県調査F地区のような施釉陶器の出土はなく、C地区における中世の開田に伴う造成を考慮しても、当該期の遺物量として、かなり少ない印象を受ける。この扇状地南側における集落域の下限は、田嶋氏編年VI<sub>2</sub>期と考える。なお、田嶋氏編年VI期以降、北側の県調査F地区や市教委第4次調査第I地区・第II地区(第1図)で活発な集落形成が確認でき、集落形成中心域が扇状地中央部に集約された可能性が高い。

以上、E地区を中心とした小扇状地南側の集落域・耕作域の変遷概要を述べたが、第7次調査までの正報告を待って、小扇状地全体の中で改めて位置付けを行いたい。

#### (註)

- (1) 古代～中世初期の土器については、田嶋明人氏が提示した土器編年軸・暦年代観で記述する(引用・参考文献1・10)。暦年代観は、概ねⅠ期を7世紀初頭～中葉、Ⅱ期を7世紀3/4四半期～8世紀前葉、Ⅲ期を8世紀2/4四半期～中頃、Ⅳ期を8世紀3/4四半期、Ⅴ期を8世紀4/4四半期～9世紀初頭、Ⅵ期を9世紀前葉(810～840年頃)、Ⅶ期を9世紀中頃～3/4四半期(840～870年頃)、Ⅷ期を9世紀3/4～4/4四半期(870～900年頃)、Ⅷ<sub>2</sub>期を10世紀前葉(900～930年頃)、Ⅷ<sub>3</sub>期を10世紀中葉(930～960年頃)、Ⅷ<sub>4</sub>期を10世紀後葉～11世紀前葉、中世1-Ⅰ期を11世紀中葉～後半、中世1-Ⅱ期を11世紀末～12世紀中頃となる。また、須恵器出現期以降の土師器については、成形時におけるロクロ台の使用の有無から「ロクロ土師器」と「非ロクロ土師器」に、両者を指す場合には「土師器」と記載している。また、須恵器の重ね焼き分類は、引用・参考文献2に依る。
- (2) 調査終了時点で、SX1～3を被覆する固く締まった炭粒が混ざる淡灰緑～褐色砂質土を整地土と評価した(引用・参考文献6)。現時点では、調査区全体を被覆する流入・堆積土と、SX1における復旧作業及PSX1～3での整地作業の実施という解釈は矛盾するため、短期間(おそらく数日程度)のうちに2回の土砂の流入・堆積があり、1回目の土砂流入(シルト～砂主体)はSX1で復旧作業を可能とするような小規模な災害、2回目の流入土(粗砂～砂利、砂質土主体)は遺構面全体を被覆し、耕作を放棄させるような大規模な災害を想定したい。
- (3) 註(1)と同じ。
- (4) 高倉となる総柱建物については、①鹿島バイパスに伴う調査区が小扇状地下半部に位置し、より高乾・安定した調査区外東側(現四柳町集落と重畳)等に存在、②高倉となる総柱建物は耕作域や搬出の便から旧邑高湯により近い高地に存在、③高倉となる総柱建物が少ない集落等の理由が考えられる。本道跡の集落規模規模からとみて、①または②の可能性が高いように考えるが、類例の増加を待ちたい。

#### (引用・参考文献)

- 1 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』
- 2 北野博司他 1988『辰口西部道跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
- 3 今井淳一 1990『四柳白山下道跡Ⅰ』羽咋市教育委員会
- 4 今井淳一他 1991『四柳白山下道跡Ⅱ』羽咋市教育委員会

- 5 今井淳一・牧山直樹 1994「四柳白山下遺跡Ⅲ」羽咋市教育委員会
- 6 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1996「社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報8」
- 7 布尾和史・澤辺利明他 2005「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 8 澤辺利明他 2006「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 9 牧山直樹・宮下栄仁 2008「四柳白山下遺跡Ⅳ」羽咋市教育委員会
- 10 田嶋明人 2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の編年」加賀 横江荘遺跡 白山市・白山市教育委員会
- 11 林 大智他 2015「羽咋市 四柳ミッコ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景(平成7年度撮影、南から)



遺跡遠景(平成7年度撮影、西から)



第Ⅱ面完掘状況(東から)



第Ⅱ-2面完掘状況(北西から)



第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況(北東か5)



第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況(南西か5)





第IV面完掘状況(西から)



南壁土層断面B(北から)



南壁土層断面D(北から)



第Ⅱ面完掘状況(南から)



第Ⅱ面完掘状況(北西から)



第Ⅱ面完掘状況(西から)



第Ⅱ面O・P-4-5区平坦面1・2、SD1完掘状況(東から)



第Ⅰ面O・P-4-5区平坦面1・2発掘状況(西から)



第Ⅰ面O・P-4-5区平坦面1～3発掘状況(南西から)



第Ⅱ面表土除去作業風景(南西から)



第Ⅱ面遺構検出作業風景(北西から)



第Ⅱ面O-P-4～6区掘り下げ作業(南から)



第Ⅱ面O-4区SD1土層(h-h') (東から)



第Ⅱ面O-P-4-5区平坦面2、SD1完掘状況(東から)



第Ⅱ面N-O-4区SD1完掘状況(西から)



第Ⅱ面O-4区SD2完掘状況(南東から)



第Ⅱ面O-P-3-4区平坦面1～4、SD2完掘状況(西から)



第Ⅱ面O・P-4-5区平坦面1～3発掘状況(南から)



第Ⅱ面N-4区平坦面2-6間土層断面(北から)



第Ⅱ面M・N-4-5区平坦面2-5-6周辺発掘状況(北西から)



第Ⅱ面O・P-4区平坦面3発掘状況(南から)



第Ⅱ面M・N-5-6区平坦面5-6周辺発掘状況(北から)



第Ⅱ面M・N-4-5区平坦面7-8発掘状況(北から)



第Ⅱ面M-3区平坦面8西端畦土層断面(北から)



第Ⅱ面M・N-3-4区平坦面8発掘状況(北から)



第Ⅱ-1面O-5区掘り下げ作業風景(北から)



第Ⅱ-1面遺構検出状況(第Ⅱ面耕作土除去状況、北から)



第Ⅱ-1面N-4-5区SD4検出状況(北から)



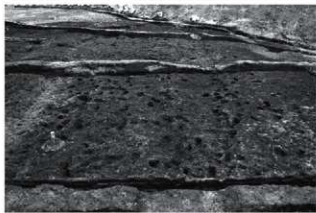
第Ⅱ-1面N-4区SD4完掘状況(西から)



第Ⅱ-1面M・N-3・4区SD5周辺完掘状況(北西から)



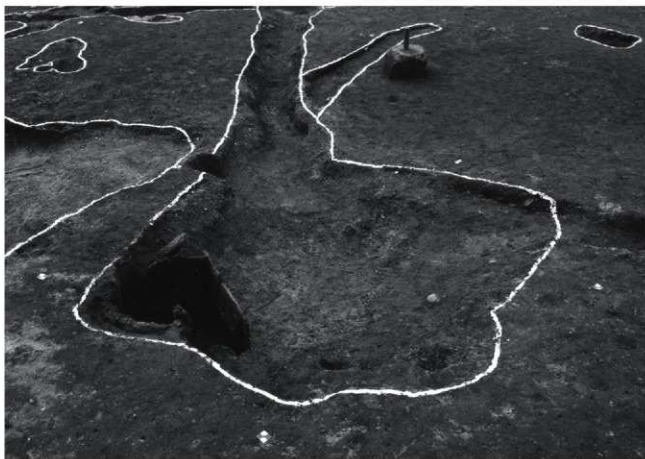
第Ⅱ-1面N・O-3・4区SD5・7完掘状況(南東から)



第Ⅱ-1面M・N-3・4区周辺完掘状況(北から)



第Ⅱ-1面O-3区周辺完掘状況(北東から)



第Ⅲ-2面N-4・5区SE1、SD17発掘状況(東から)



第Ⅲ-2面N-4・5区SE1土層断面(北東から)



第Ⅲ-2面N-4・5区SE1、SD17発掘状況(西から)



第Ⅲ-2面N-5区SE1発掘状況(東から)



第Ⅲ-2面N-5区SE1発掘状況(北から)





第Ⅲ-2面O-P-4-5区SX1検出状況(東から)



第Ⅱ-2面O-P-3~5区SX2-3検出状況(南西から)



第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況(北東か5)



第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況(南西か5)



第Ⅲ-2面O・P-3～5区SX1～3完掘状況(北から)



第Ⅲ-2面O・P-4-5区SX1、SD8完掘状況(南東から)



第Ⅲ-2面O・P-3・4区SX2完掘状況(北東から)



第Ⅲ-2面O・P-4-5区SX1掘り下げ作業風景(北東から)



第Ⅲ-2面O・P-4-5区SX1耕作痕跡検出状況(北東から)



第Ⅲ-2面O-3-4区SX3耕作痕跡検出状況(南西から)



第Ⅲ-2面O-4区SX3水口完掘状況(北西から)



第Ⅱ-2面O-3区SD8埋完掘状況(東から)



第Ⅱ-2面O-3区SD8埋完掘状況(南から)



第Ⅱ-2面N-3区SD8完掘状況(西から)



第Ⅱ-2面N-O-4-5区SD10周辺完掘状況(北東から)



第Ⅱ-2面N-O-3-4区SD11完掘状況(南西から)



第Ⅱ-2面N-5区SK1完掘状況(北西から)



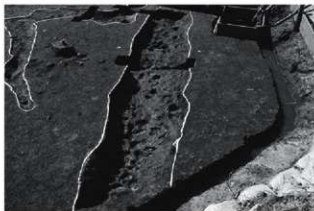
第Ⅱ-2面N-5区SK2完掘状況(北東から)



第Ⅱ-2面L-M-2-3区SD12完掘状況(東から)



第Ⅱ-2面M-3-4区SD13完掘状況(東から)



第Ⅱ-2面L-2-3区SD14完掘状況(北から)



第Ⅱ-2面L・M-3・4区SD12～14発掘状況(西から)



第Ⅱ-2面L・M-2・3区SD12～14発掘状況(北から)



第Ⅲ-2面L・M-2・3区SD12-13周辺完掘状況(東から)



第Ⅲ-2面M・N-4区SD16周辺完掘状況(南東から)



第Ⅲ-2面M・N-5区SD19完掘状況(西から)



第Ⅲ-2面N-4区落ち込み1完掘状況(北東から)



第Ⅳ面P-4区鳥形木製品出土状況(南西から)



第Ⅳ面O・P-3～6区遺構検出状況(南西から)



第Ⅳ面L・M-2・3区遺構検出状況(北から)



第Ⅳ面N-3区周辺遺構検出状況(南から)





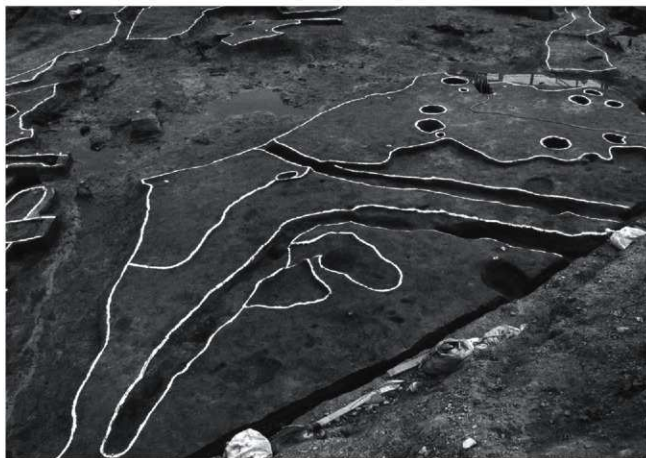
第IV面遺構検出状況(北から)



第IV面完掘状況(北から)



第Ⅳ面O-P-3-4区SB1、SD87-88周辺完掘状況(南西から)



第Ⅳ面O-3区SD89-90完掘状況(南から)



第Ⅳ面O-5区SD10(古)周辺完掘状況(北東から)



第Ⅳ面N-3区SD11(古)・53～61完掘状況(南西から)



第Ⅳ面L・M-2・3区SD14(古)・38周辺完掘状況(南から)



第Ⅳ面M-4区SD80土層断面5-5'(南西から)



第Ⅳ面N-4区SD80土層断面7-7'遺物出土状況(東から)



第Ⅳ面M-4区SD80土層断面6-6'(南西から)



第Ⅳ面N-5区SD80周辺完掘状況(北東から)



第Ⅳ面M-4区SD80周辺完掘状況(西から)



第Ⅳ面L・M-2・3区完掘状況(西から)



第Ⅳ面L・M-2・3区SD22～34周辺完掘状況(北から)



第Ⅳ面L・M-2・3区SD48～56周辺完掘状況(南から)



第Ⅳ面M・N-3・4区SD65～68完掘状況(北から)



第Ⅳ面M・N-4区SD65～72周辺完掘状況(西から)



第Ⅳ面M・N-3・4区SD67～72周辺完掘状況(北から)



第Ⅳ面M・N-5・6区SD74～79周辺完掘状況(北東から)



第Ⅳ面O-3～5区SD70・80周辺掘削作業風景(北東から)



第M面O-P-3・4区SD87・88周辺完掘状況(北東から)



第M面O-3区SD11・89・90完掘状況(南西から)



第Ⅳ面M・N-5・6区落ち込み6周辺完掘状況(北から)



第Ⅳ面O-5区P21～24完掘状況(北東から)



第Ⅳ面M-5・6区ビット群完掘状況(北から)



第Ⅳ面M-5区ビット群完掘状況(北から)



第Ⅳ面下試掘調査風景(試掘坑ア、北から)



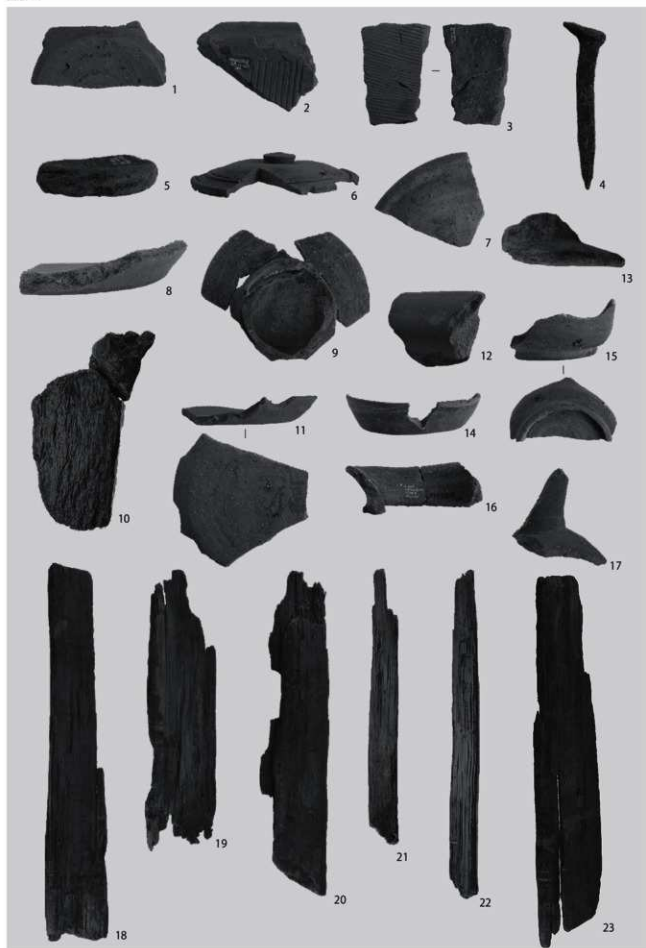
第Ⅳ面下土層試掘坑ア-②(西から)



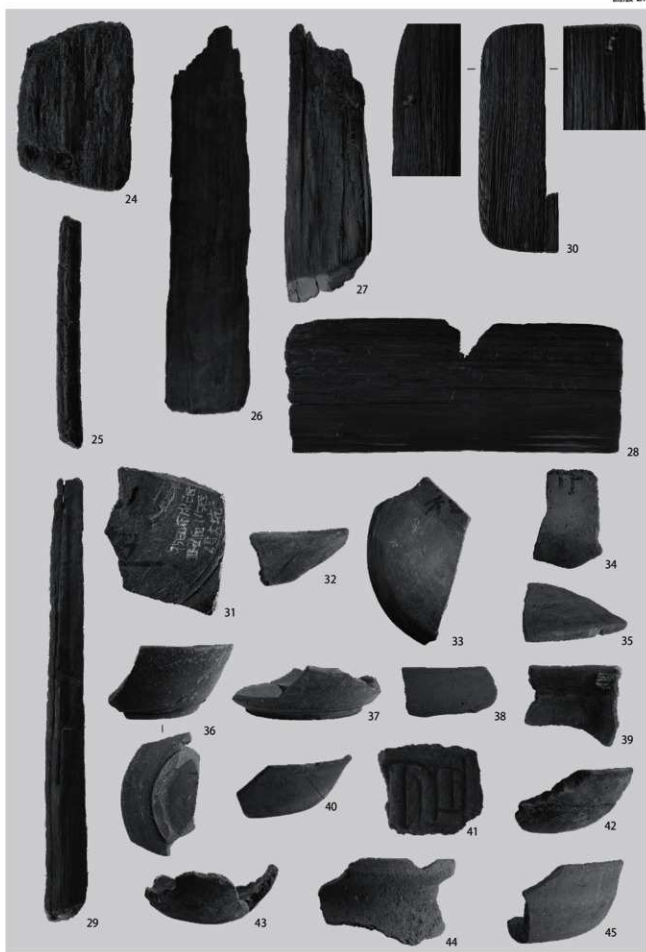
第Ⅳ面下土層試掘坑イ-④(東から)



調査区埋め戻し作業風景(北西から)

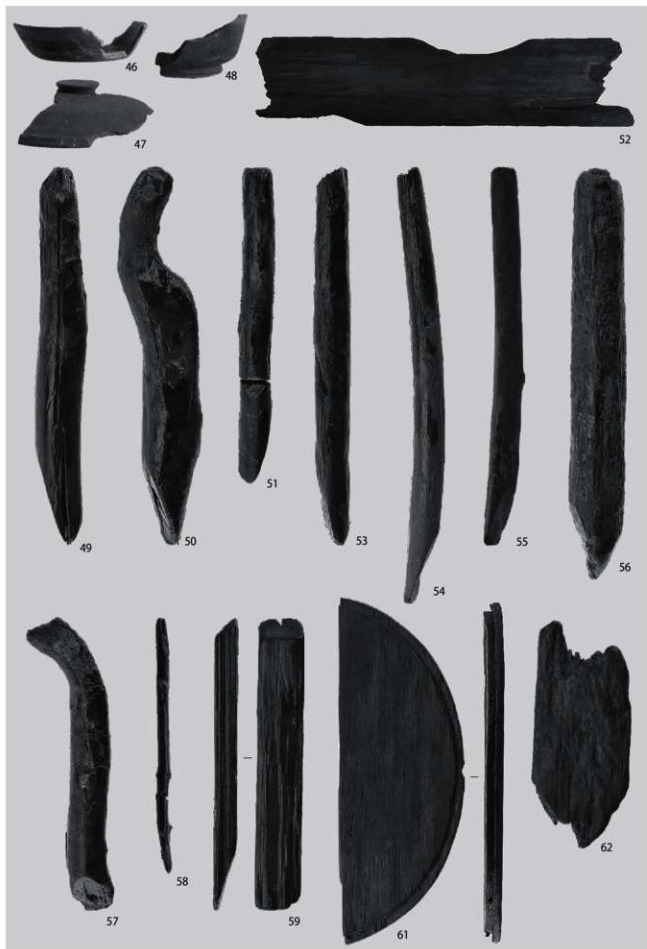


第Ⅱ～Ⅲ-2面出土遺物

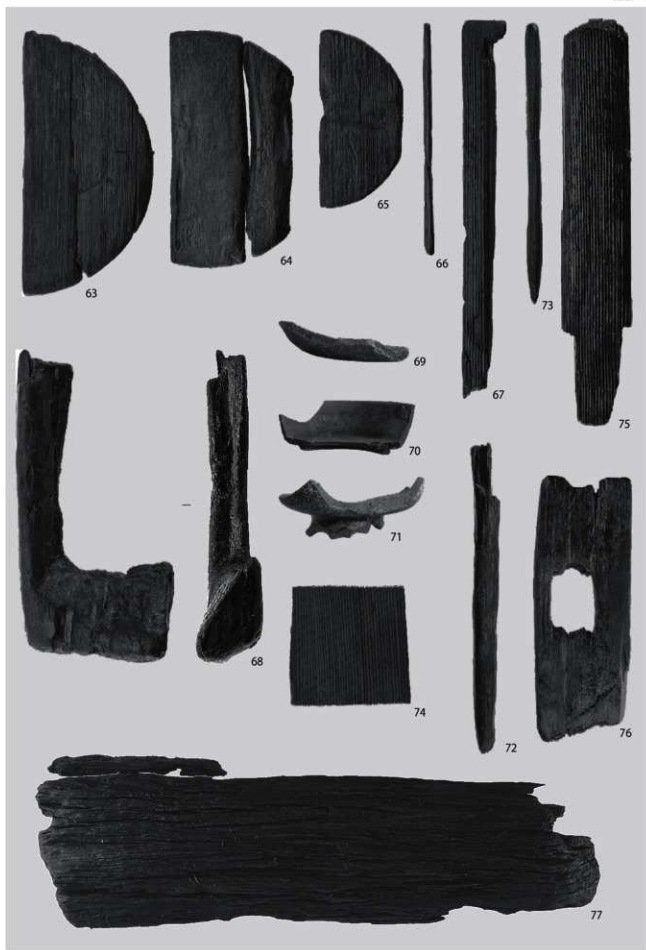


第Ⅲ-2面出土遺物1

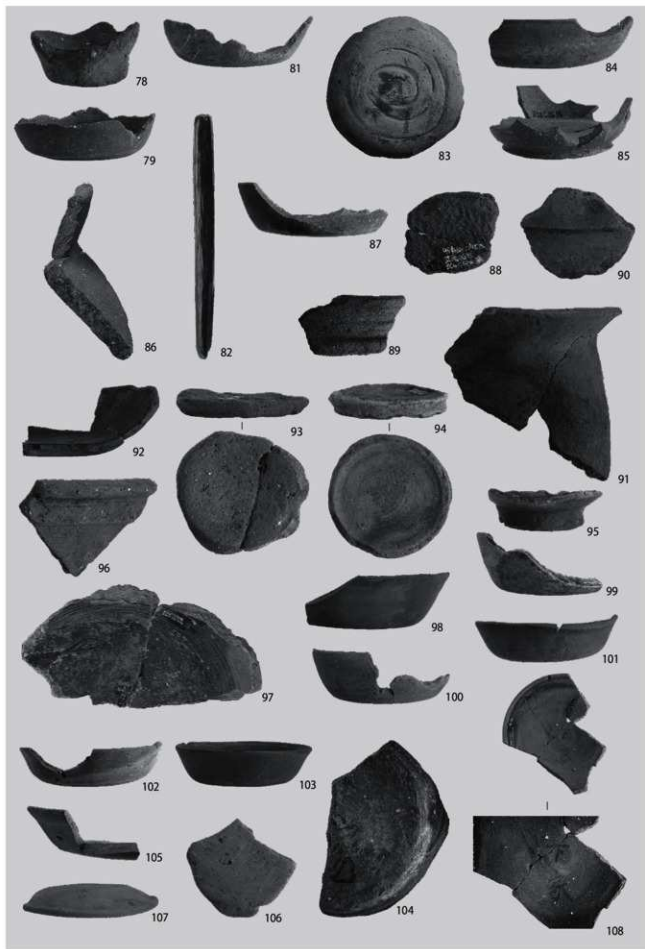




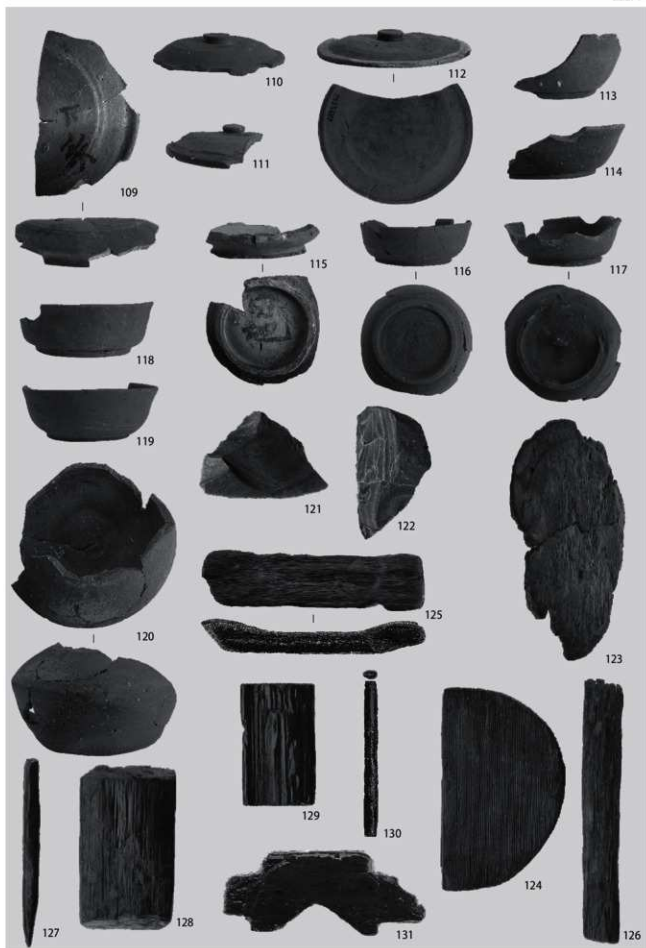
第Ⅲ-2面出土遺物2



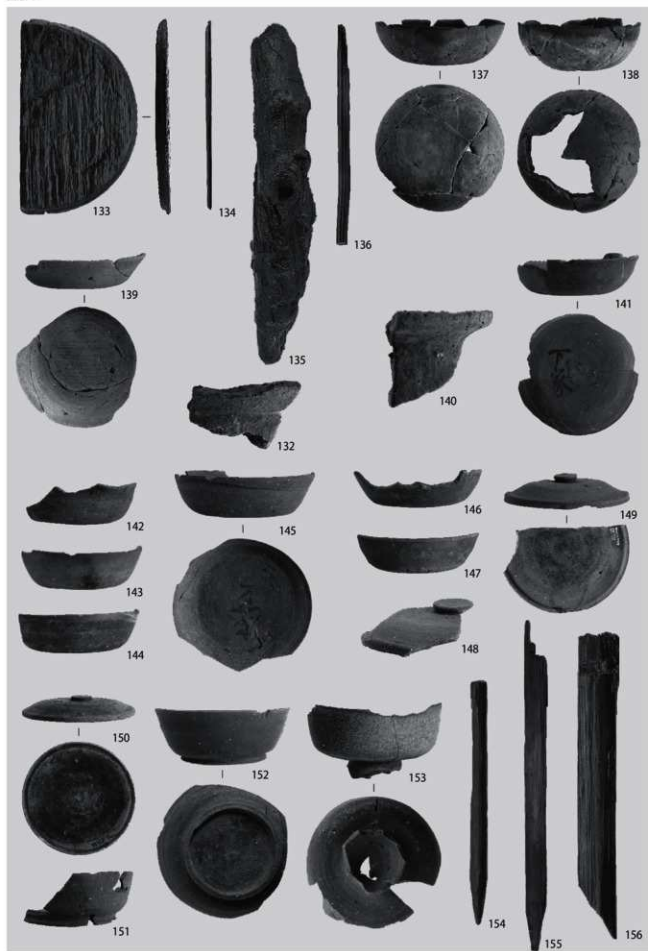
第Ⅲ-2面出土遺物3



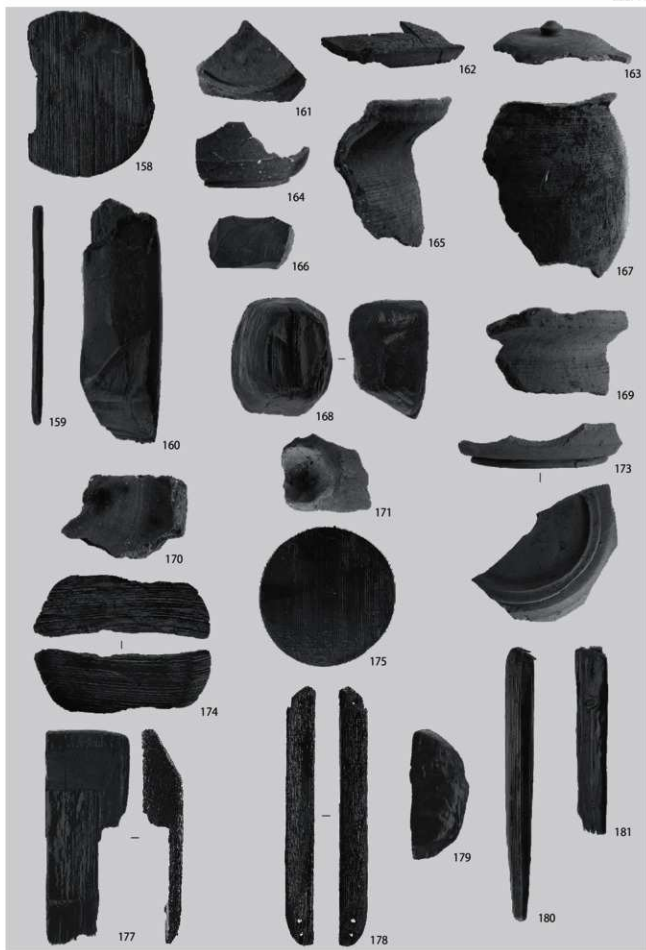
第Ⅲ-2面出土遺物4



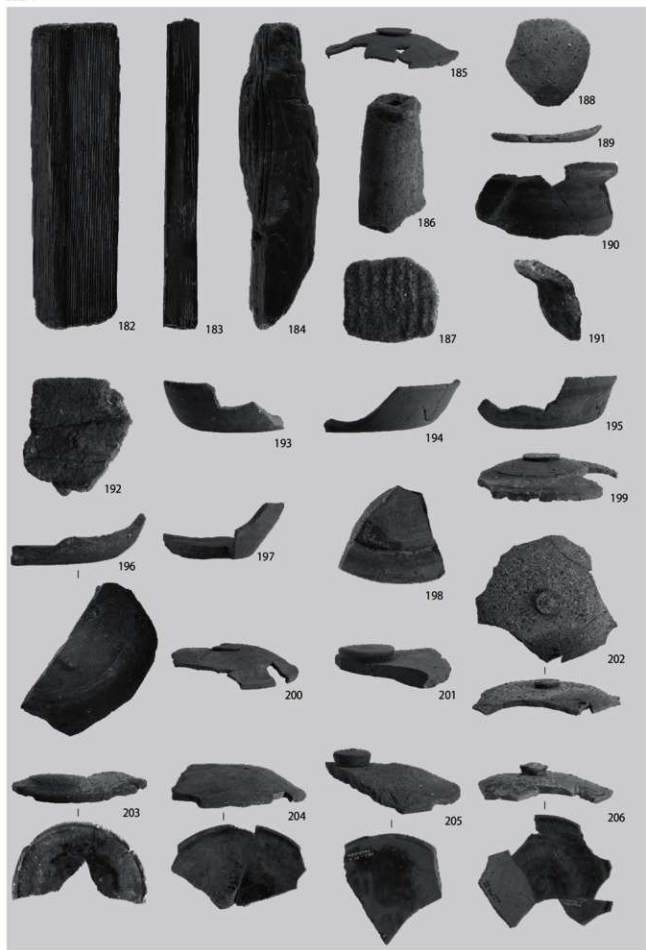
第Ⅲ-2面出土遺物5



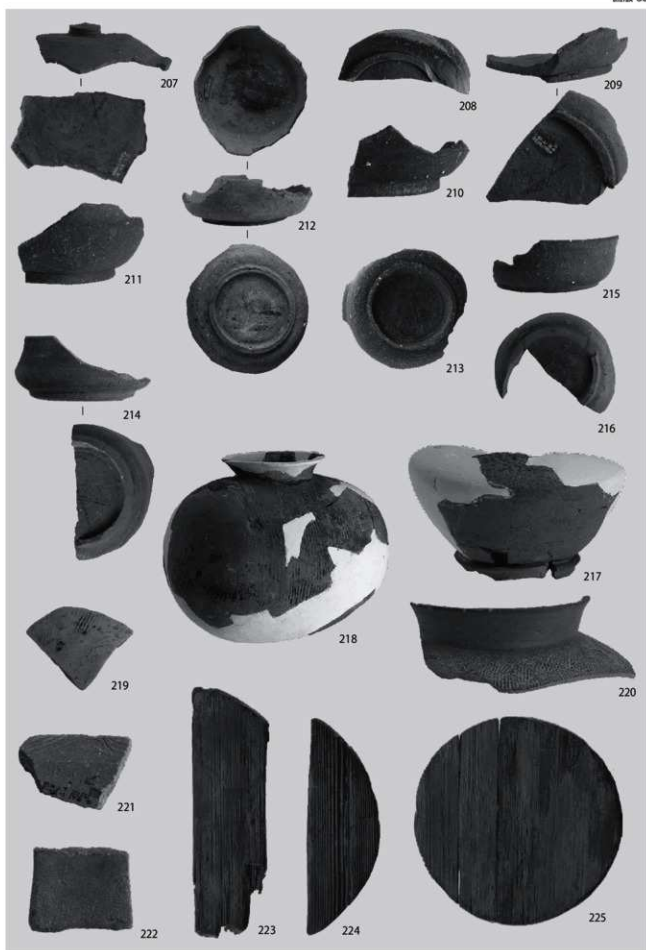
第IV面出土遺物1



第IV面出土遺物2



第IV面出土遺物3

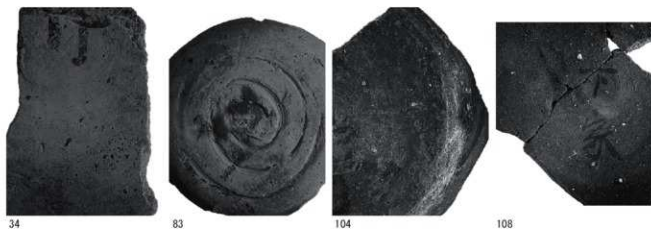


第IV面出土遺物4





第IV面出土遺物5



## 報告書抄録

ふりがな	はくいし よつやなぎはくさんしたいせきⅢ						
書名	羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅲ						
副書名	一般国道159号改築(鹿島バイパス)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	川畑 誠、布尾和史、岩瀬由美						
編集機関	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター						
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477						
発行機関	石川県教育委員会、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター						
発行年月日	平成29年2月24日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(新)	(新)		
よつやなぎはくさんたいせき 四柳白山下 遺跡	いしかわけん 石川県 はくいし 羽咋市 よつやなぎ 四柳町地内	17202	711700	36度 55分 50秒	136度 51分 15秒	19950418 ～ 19951223	3,450㎡  記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
四柳白山下 遺跡	集落跡 田畑	奈良・ 平安時代	掘立柱建物、井戸、 土坑、溝、水田、 自然流路		土師器、須恵器 木製品		平安時代前期の水田 跡等の耕作地を検出
要 約	<p>碓石ヶ峰山地西麓の複合小扇状地上に立地する縄文時代～近世初頭の複合遺跡。度重なる土砂被害に遭った各時代の遺構面が累積して確認されている。国道改築工事に係り7次にわたる発掘調査が行われ、本書は第2次調査のうちE地区の成果を報告するものである。</p> <p>調査では、奈良～平安時代前期を主体とする耕作地を4面確認した。このうち、平安時代前期の水田跡は用排水溝を伴うもので、当時の農耕技術の変遷を知ることができる。</p>						

## 羽咋市 四柳白山下遺跡

発行日 平成29(2017)年2月24日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842(文化財課)

(公財)石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address [maib@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:maib@ishikawa-maibun.or.jp)

印刷 鶴川印刷株式会社